Bill Evans:Rare Transcriptions 3

Songs	Recordings
1.Everything Happens To Me(3)	Trio '64
2.I Hear A Rhapsody(3)	At Montreux2
3.In A Sentimental Mood(3)	Complete Riverside Recordings
4.My Funny Valentine(4)	Undercurrent
5.Nardis(4)	At Montreux
6.Noelles' Theme(8) transcribed by Jed Distler	?
7.Reflections In D(10) transcribed by Jed Distler	?
8.So What(2)	Kind Of Blue
9.Someday My Prince Will Come(3)	Waltz For Debby
10.Sweet And Lovely(11)	Explorations
11.Waltz For Debby(2) piano solo	Complete Riverside Recordings
12.Waltz For Debby(4) with Cannonball	Know What I Mean
13.Waltz For Debby(3) transcribed by Jed Distler	?

●名演研究／ピアノ＝ビル・エヴァンス

Bill Evans (p)

採譜・解説＝港　大尋

美しさの中にも意外な要素

「トリオ'64／ビル・エヴァンス」
ポリドールPOCJ-1837

エヴァンスの「エヴリシング〜」はたった2コーラスだけの演奏で、テーマ〜アドリブ〜エンディングというシンプルなもの。そのうちのアドリブとエンディングだけを、今回は採譜してみた。

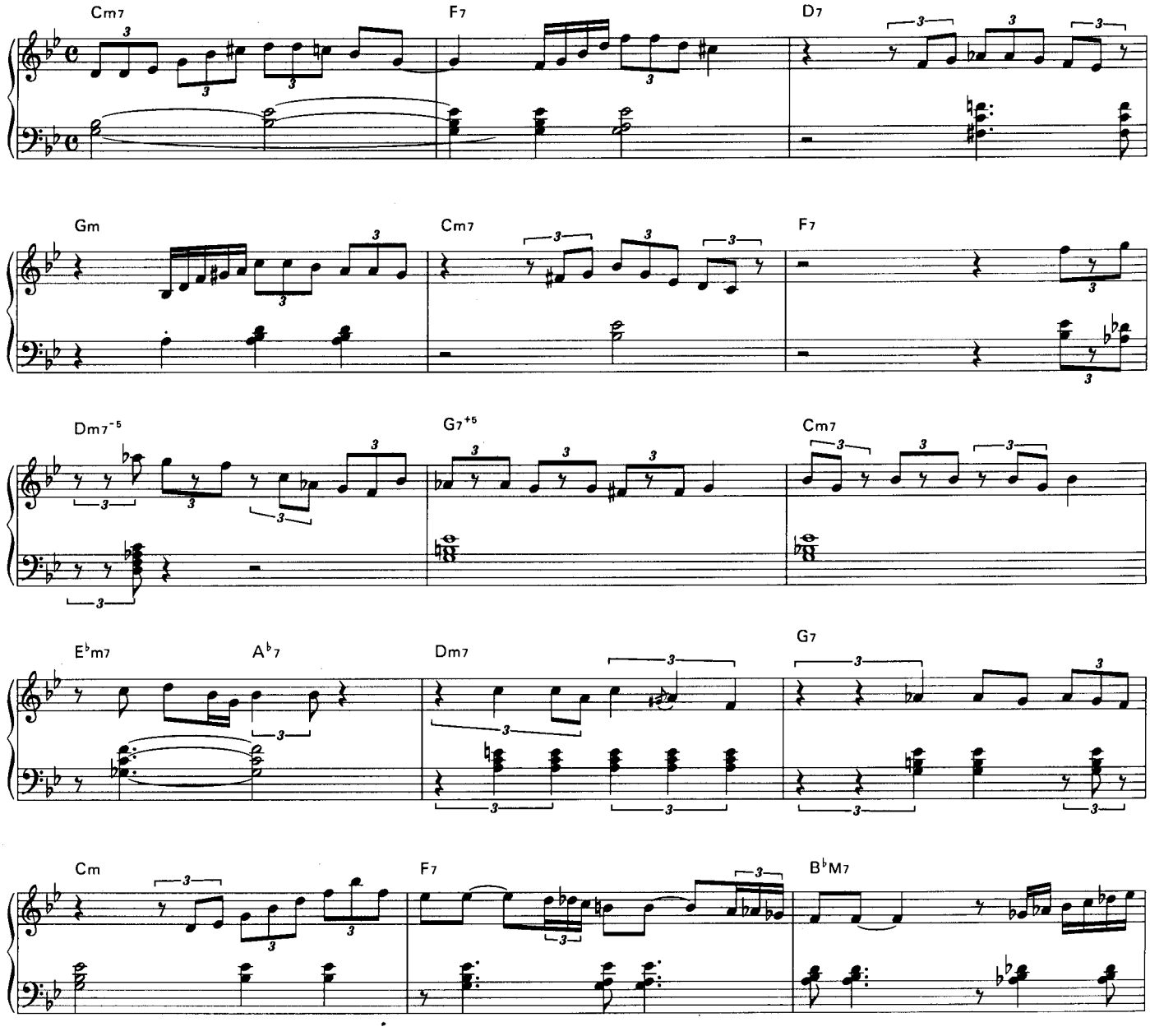
表記は倍テンになっているので、2倍のサイズにしてみた。ただ面白いのは、ベースとドラムがきっちりと倍にはなっていないところ。とりわけゲイリー・ピーコックのベース・ラインは、いわゆる“ベース・ライン”と呼べるものではなく、跳躍を多く含むメロディックなベースになっている。ここが、普通の演奏とはちょっと違うところなのかもしれない。

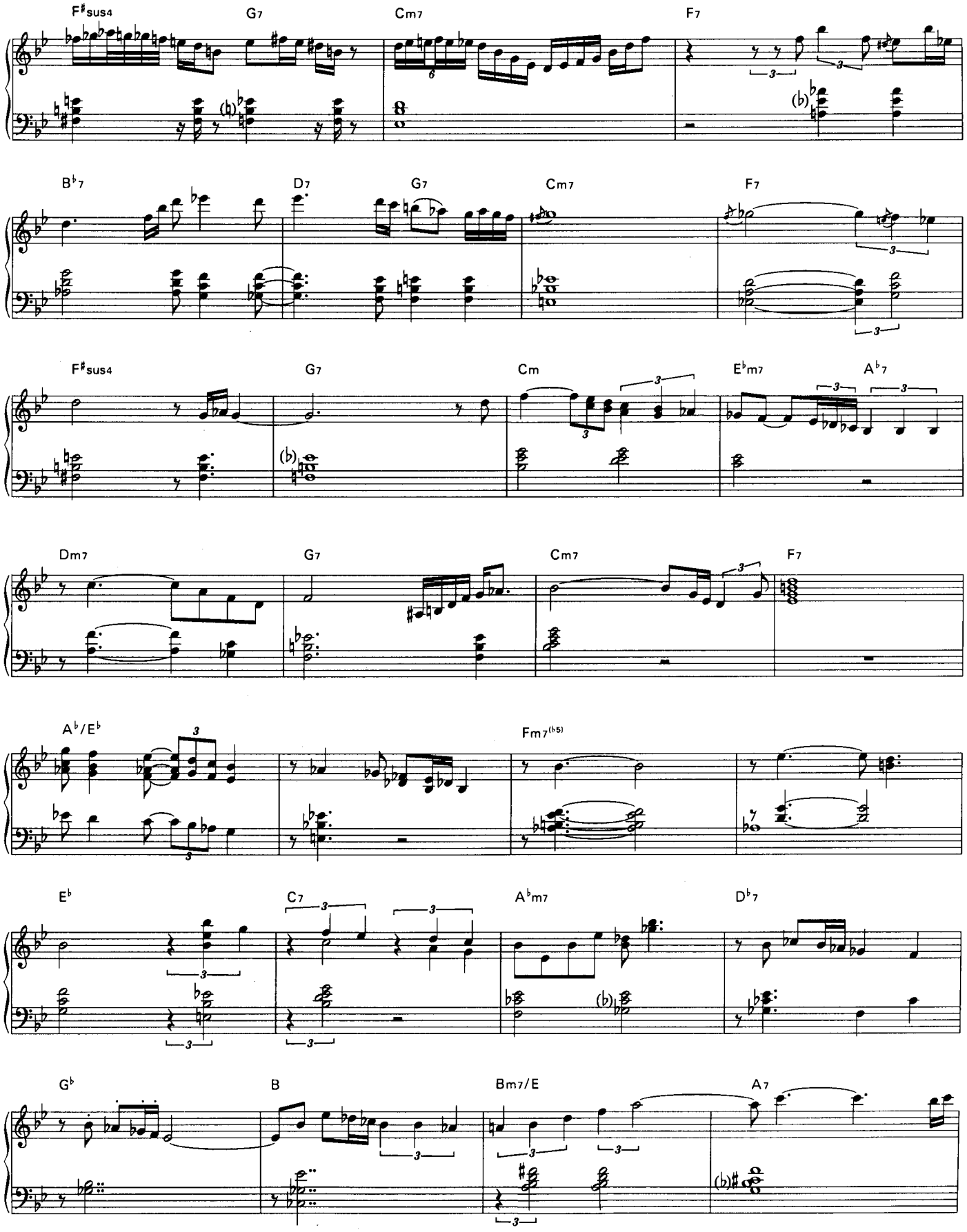
コード進行は、サビの3〜4小節（通常サイズ、以下同様）をA♭m7−D♭7−G♭△−B△というふうにリハーモナイズしており、これは今やジャズ業界では当たり前のアレンジになっている。それ以外、特に変わったことをしているわけではない。ただし、テンションの入れ方はかなり激しい(?)もの。エヴァンスならではのテンション・ノートとも言えそうだ。

さて、この曲の料理法だが、個人的にここは意外だけど美しい、と思うところがひとつ。それは、頭から5小節目の転調と次のDmで、何とも言えない不思議な進行である。テーマに含まれる音でもある6小節目の“ラ”の音は、直前のE♭m7−A♭7からは最も想像しにくい音で、ここを難なく弾いてしまったら、多分つまらないことになるだろう。

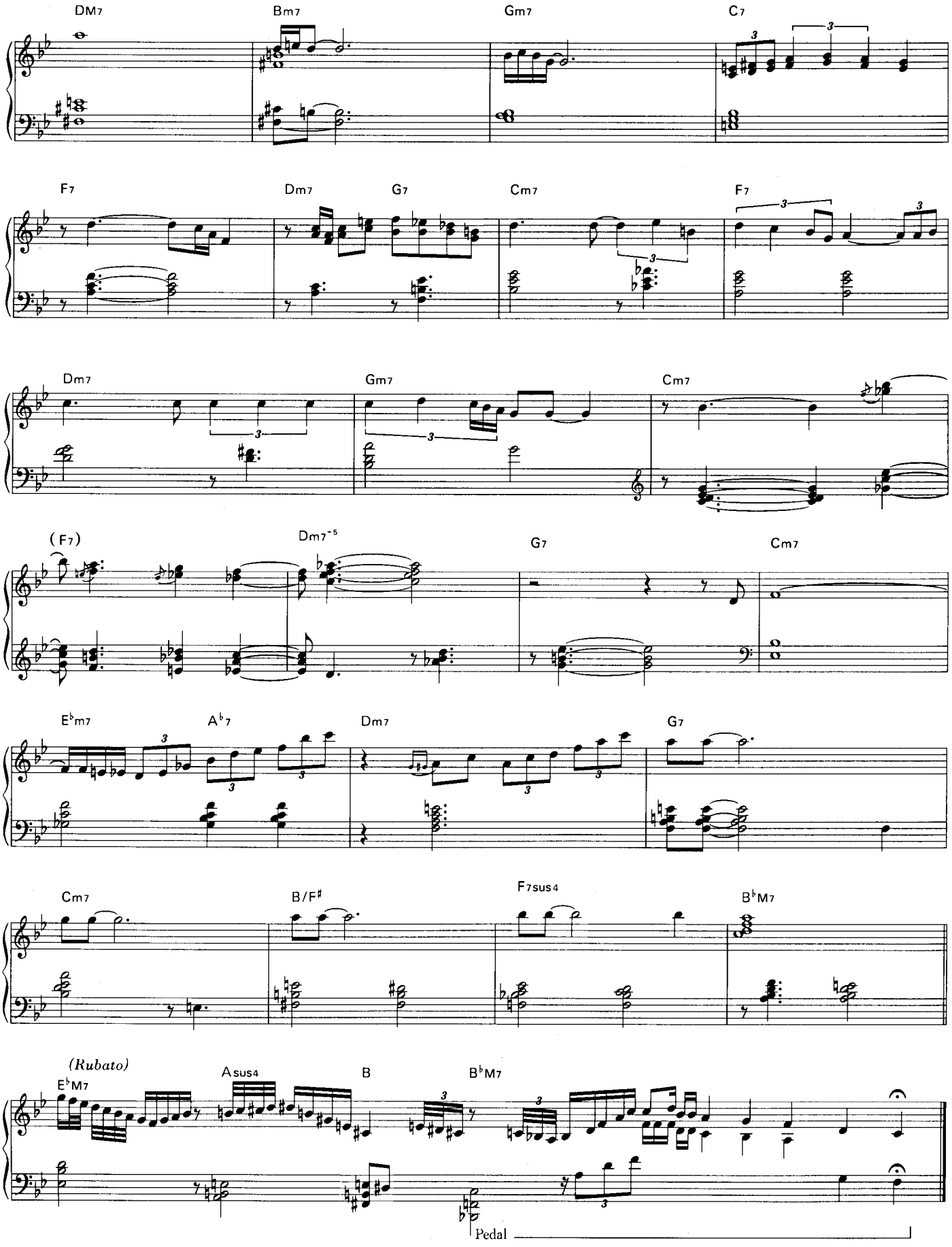
また、前述したサビの3〜4小節あたりもオイシイところだろう。この演奏では、サビ5小節目のEmをBm7/Eにしており、B△からの転調をよりスムーズにしている。このサビのハーモナイズは、工夫すればもっと面白い響きが生まれてくるはずだ。

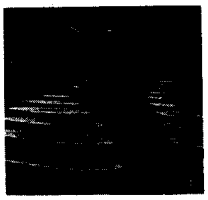
最後に、エンディング。バラッド・プレイではとりわけイントロとエンディングが大事になってくる。技巧的なものもいいし、コード進行を工夫するもよし、よくあるクリシェで終わるのもよし。エヴァンスはIV−IV♯sus−II♭−Iという進行で終わっているが、これはかなりシンプルだ。短い演奏なので、これくらいが妥当といったところか。■




F♯sus4
G7
Cm7
F7
B♭7
D7
G7
Cm7
F7
F♯sus4
G7
Cm
E♭m7
A♭7
Dm7
G7
Cm7
F7
A♭/E♭
Fm7(♭5)
E♭
C7
A♭m7
D♭7
G♭
B
Bm7/E
A7

"Everything Happens To Me"



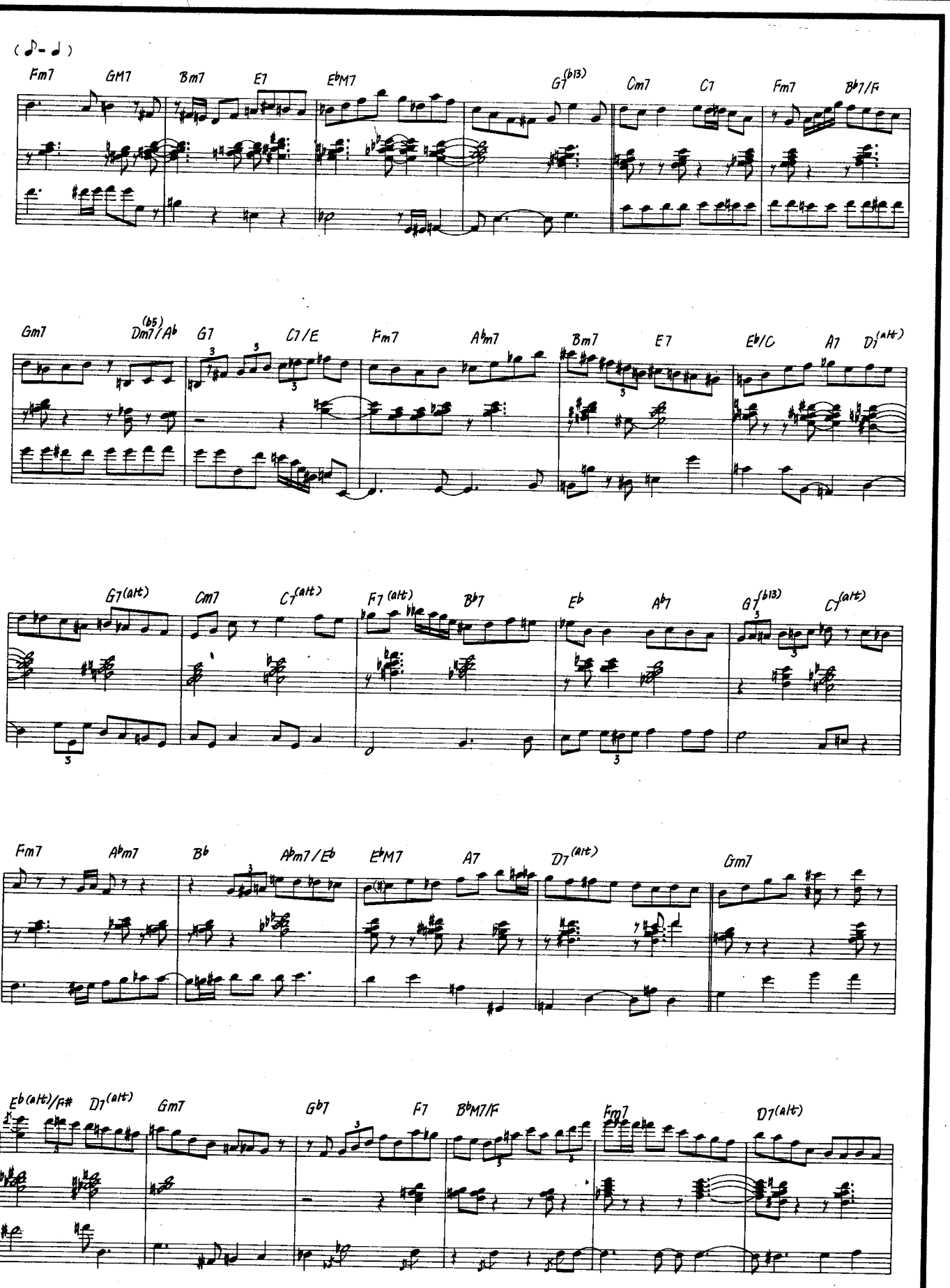


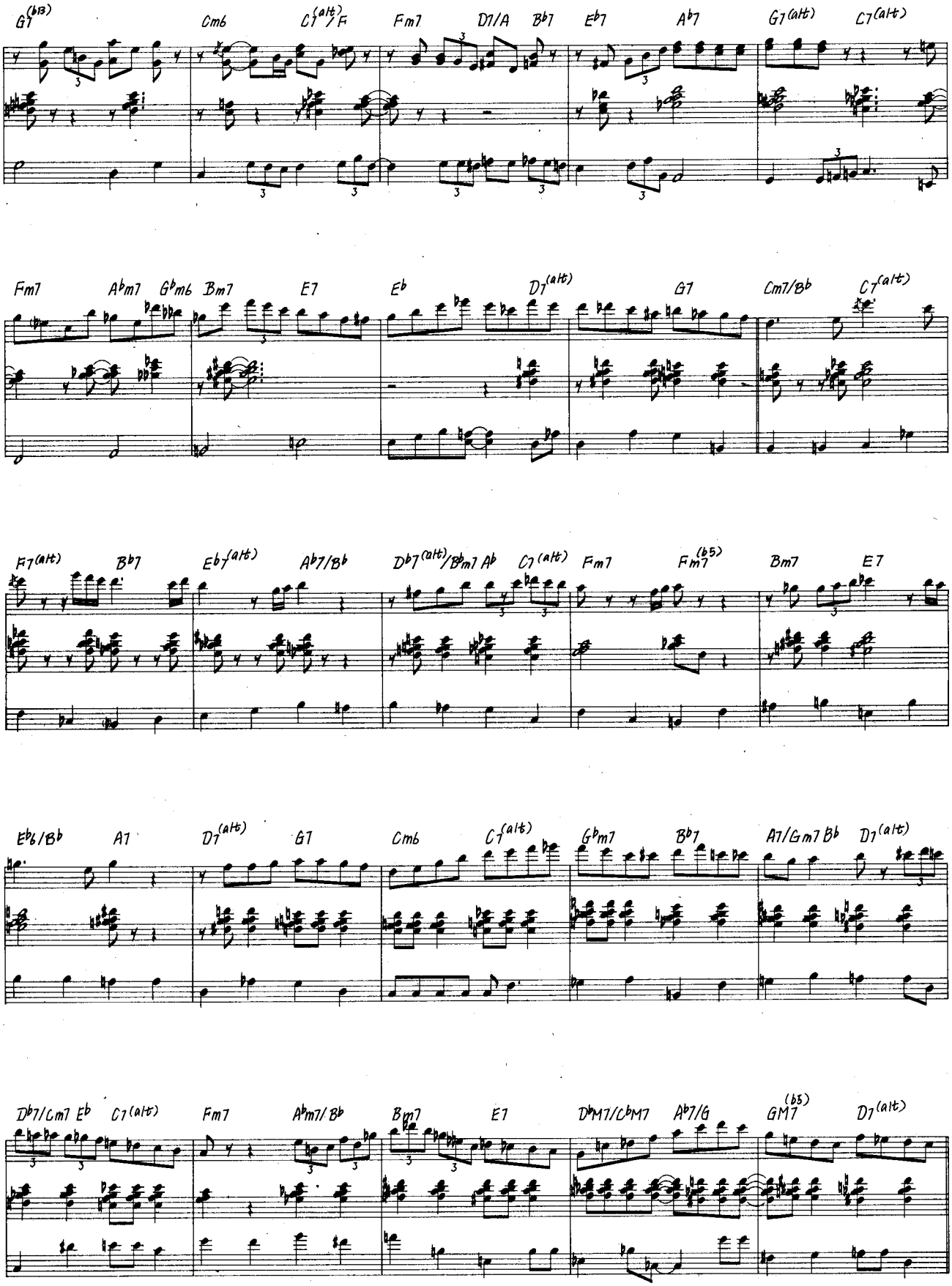
「モントルーII」
ビクター VIJ-4015

美しい名曲をエヴァンスがどう表現しているかが聴き物

I HEAR A RHAPSODY

©Screen Gems-EMI Music Inc. Rights for Japan assigned to TOSHIBA-EMI MUSIC PUBLISHING CO., LTD.


Fm7 GM7 Bm7 E7 E♭M7 G7(b13) Cm7 C7 Fm7 B♭7/F
Gm7 Dm7(b5)/A♭ G7 C7/E Fm7 A♭m7 Bm7 E7 E♭/C A7 D7(alt)
G7(alt) Cm7 C7(alt) F7(alt) B♭7 E♭ A♭7 G7(b13) C7(alt)
Fm7 A♭m7 B♭ A♭m7/E♭ E♭M7 A7 D7(alt) Gm7
E♭(alt)/F# D7(alt) Gm7 G♭7 F7 B♭M7/F Fm7 D7(alt)

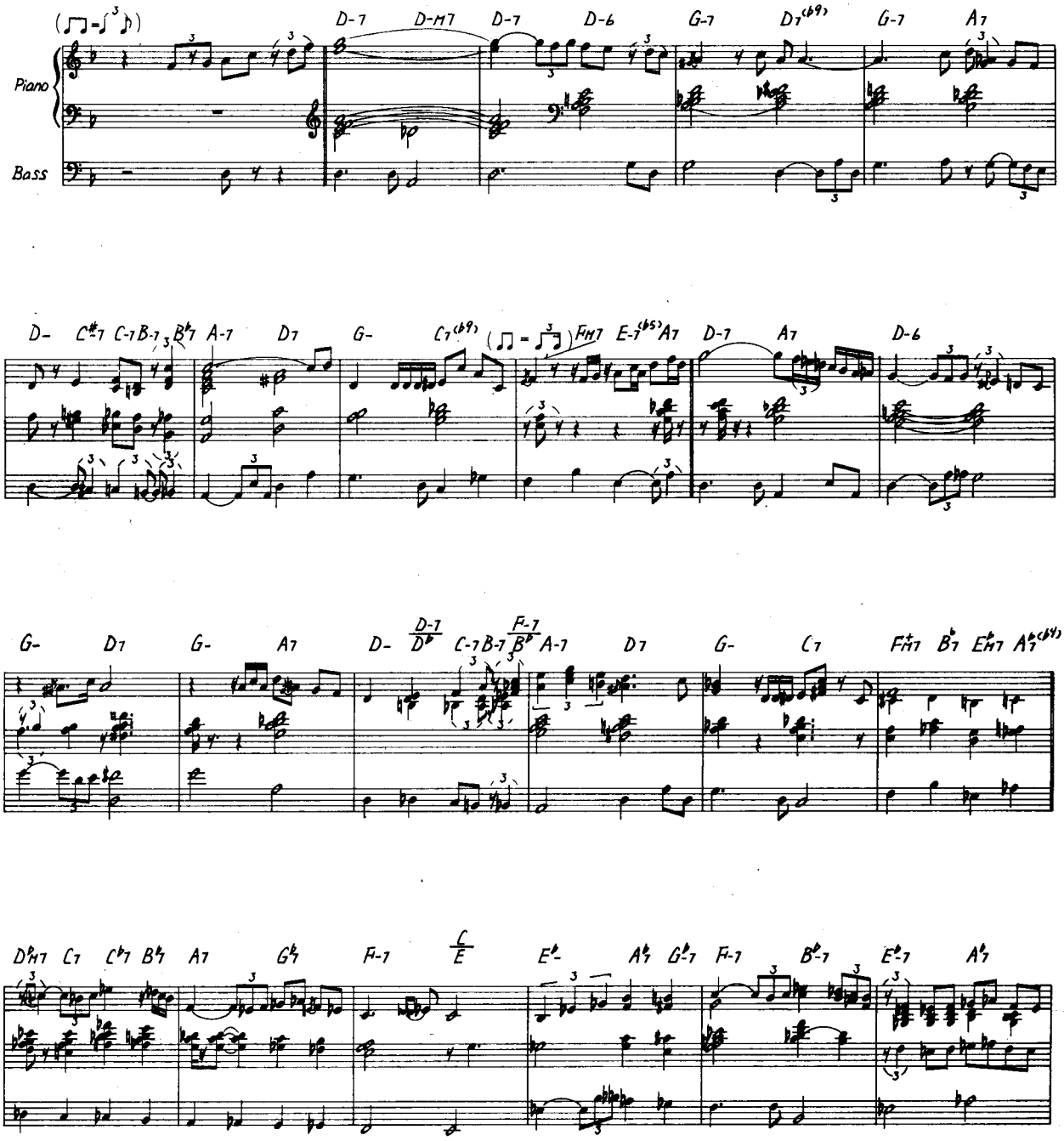

G7(b13) Cm6 C7(alt)/F Fm7 D7/A Bb7 Eb7 Ab7 G7(alt) C7(alt)
Fm7 Abm7 Gbm6 Bm7 E7 Eb D7(alt) G7 Cm7/Bb C7(alt)
F7(alt) Bb7 Eb7(alt) Ab7/Bb Db7(alt)/Bbm7 Ab C7(alt) Fm7 Fm7(b5) Bm7 E7
Eb6/Bb A7 D7(alt) G7 Cm6 C7(alt) Gbm7 Bb7 A7/Gm7 Bb D7(alt)
Db7/Cm7 Eb C7(alt) Fm7 Abm7/Bb Bm7 E7 DbM7/CbM7 Ab7/G GM7(b5) D7(alt)

『コンプリート・リヴァーサイド・レコーディング』(ビクターVIJ-5072～88)のSIDE 35⑤の曲。エリントン・ナンバーをエヴァンスが美しいハーモニーで聴かせている。コードの1つ1つを味わって欲しい。

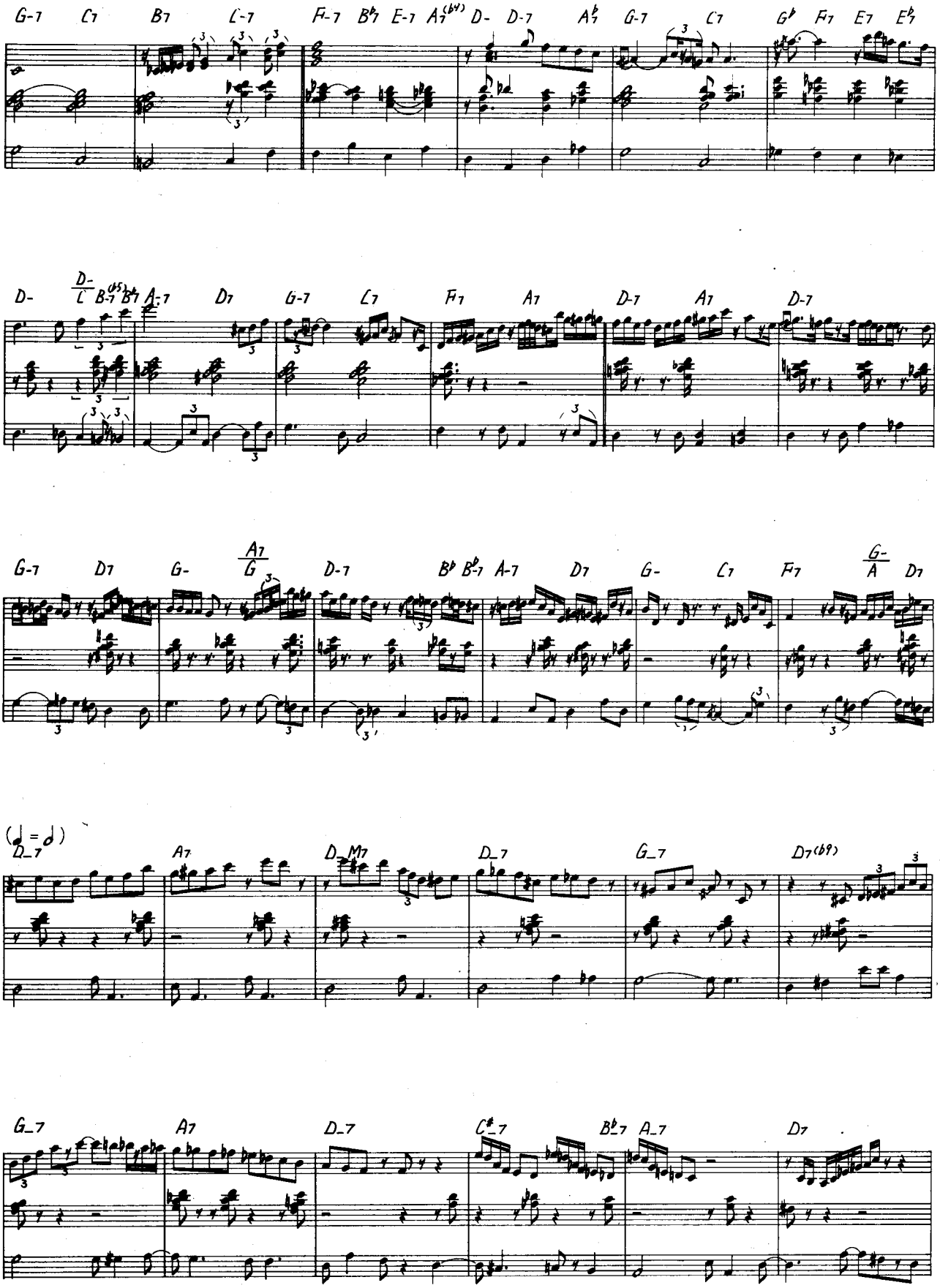
両手ヴォイシングの美しさを再現しよう

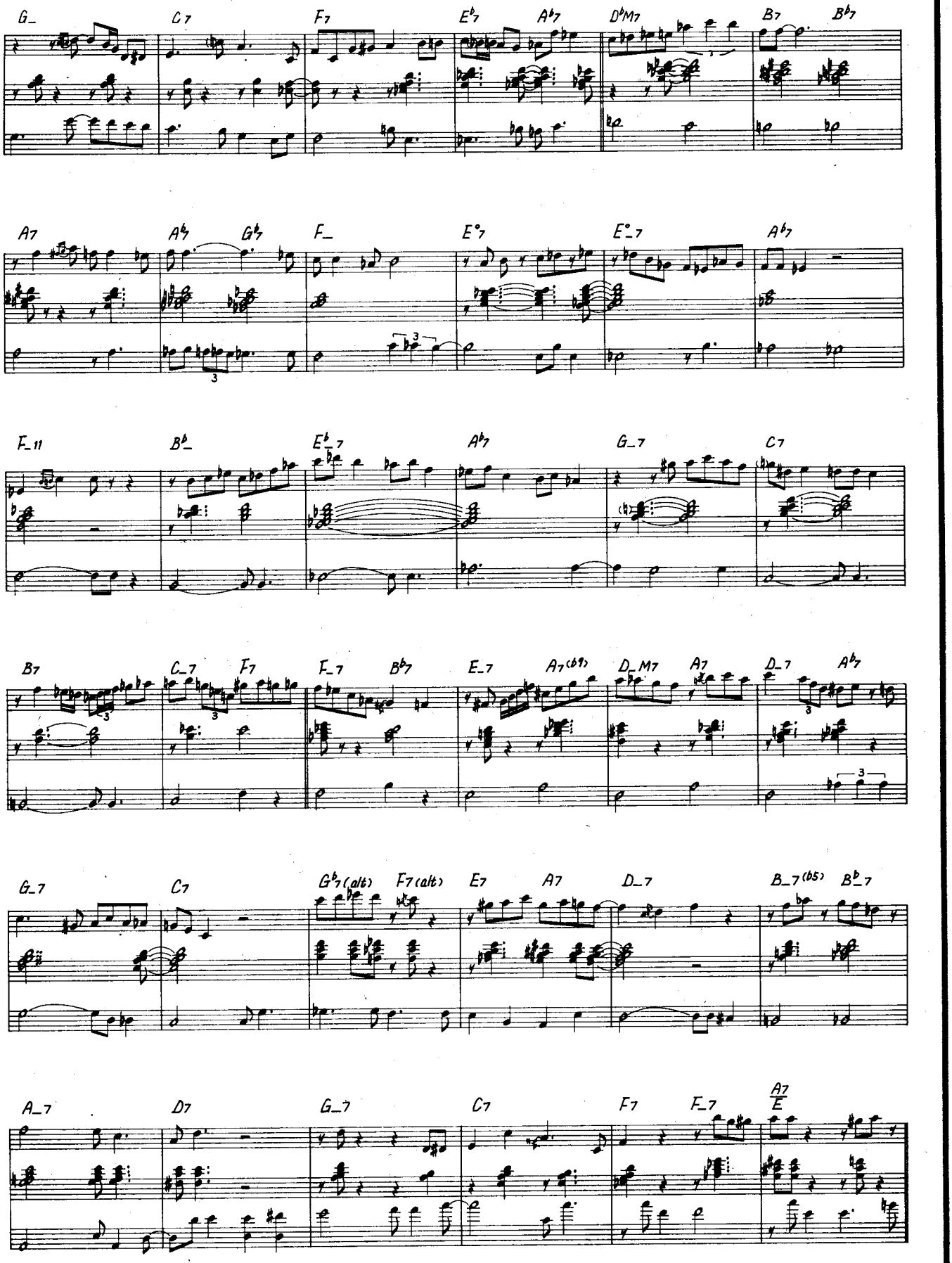
IN A SENTIMENTAL MOOD

MUSIC by Duke Ellington



©1935 by American Academy of music, Inc.
Right for Japan assigned to TOA MUSIC INTERNATIONAL CO., LTD.


G-7 C7 B7 C-7 F-7 B♭7 E-7 A7(♭9) D- D-7 A♭7 G-7 C7 G♭ F7 E7 E♭7
D- D-/C B-7(♭5) B♭7 A-7 D7 G-7 C7 F7 A7 D-7 A7 D-7
G-7 D7 G- A7/G D-7 B♭ B♭7 A-7 D7 G- C7 F7 G-/A D7
(♩ = ♪)
D_7 A7 D_M7 D_7 G_7 D7(♭9)
G_7 A7 D_7 C♯_7 B♭_7 A_7 D7


G_ C7 F7 E♭7 A♭7 D♭M7 B7 B♭7
A7 A♭7 G♭7 F_ E°7 E°_7 A♭7
F_11 B♭_ E♭_7 A♭7 G_7 C7
B7 C_7 F7 F_7 B♭7 E_7 A7(♭9) D_M7 A7 D_7 A♭7
G_7 C7 G♭7(alt) F7(alt) E7 A7 D_7 B_7(♭5) B♭_7
A_7 D7 G_7 C7 F7 F_7 A7 E

名演を探せ!!

ビル・エヴァンス(p)の名演

マイ・ファニー・ヴァレンタイン

採譜：河本芳子

MY FUNNY VALENTINE

ピアノで弾くアップ・テンポの「マイ・ファニー」

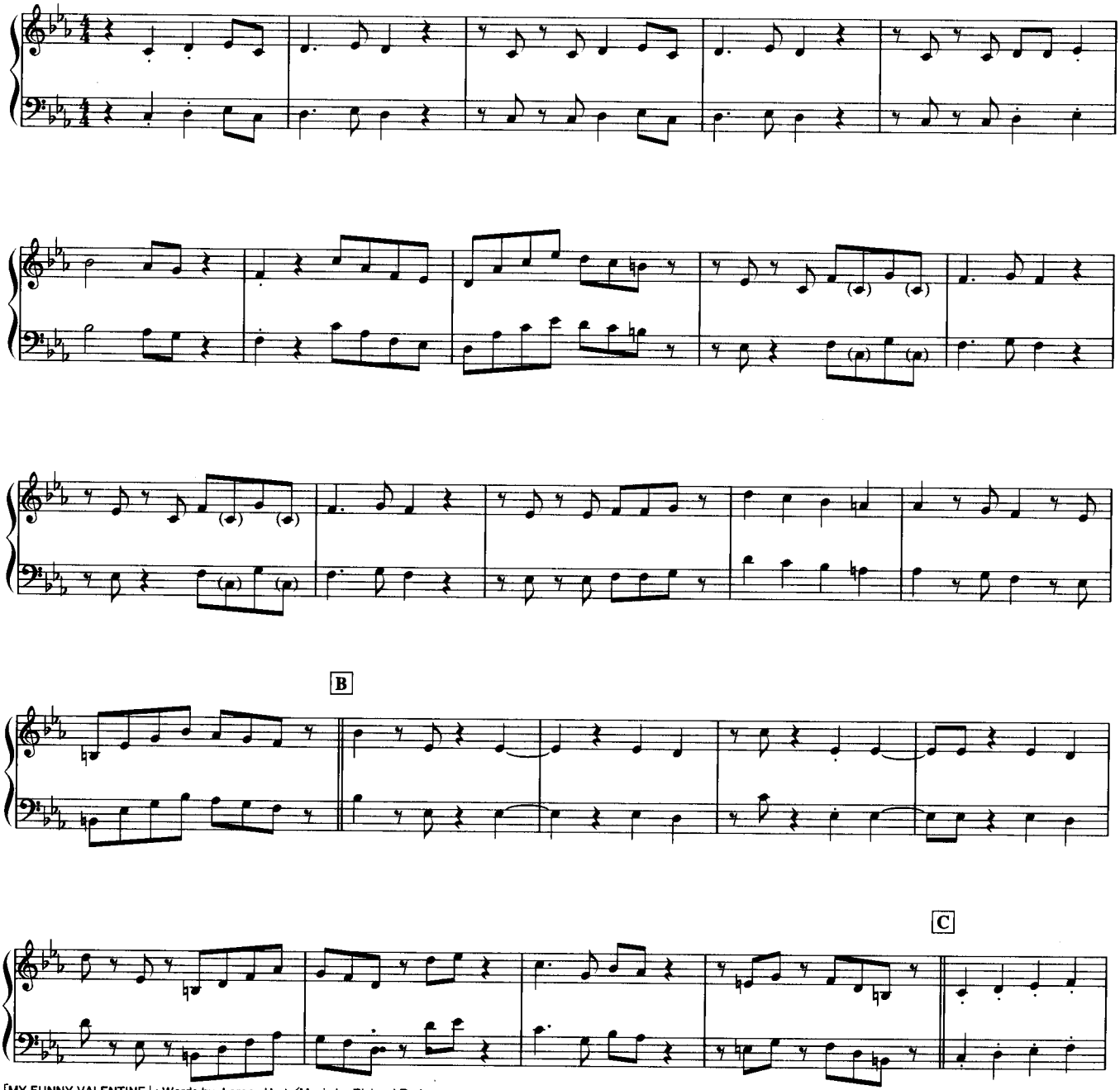
「アンダーカレント」
ビル・エヴァンス&ジム・ホール
東芝EMI　TOCJ-5972

今月は時節がら「マイ・ファニー・ヴァレンタイン」だ。元はミュージカル『ベイブス・イン・アームズ』の挿入歌で、ロレンツ・ハート／リチャード・ロジャースのコンビによる作品。この曲の名演といえば、なんと言ってもマイルス・デイヴィスのものが思い浮かぶが、ここではちょっと隠れた名演ということで、ビル・エヴァンスとジム・ホールのデュオ・アルバム『アンダーカレント』からエヴァンスのピアノを取り上げた。バラッドで演奏されるのが普通だが、エヴァンスはイントロもつけず、いきなりアップ・テンポで始めている。(別テイクで2小節イントロがついてテンポもそれほど速くない演奏がコンプリート盤には収録)

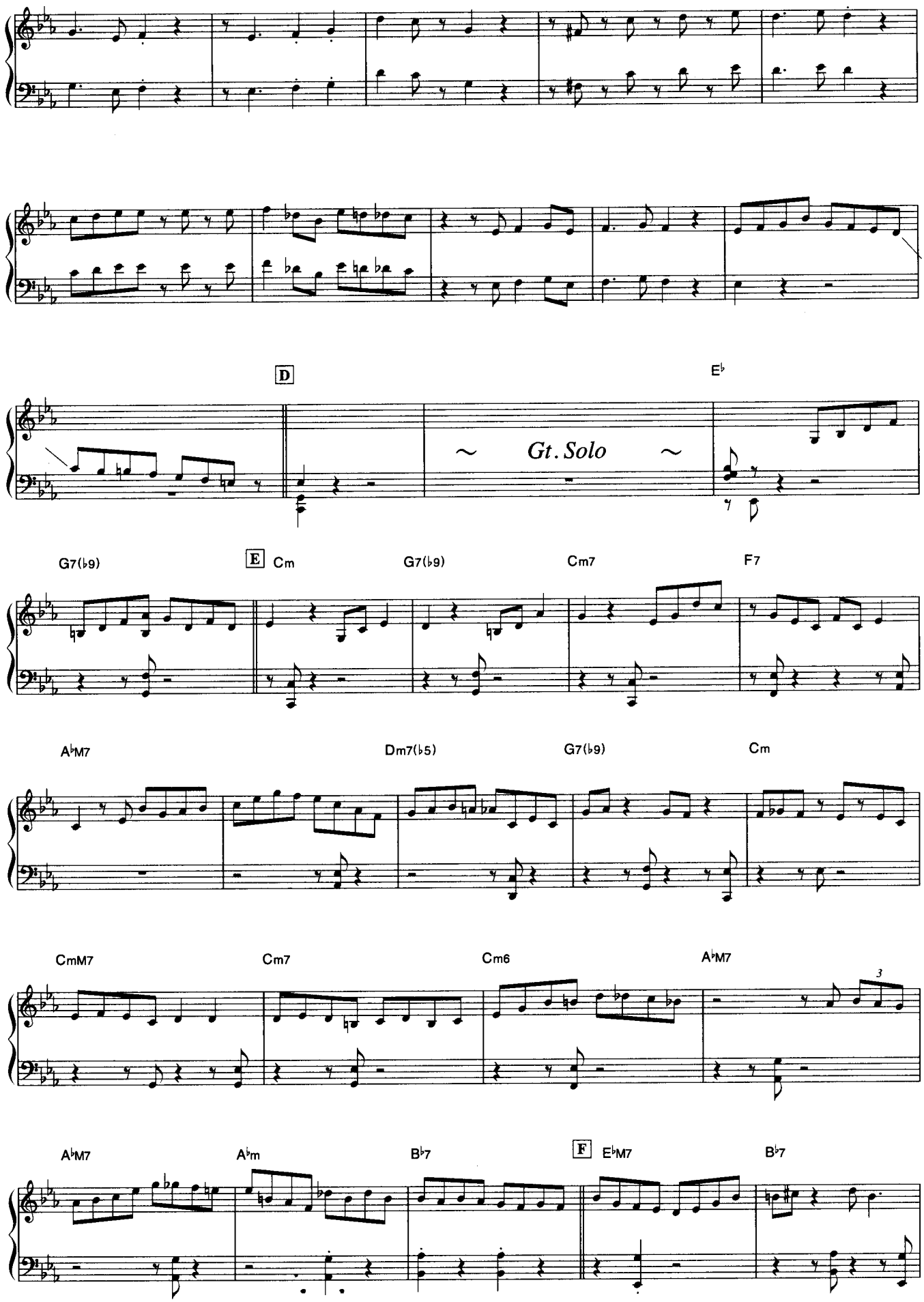
AからCまでがテーマ部で、メロディはずっと両手のオクターヴ・ユニゾンで弾かれる。だからコード・ネームはつけていないが、つけるとすればEからGを参照してほしい。その後ジム・ホールの演奏となって、Eから再びエヴァンスのソロ・パート。リズム・セクションがなくても右手の正確なフレイジングがリズムを牽引しているところをよく学びたい。そして、Hからジム・ホールが4ビートを刻み始めると、解き放たれたかのように左手をやめて右手だけの流れるようなフレイズが紡ぎだされていく。♭5のブルーノート(Gb音)をまじえた最初の4小節のフレイズなど覚えやすくて他にも応用できそうだ。Kの1小節目から4小節目までは3拍フレイズが続くが、ジム・ホールもすぐこれに反応してとてもスリリングなインタープレイを見せてくれる。続く13、14小節目の3連もとてもおもしろい効果を出している。タイム感覚抜群の天才ふたりの見事なコラボレーションだ。

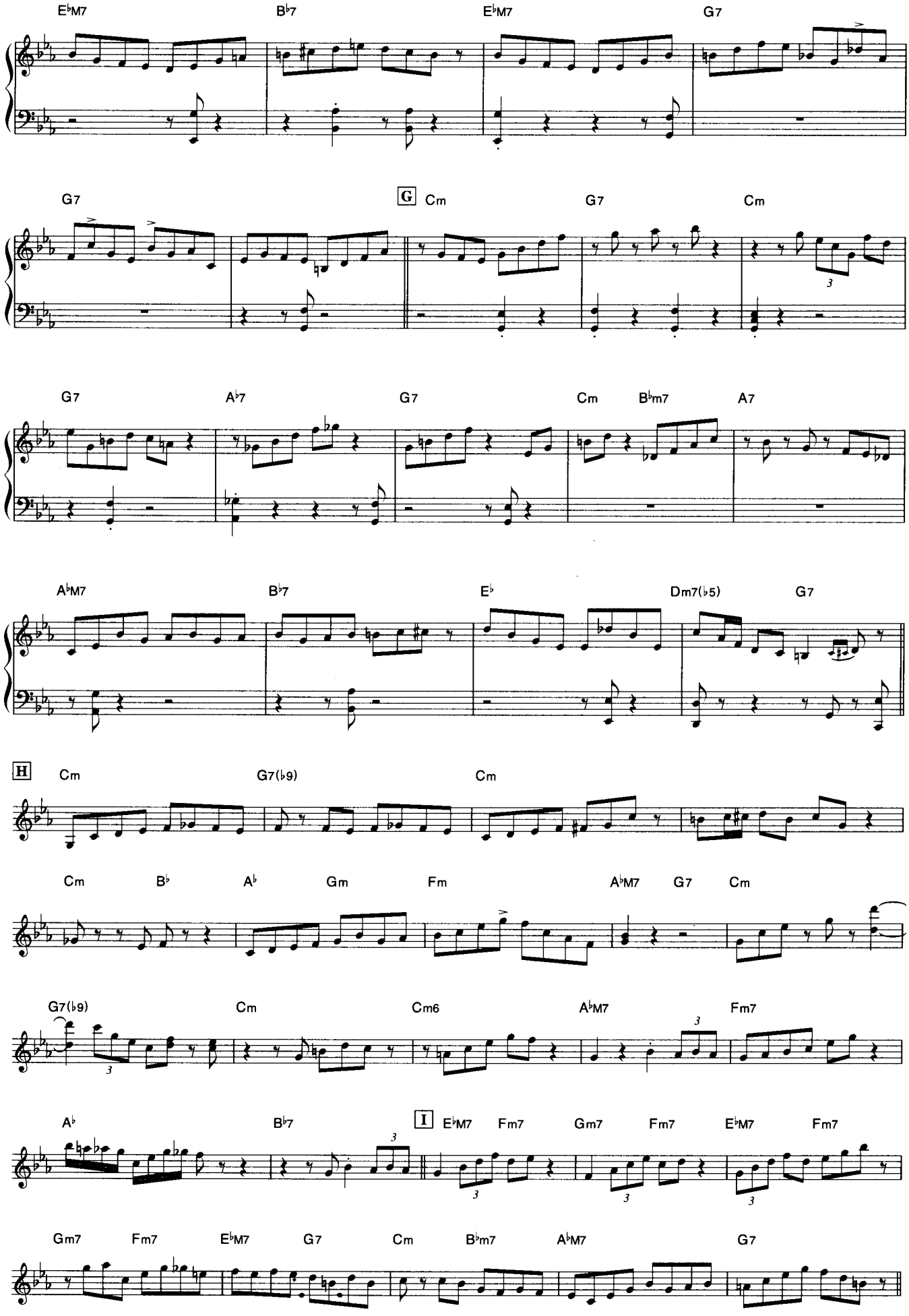
〈北原英司〉

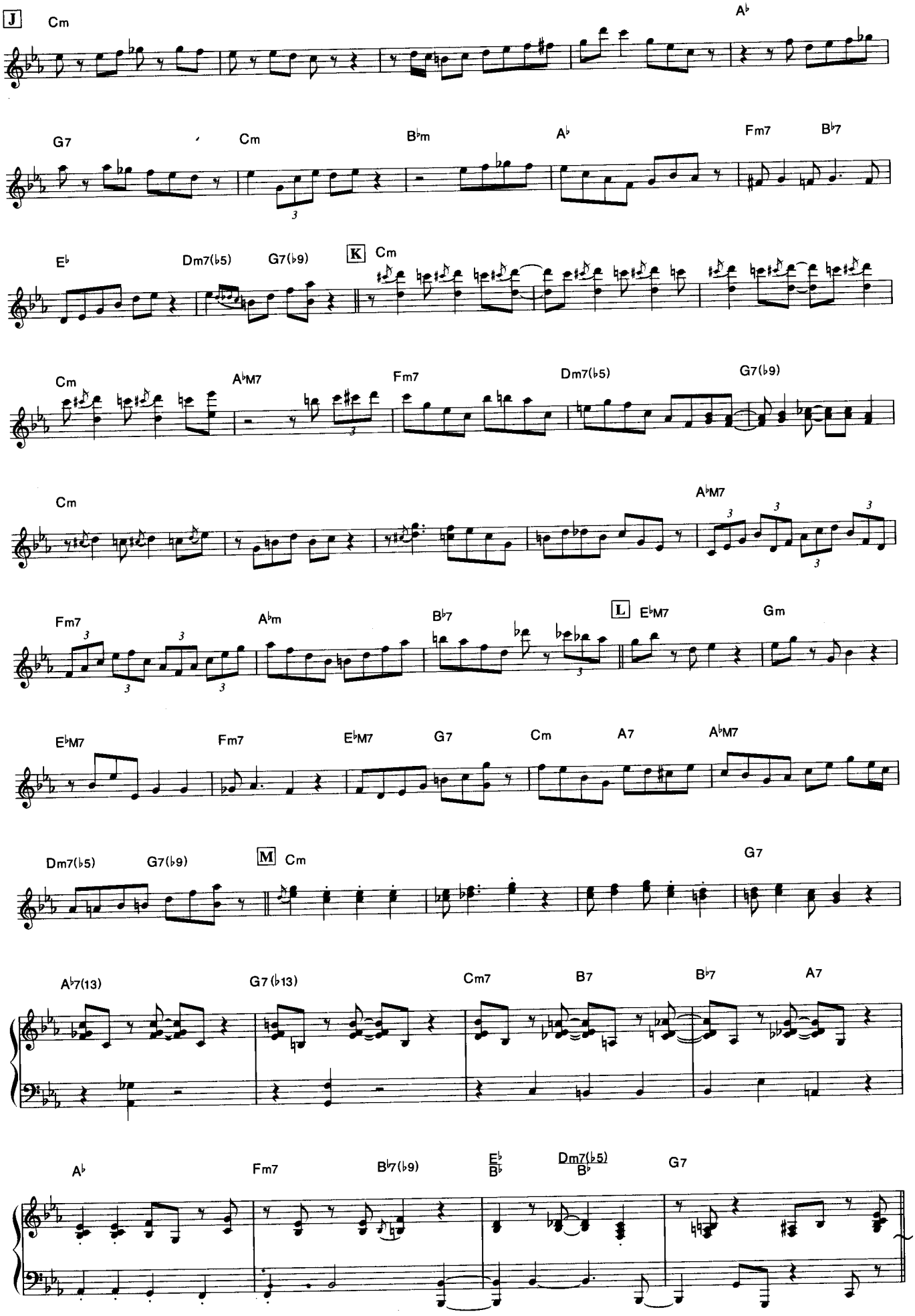
A　*Swing*



「MY FUNNY VALENTINE」: Words by Lorenz Hart／Music by Richard Rodgers
© 1937 by CHAPPELL & CO., INC.
All rights reserved. Used by permission.
Rights for Japan administered by WARNER / CHAPPELL MUSIC, JAPAN K.K. c/o NICHION, INC.


D
E♭
~ Gt. Solo ~
G7(♭9)
E Cm
G7(♭9)
Cm7
F7
A♭M7
Dm7(♭5)
G7(♭9)
Cm
CmM7
Cm7
Cm6
A♭M7
3
A♭M7
A♭m
B♭7
F E♭M7
B♭7


E♭M7
B♭7
E♭M7
G7
G7
G Cm
G7
Cm
G7
A♭7
G7
Cm
B♭m7
A7
A♭M7
B♭7
E♭
Dm7(♭5)
G7
H Cm
G7(♭9)
Cm
Cm
B♭
A♭
Gm
Fm
A♭M7
G7
Cm
G7(♭9)
Cm
Cm6
A♭M7
Fm7
A♭
B♭7
I E♭M7
Fm7
Gm7
Fm7
E♭M7
Fm7
Gm7
Fm7
E♭M7
G7
Cm
B♭m7
A♭M7
G7


J
Cm
A♭
G7
Cm
B♭m
A♭
Fm7
B♭7
E♭
Dm7(♭5)
G7(♭9)
K
Cm
Cm
A♭M7
Fm7
Dm7(♭5)
G7(♭9)
Cm
A♭M7
Fm7
A♭m
B♭7
L
E♭M7
Gm
E♭M7
Fm7
E♭M7
G7
Cm
A7
A♭M7
Dm7(♭5)
G7(♭9)
M
Cm
G7
A♭7(13)
G7(♭13)
Cm7
B7
B♭7
A7
A♭
Fm7
B♭7(♭9)
E♭/B♭
Dm7(♭5)/B♭
G7

Bill Evans
NARDIS ナルディス

採譜：鈴木典子(seventh)
解説：石澤功浩(seventh)

「モントルー・ジャズ・
フェスティヴァルのビル・エヴァンス」
ユニバーサル クラシックス&ジャズ
(Verve)POCJ-9203

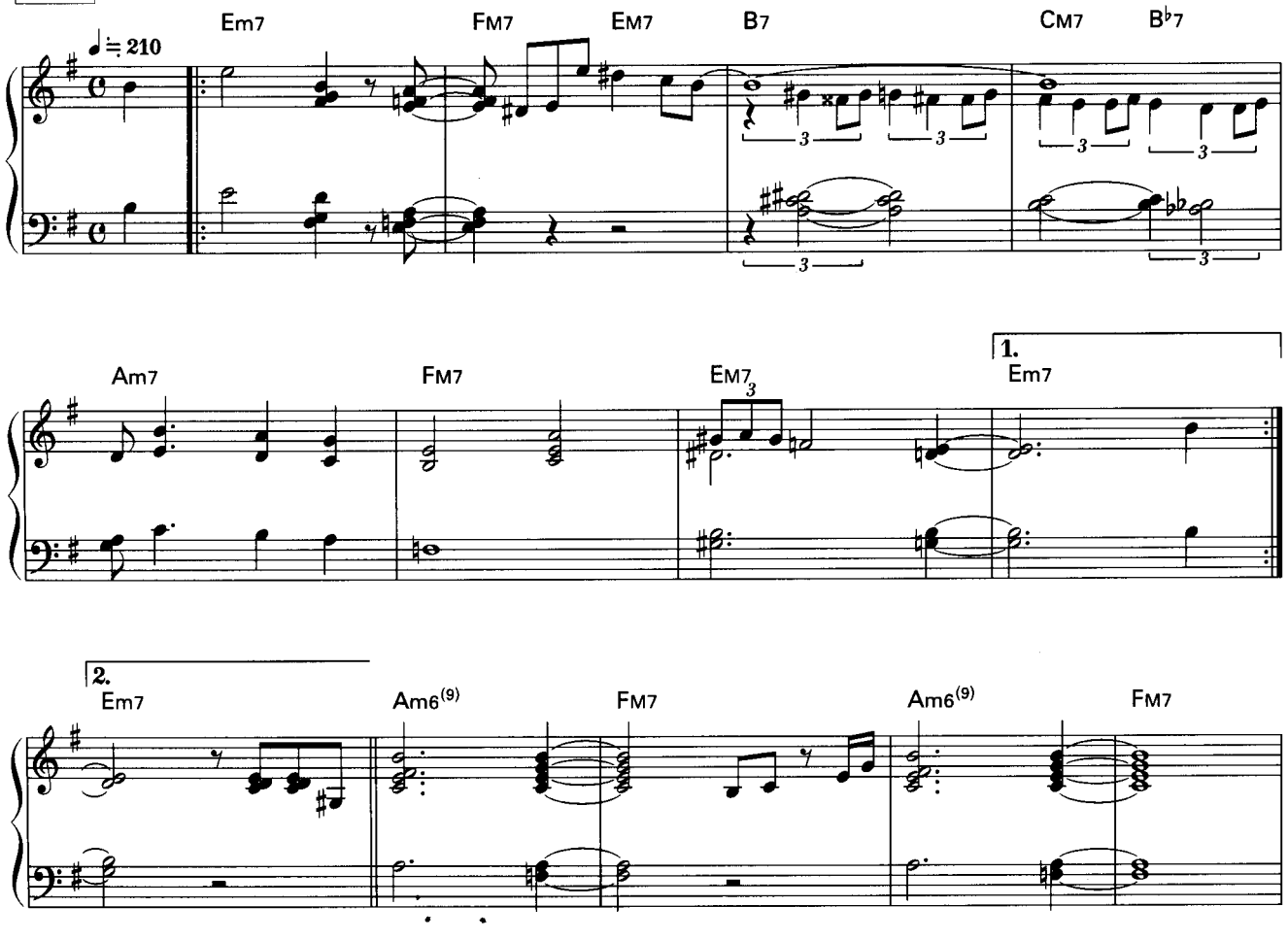
現代"ピアノ・ジャズ"のルーツがここに!

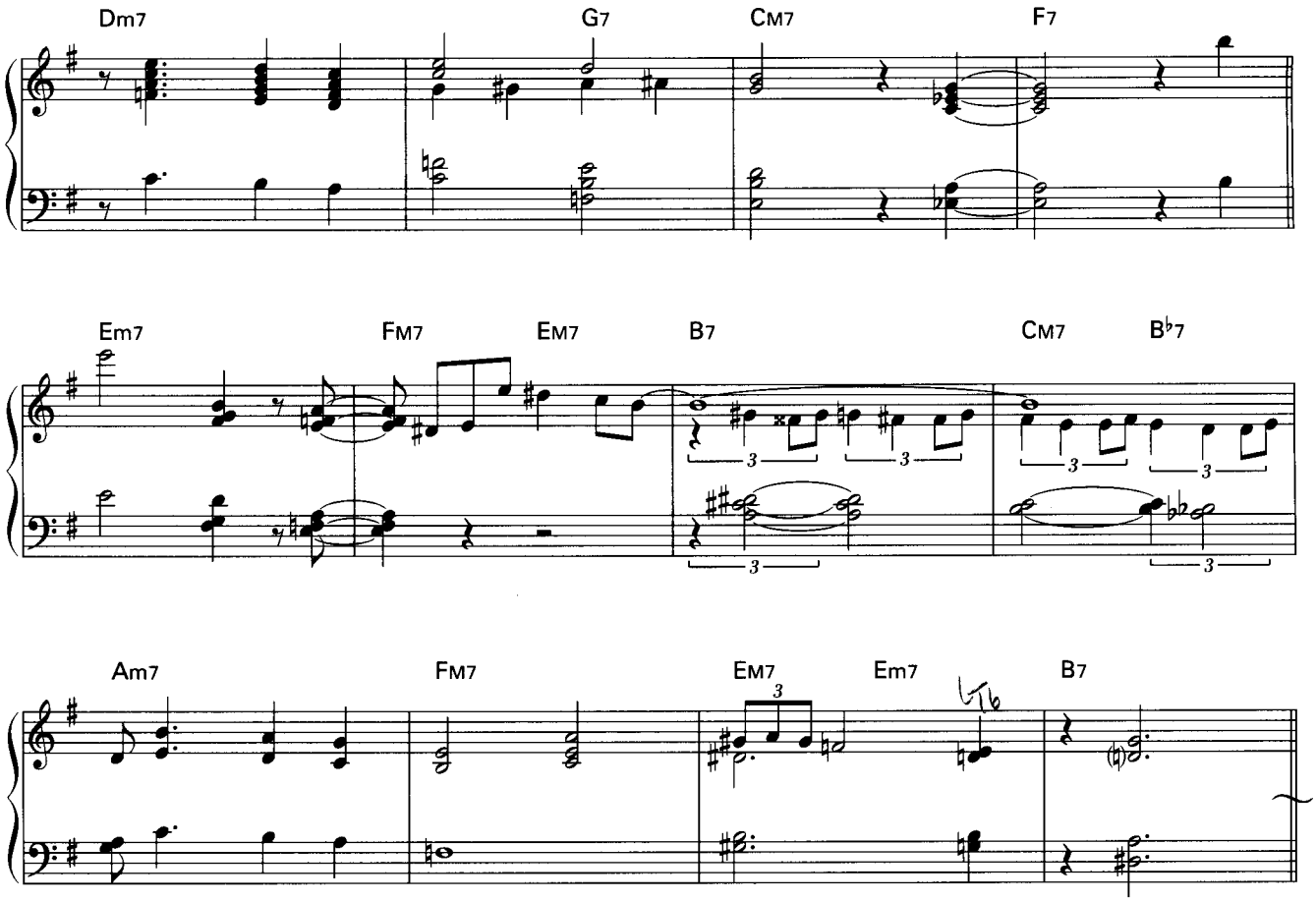
マイルス・デイヴィス作の哀愁漂うメロディを持った本ナンバーは、当の作曲者本人が正式な形での録音を残しておらず、その後ビル・エヴァンスが自らのレパートリーに取り入れて世に広めたこともあり、「ナルディス＝ビル・エヴァンスの曲というイメージがとても強い。ビル・エヴァンスがピアノ・トリオ形式でこの曲を披露したのが、リヴァーサイド4部作のひとつ「エクスプロレイションズ」(64年)だ。ここではゆっくりしたテンポで演奏されているが、それから4年後の「モントルー・ジャズ・フェスティヴァルのビル・エヴァンス」(68年)では、エディ・ゴメス(b)とジャック・ディジョネット(ds)という強力なリズム隊を向こうにまわし、小気味よいテンポでクォリティの高いインタープレイによる素晴らしい名演を残している。この時期は、'69年にマイルスがあの「ビッチェズ・ブリュー」を録音するなど、まさにジャズ界にもエレクトリック化の波が押し寄せる直前である。そんな中で、あくまでもアコースティックなピアノ・トリオ編成という限定的なフォーマットの中、"アドリブの応酬という三者のインタープレイの中に、アレンジされた楽曲を取り入れる"ことで、ひとつの新しい形態を完成させたのが本作と言えるだろう。こういった手法が、その後のジャズ・ピアノに計り知れないほどの多大な影響を与えたのは言うまでもない。

譜面はテーマとアドリブ・ソロの2コーラス目までとなっている。途中のベース・ソロは割愛した。コード・ネームは煩雑さを避けるため、オリジナルに沿ったシンプルなものにしてある。テーマ部分では、なんと言っても三者によるバッキングのキメが聴き所だ。アドリブでは1コーラス目の最後8小節での右手のリズミックなシングル・ラインが素晴らしい。なお、2コーラス目の最後8小節はベースのエディ・ゴメスがBのペダル音を弾いている。 鷹

" NARDIS " music by Miles Davis
© Copyright by Jazz Horn Music
The rights for Japan Licensed to Sony Music Publishing (Japan) Inc.

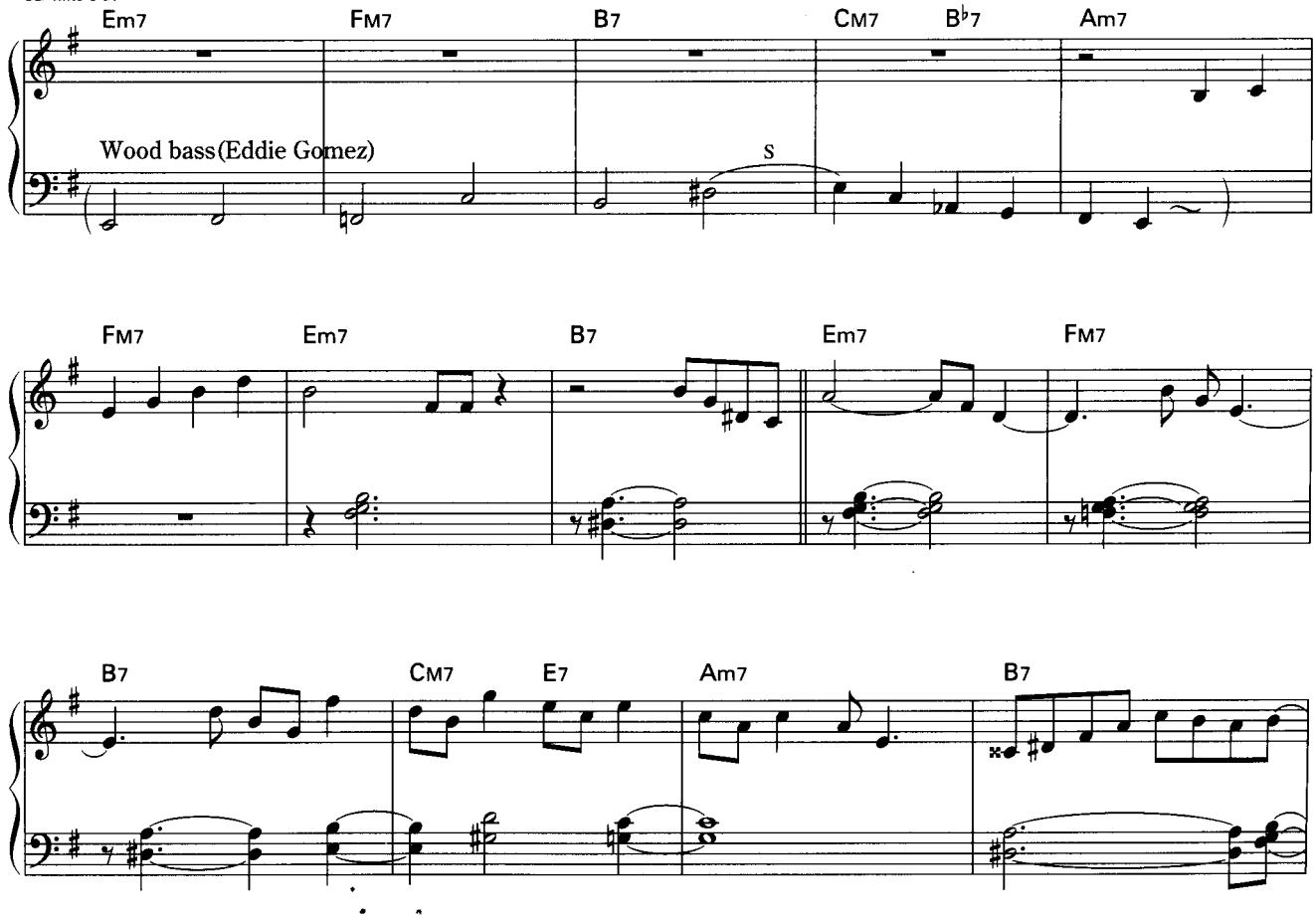
テーマ *CD time 0'00"~*

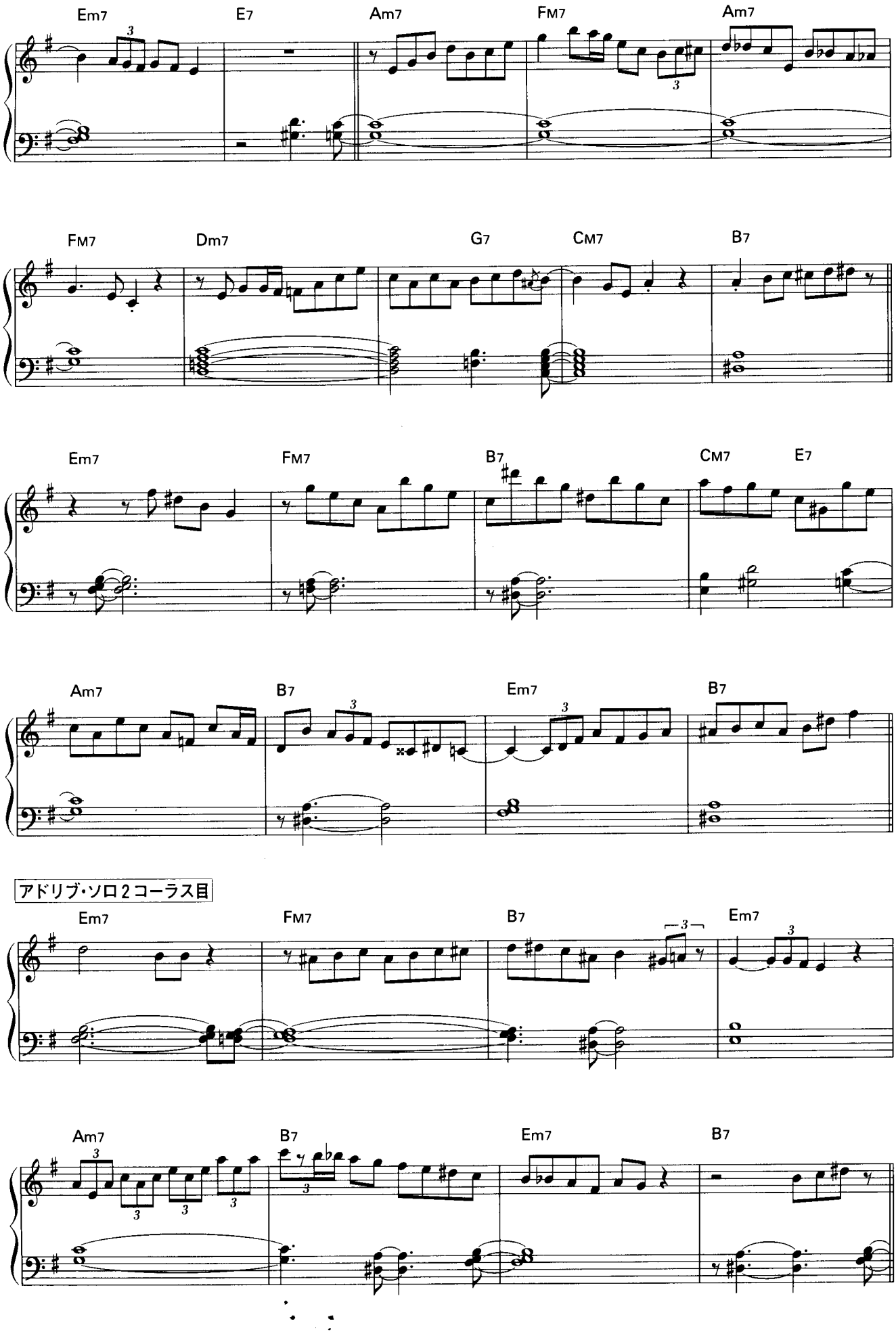


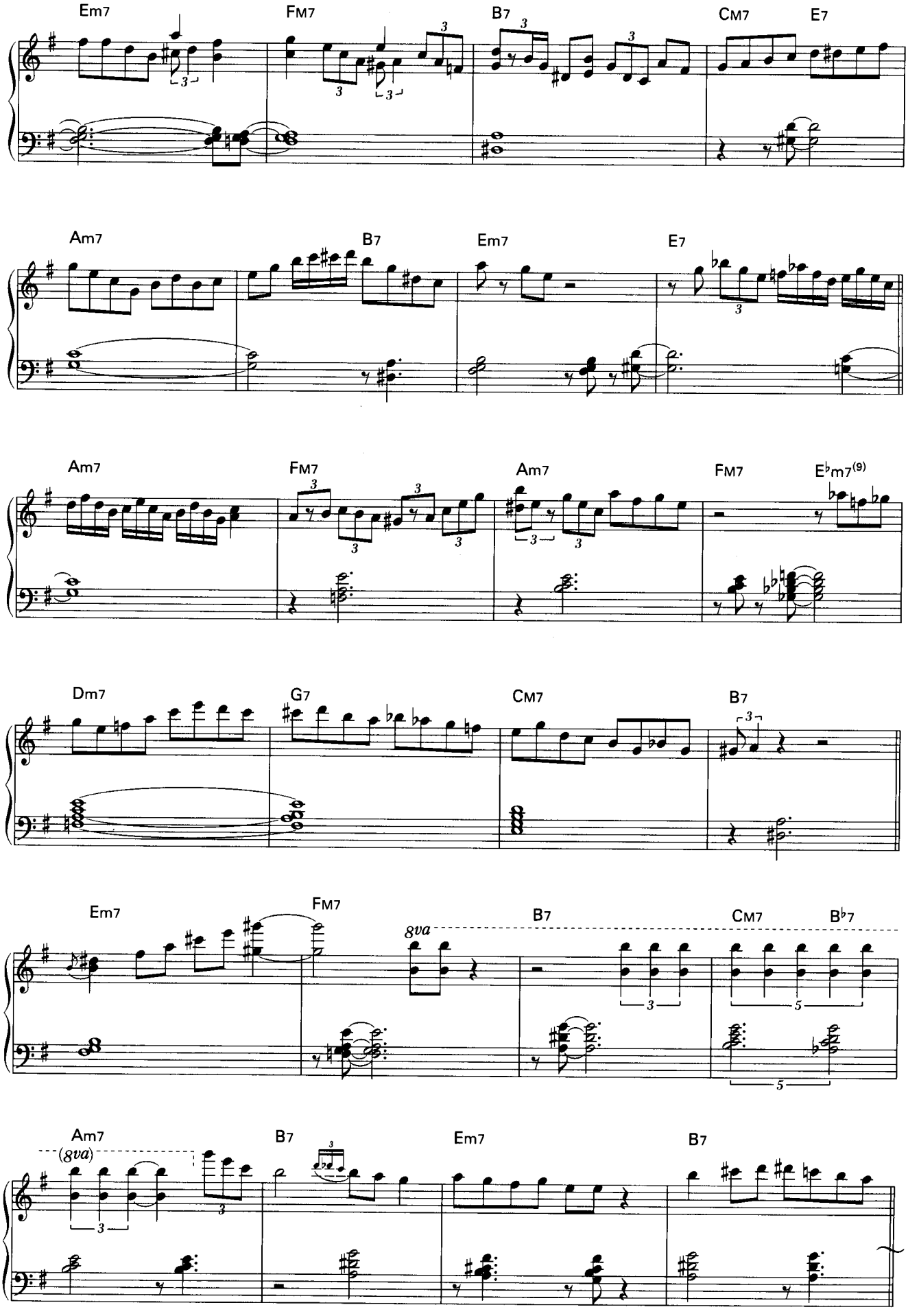


アドリブ・ソロ1コーラス目

CD time 1'57"~

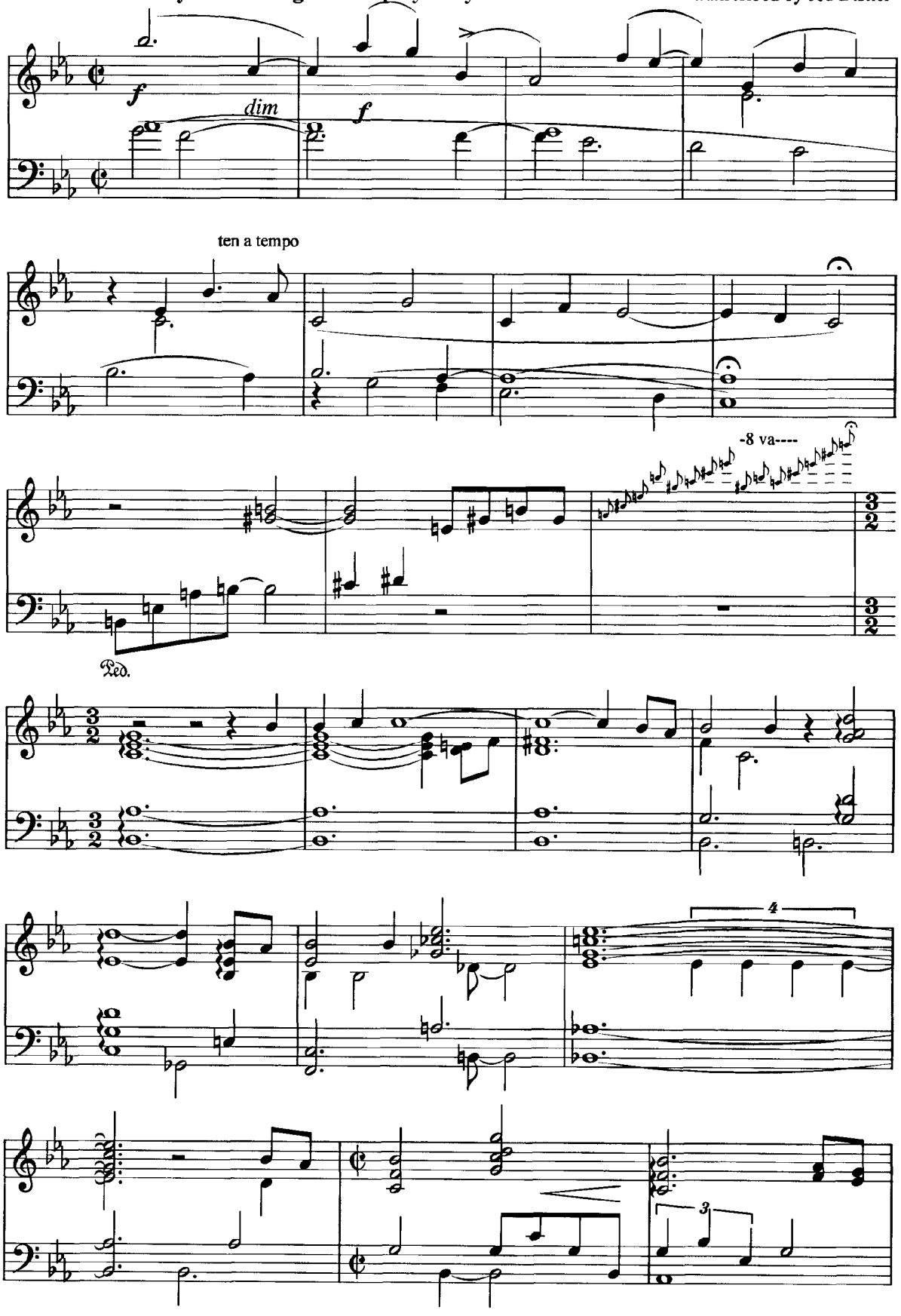


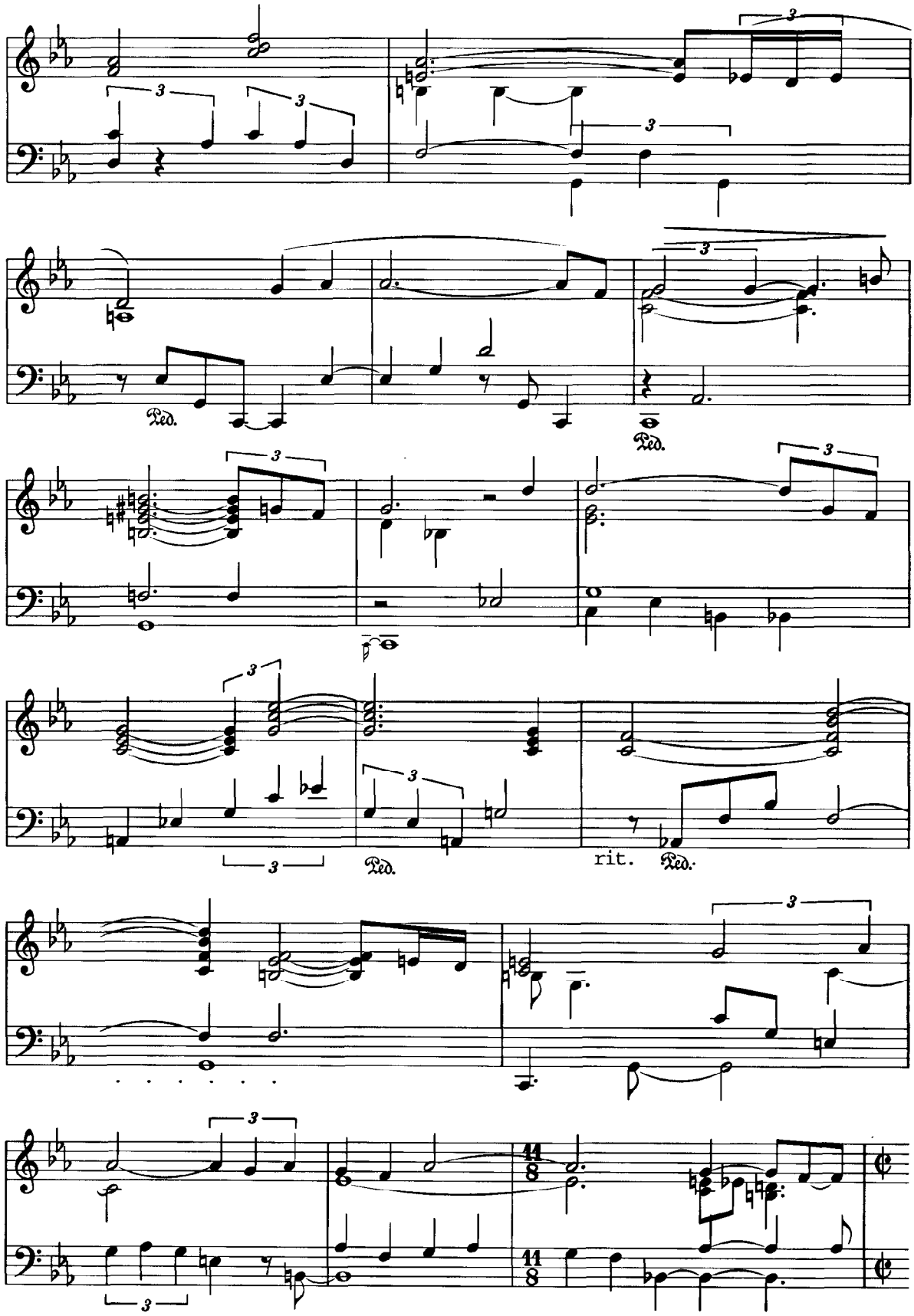

Em7
E7
Am7
FM7
Am7
FM7
Dm7
G7
CM7
B7
Em7
FM7
B7
CM7
E7
Am7
B7
Em7
B7
アドリブ・ソロ2コーラス目
Em7
FM7
B7
Em7
Am7
B7
Em7
B7

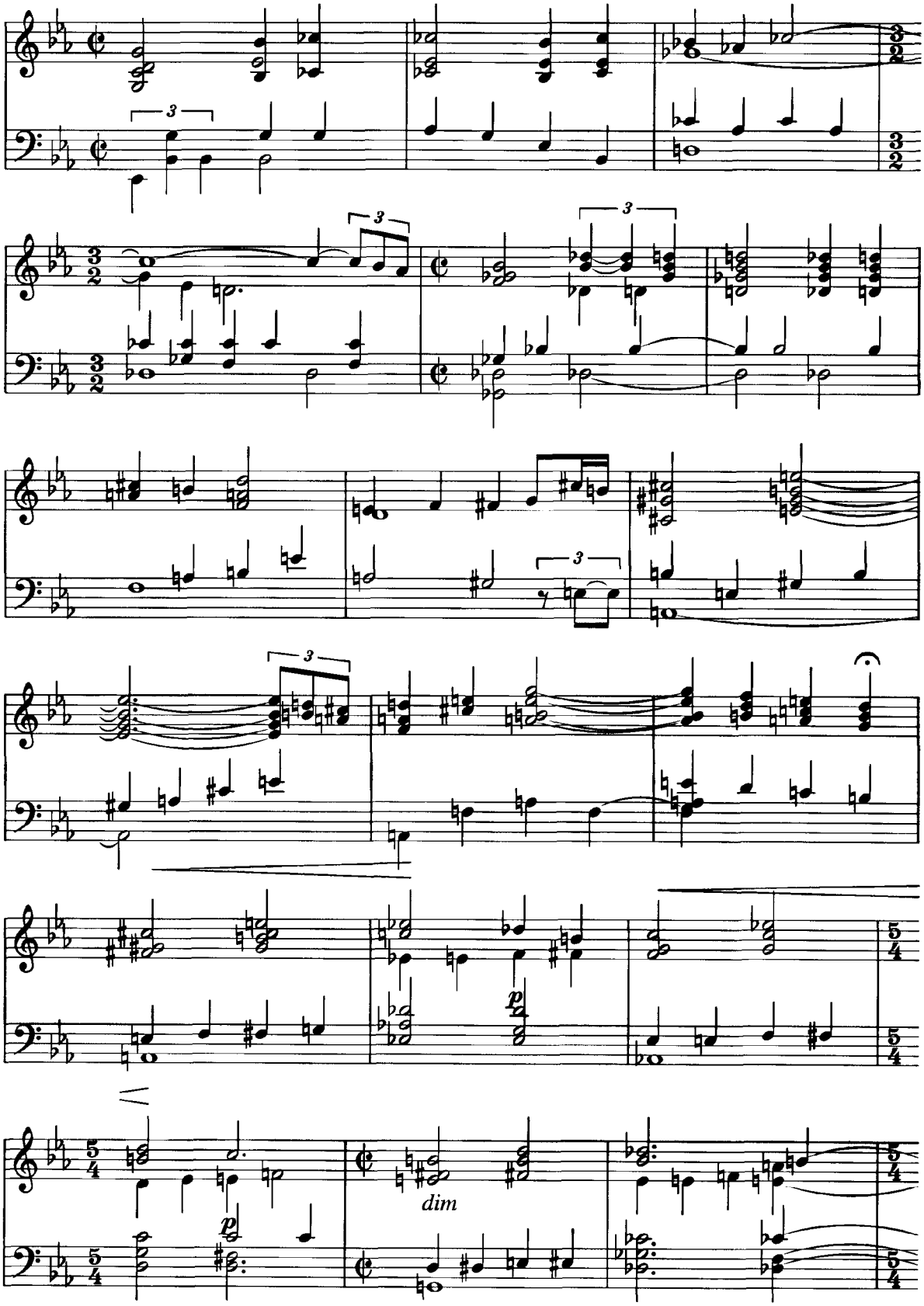

Em7
FM7
B7
CM7
E7
Am7
B7
Em7
E7
Am7
FM7
Am7
FM7
E♭m7(9)
Dm7
G7
CM7
B7
Em7
FM7
8va
B7
CM7
B♭7
Am7
(8va)
B7
Em7
B7

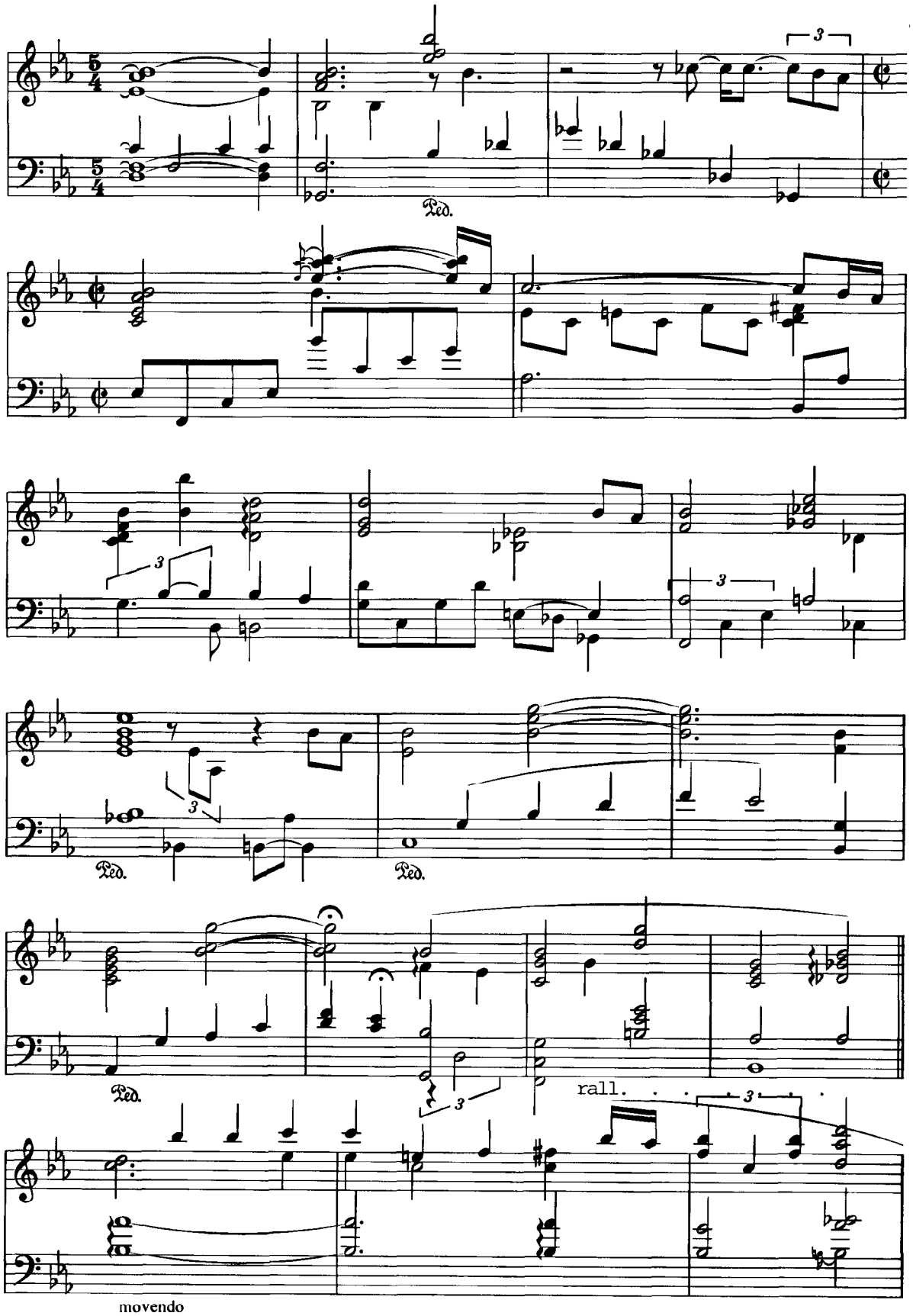
Noelle's Theme by Michel Legrand as played by Bill Evans

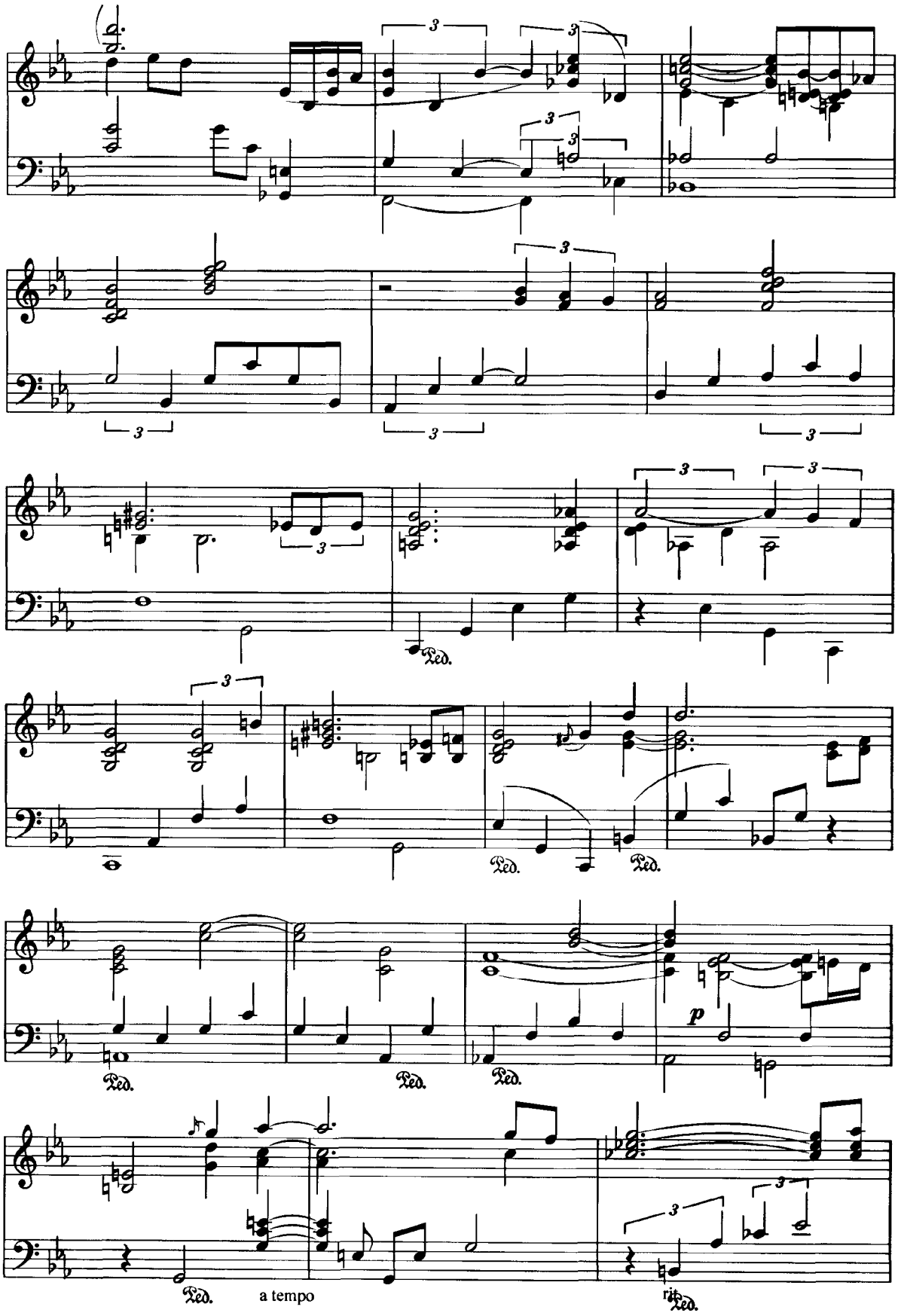
transcribed by Jed Distler

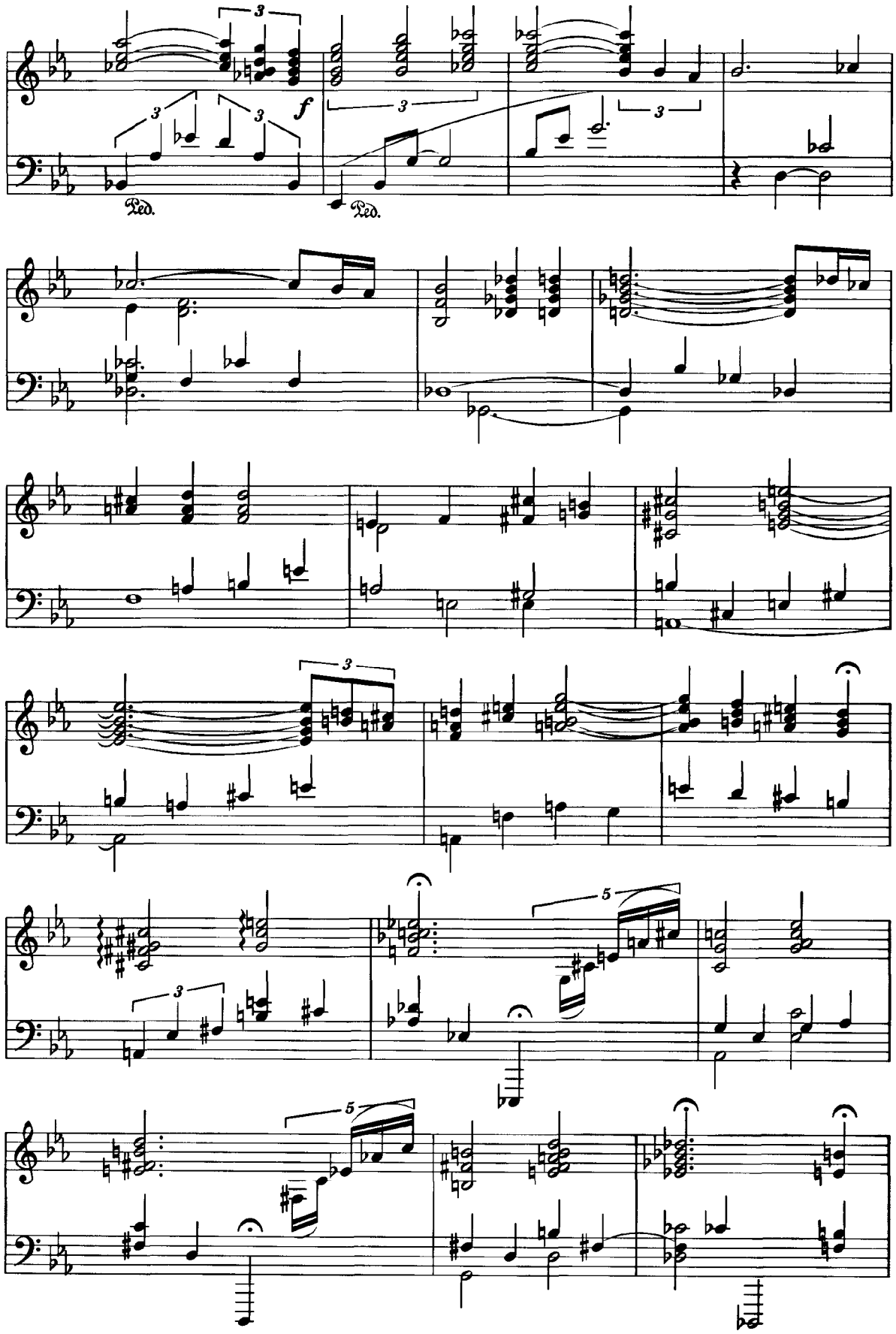


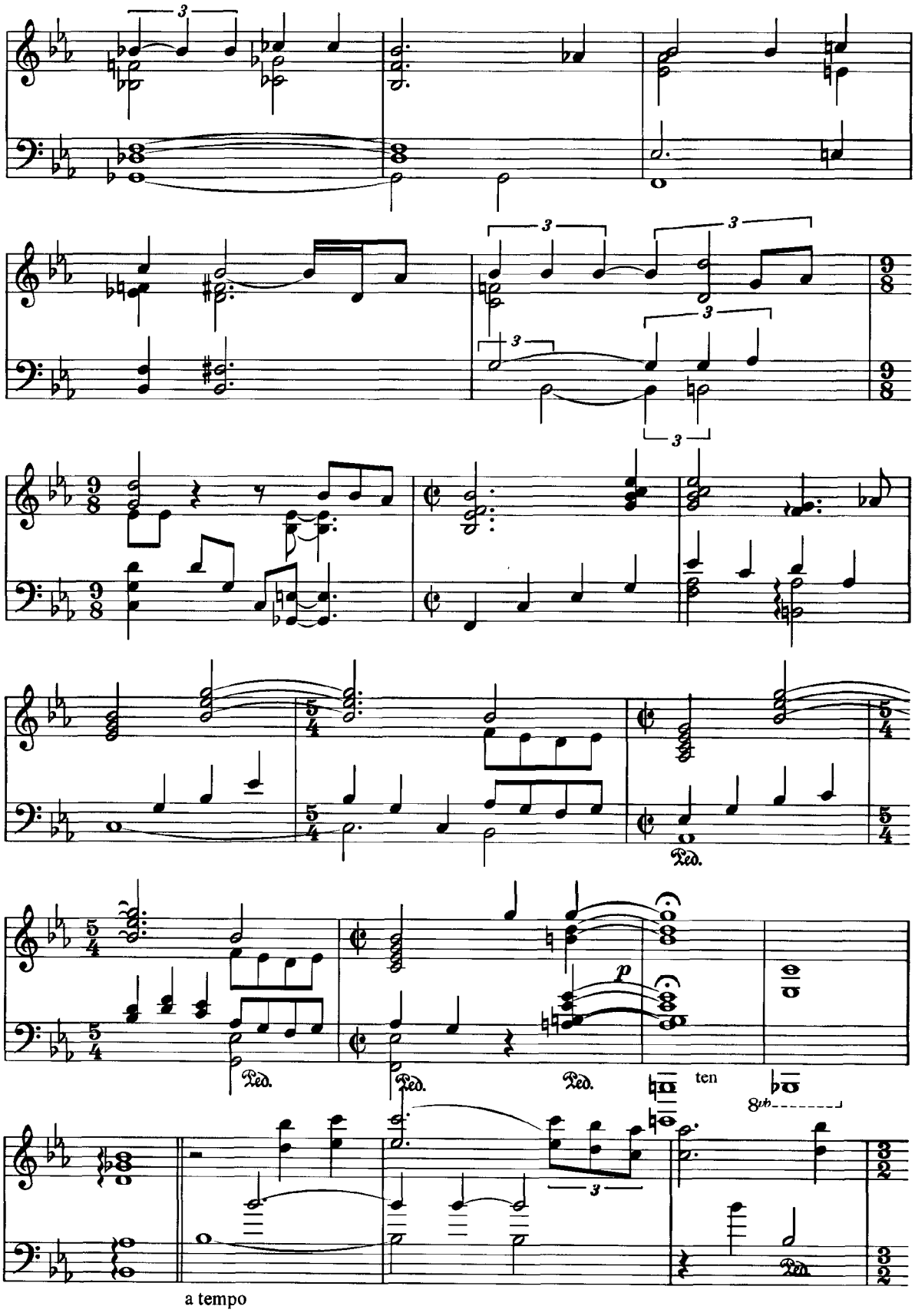

3
Ped.
rit.

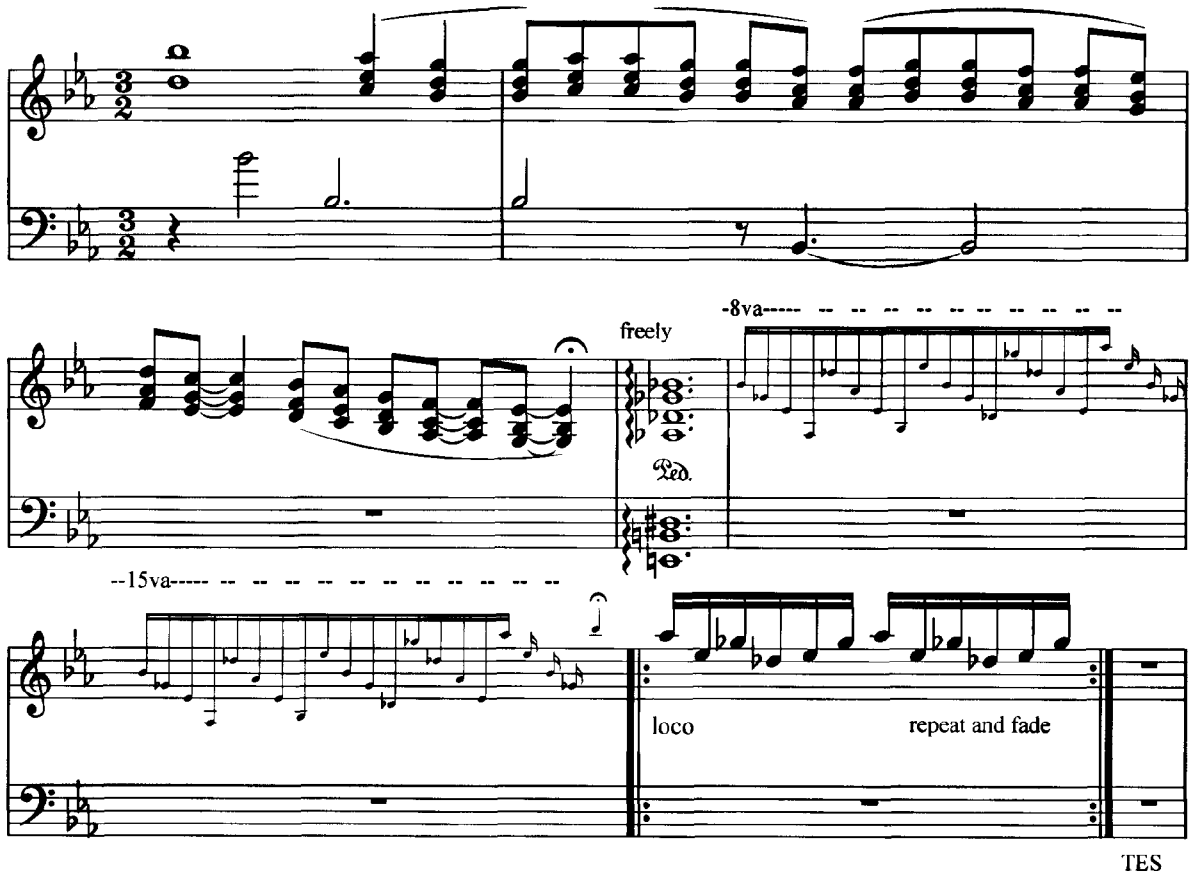

3
3
3
3
p
dim
p


Ped.
Ped.
Ped.
Ped.
rall.
movendo

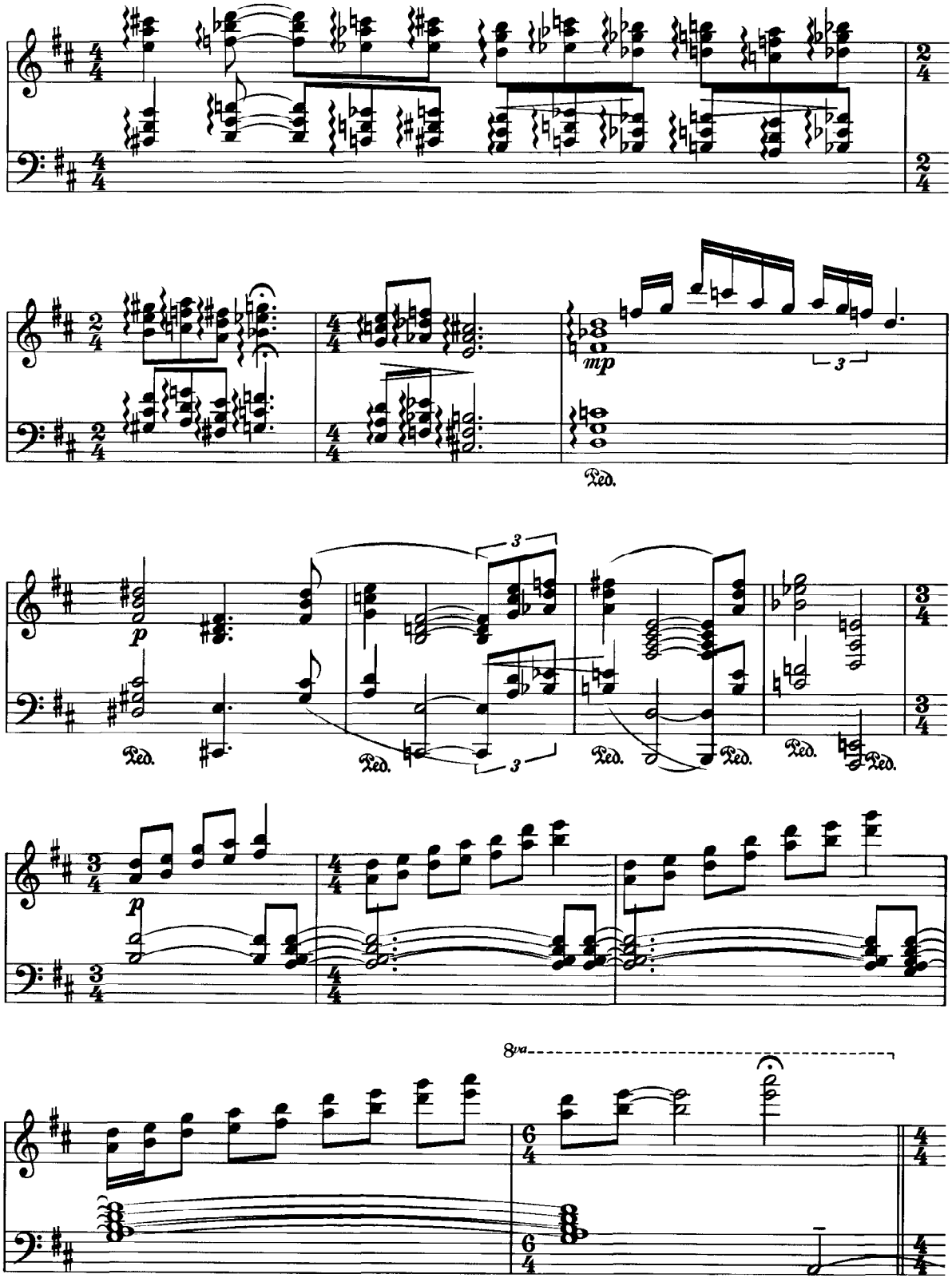

Ped.
a tempo
rit.
Ped.
p

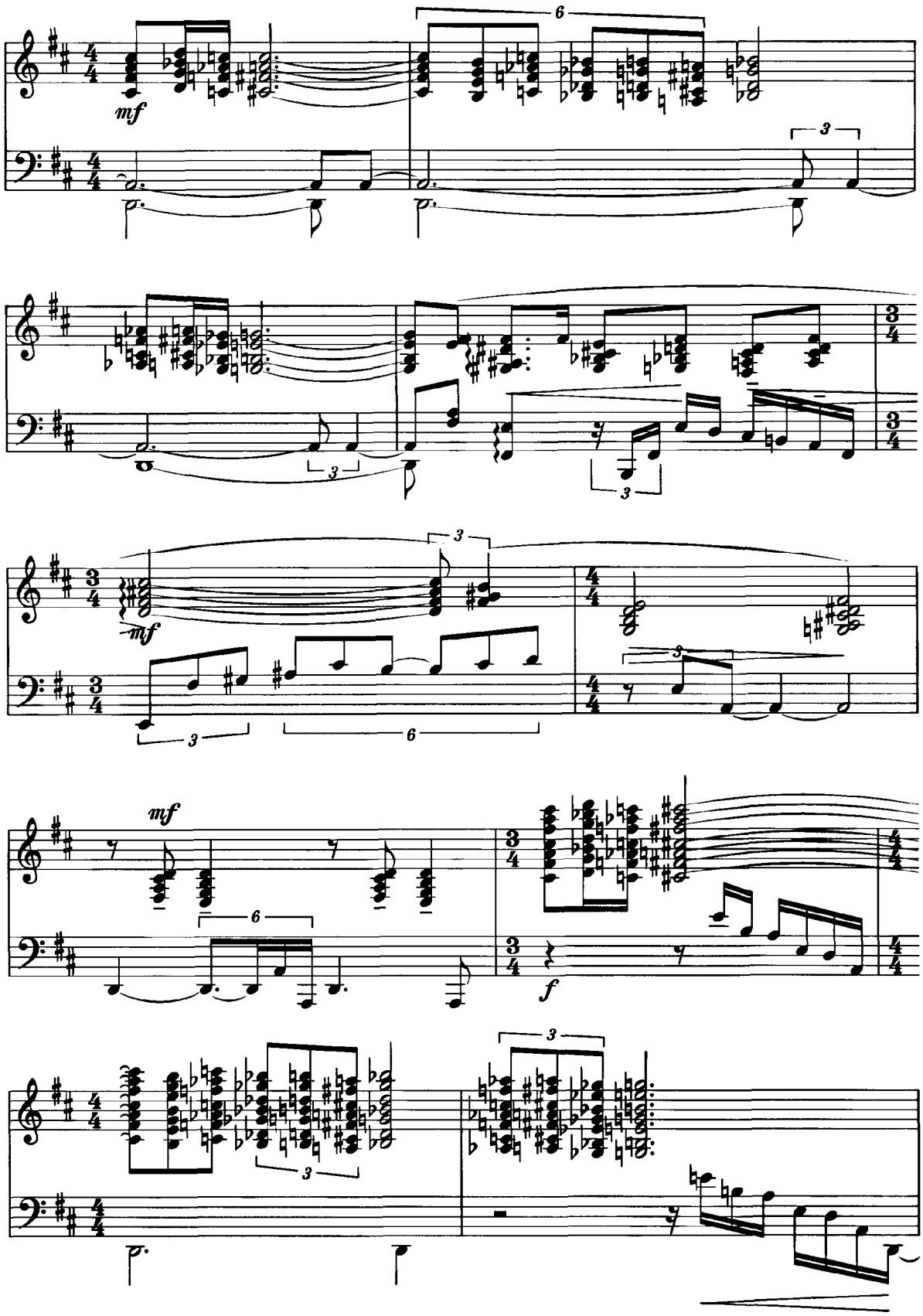

f
Ped.
Ped.

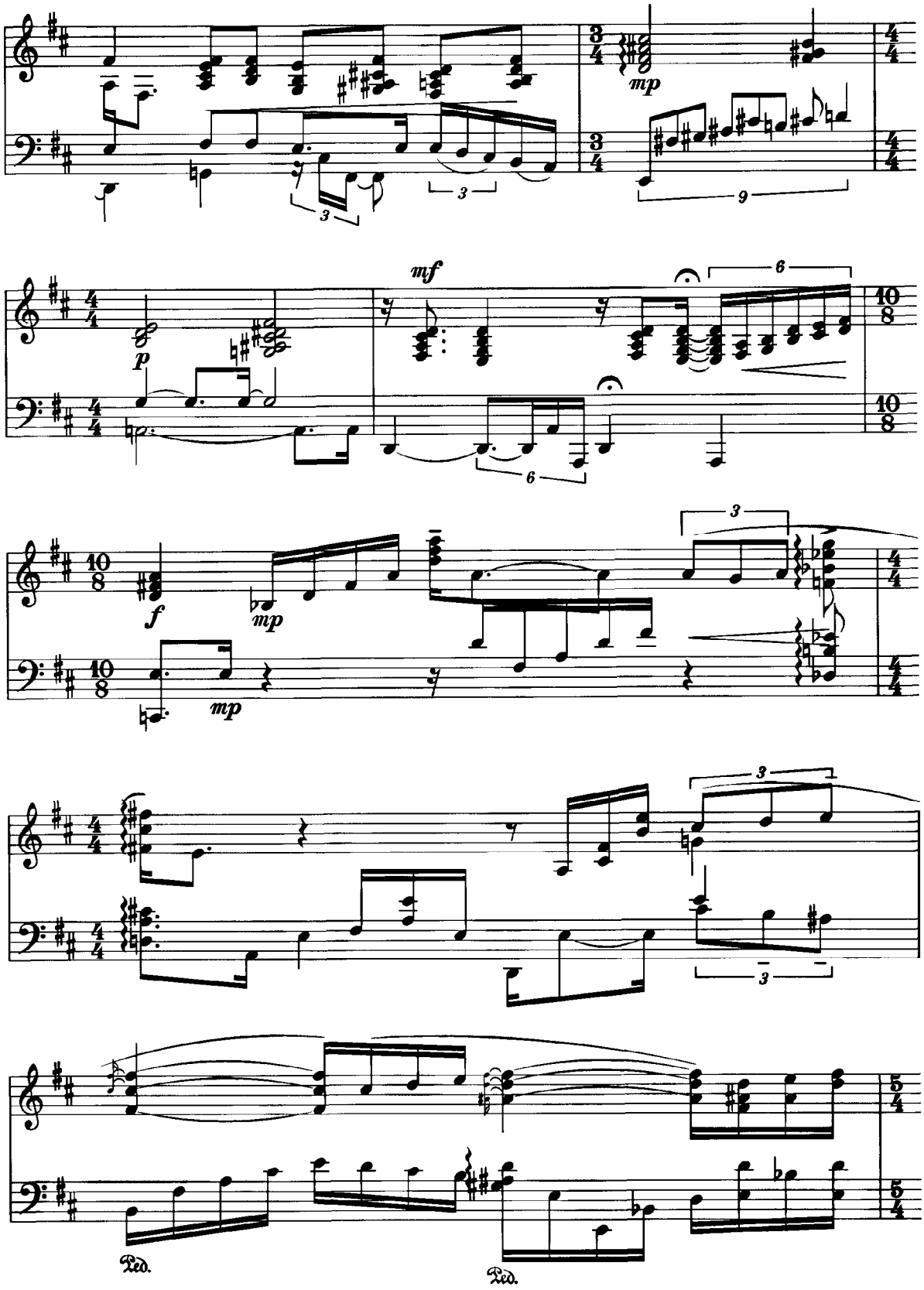

ten
a tempo

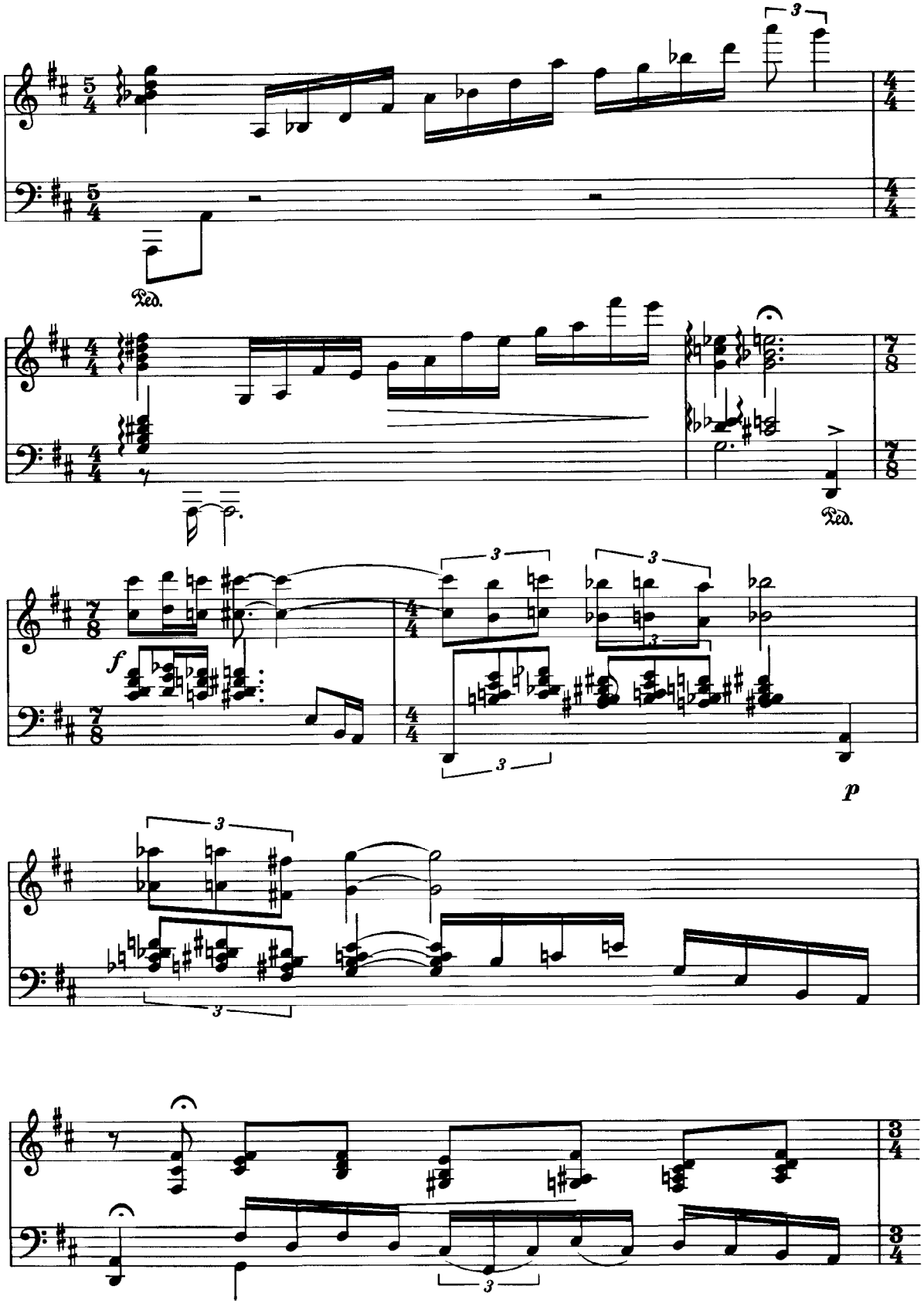

freely
-8va
Ped.
--15va
loco
repeat and fade
TES

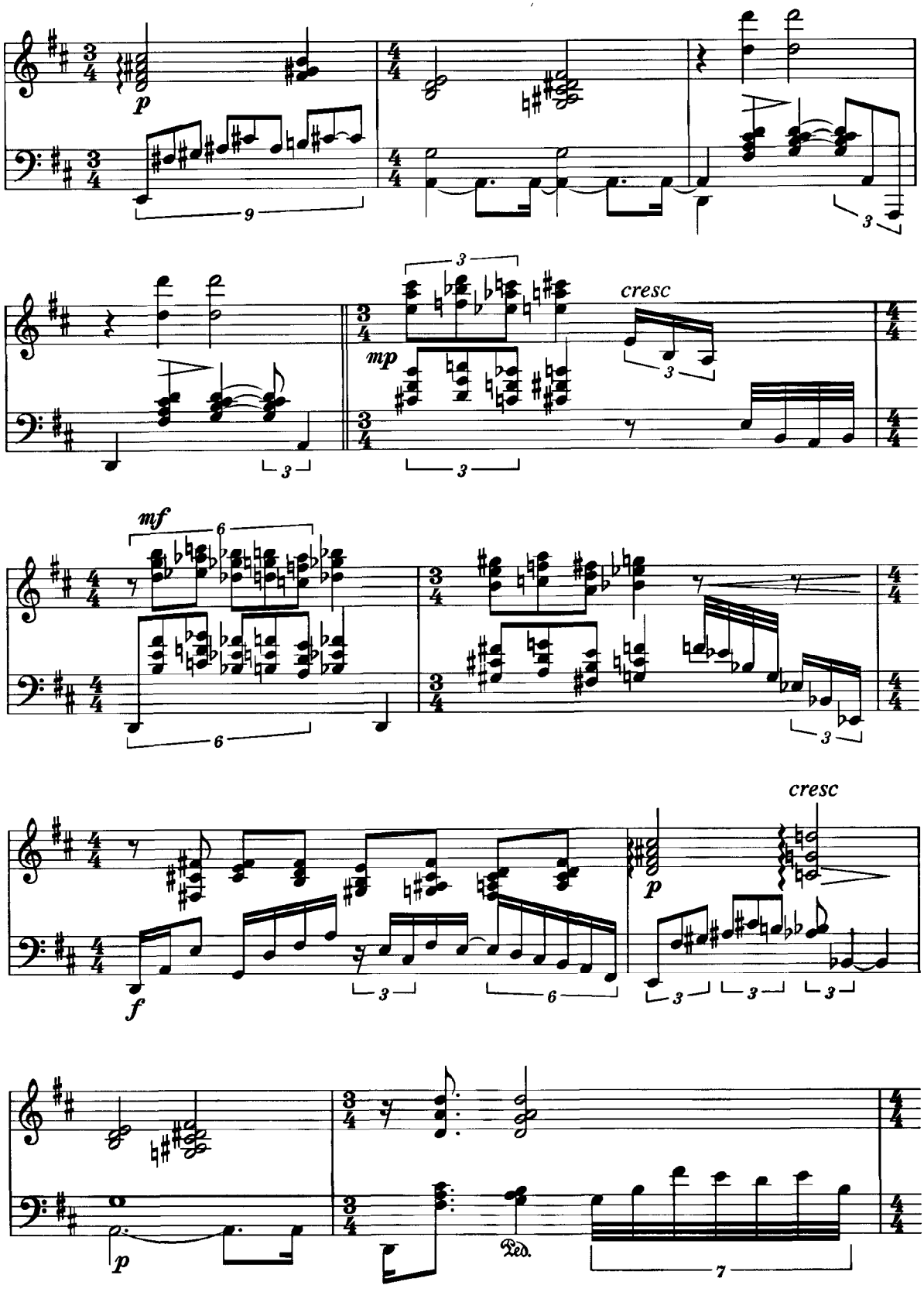
Reflections in D by Duke Ellington (as played by Bill Evans) Transcribed by Jed Distler

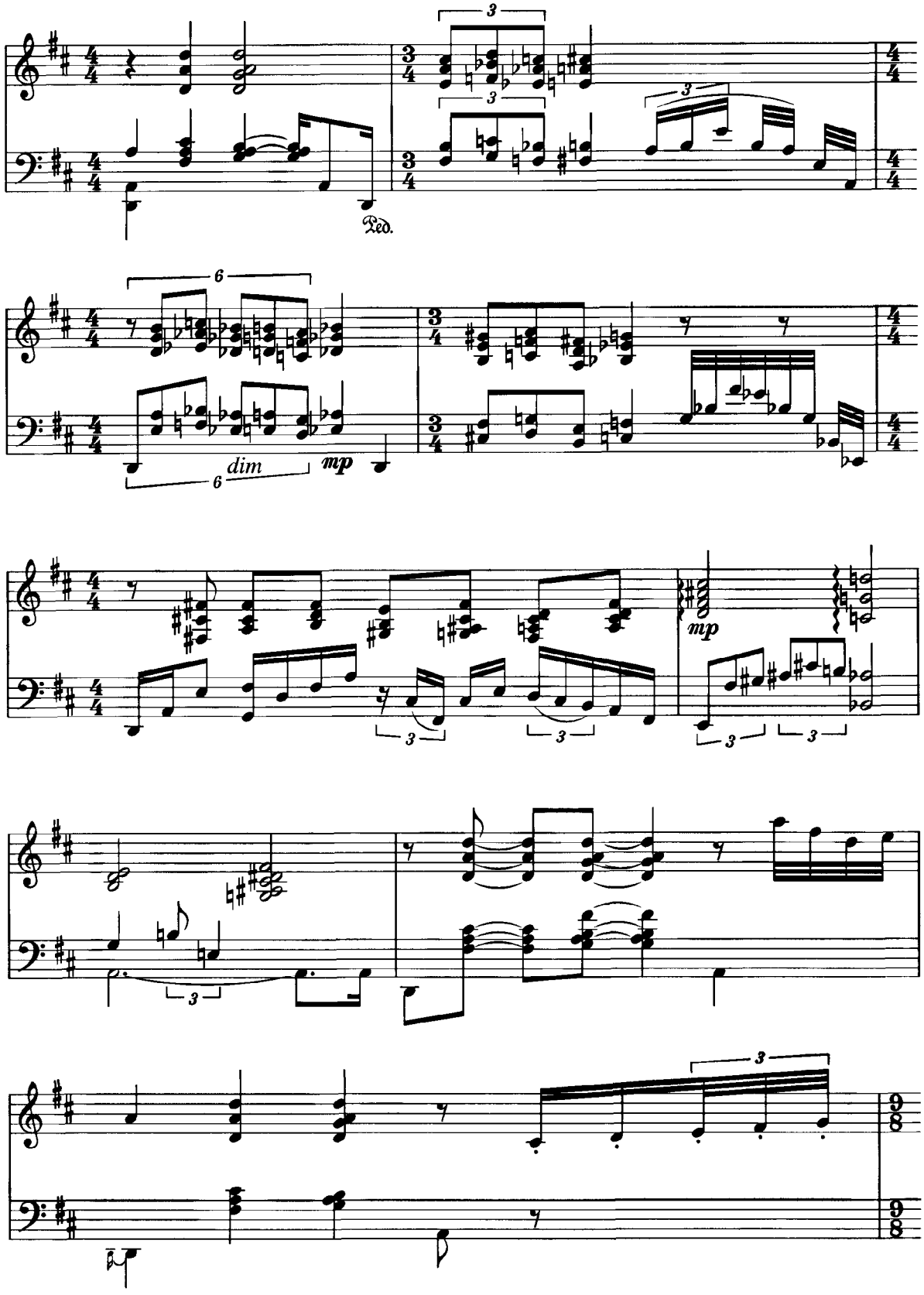


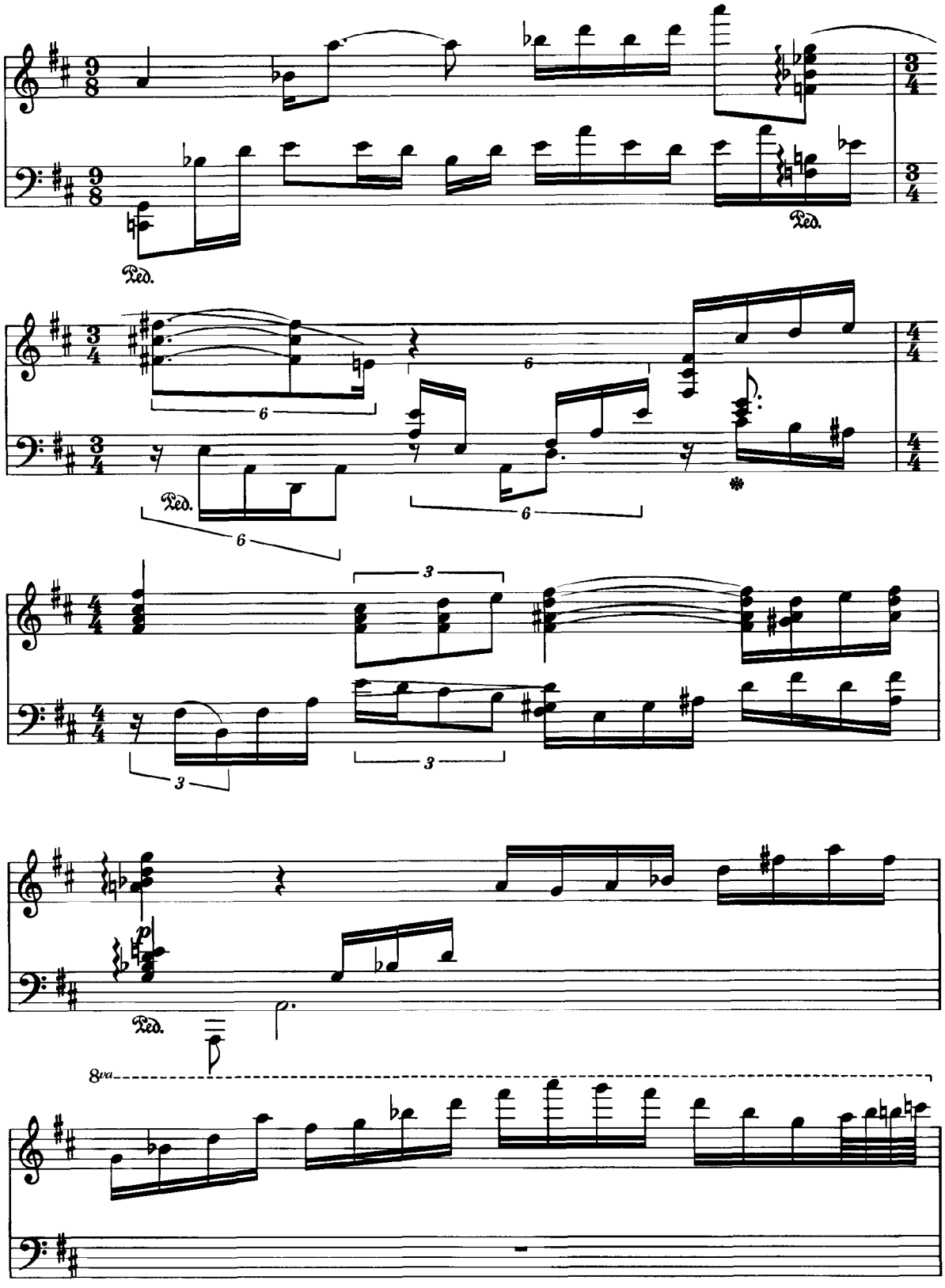

mf
6
3
3
3
mf
3
6
mf
6
f
3
3

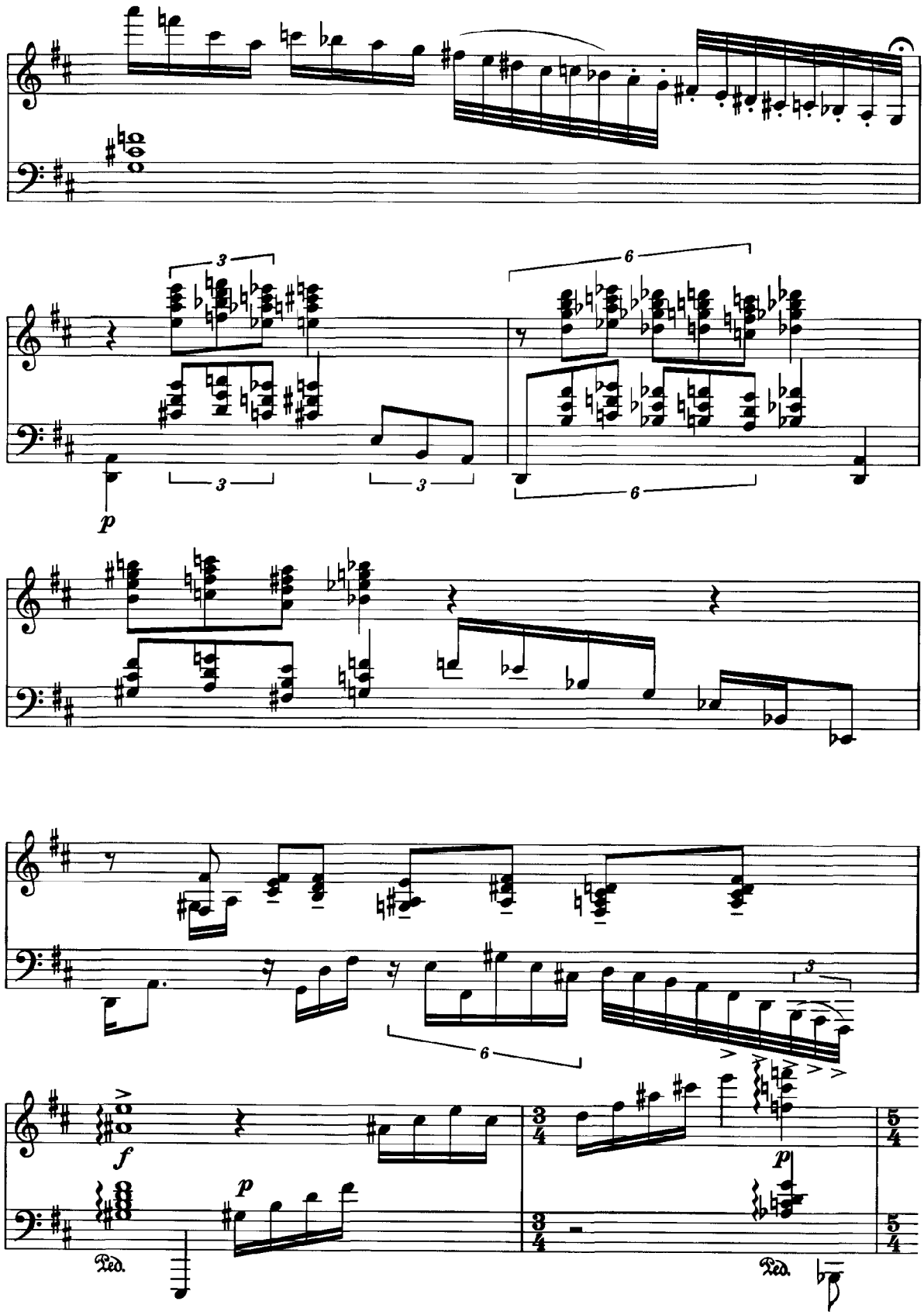

mp
mf
p
f
mp
mp
Ped.
Ped.

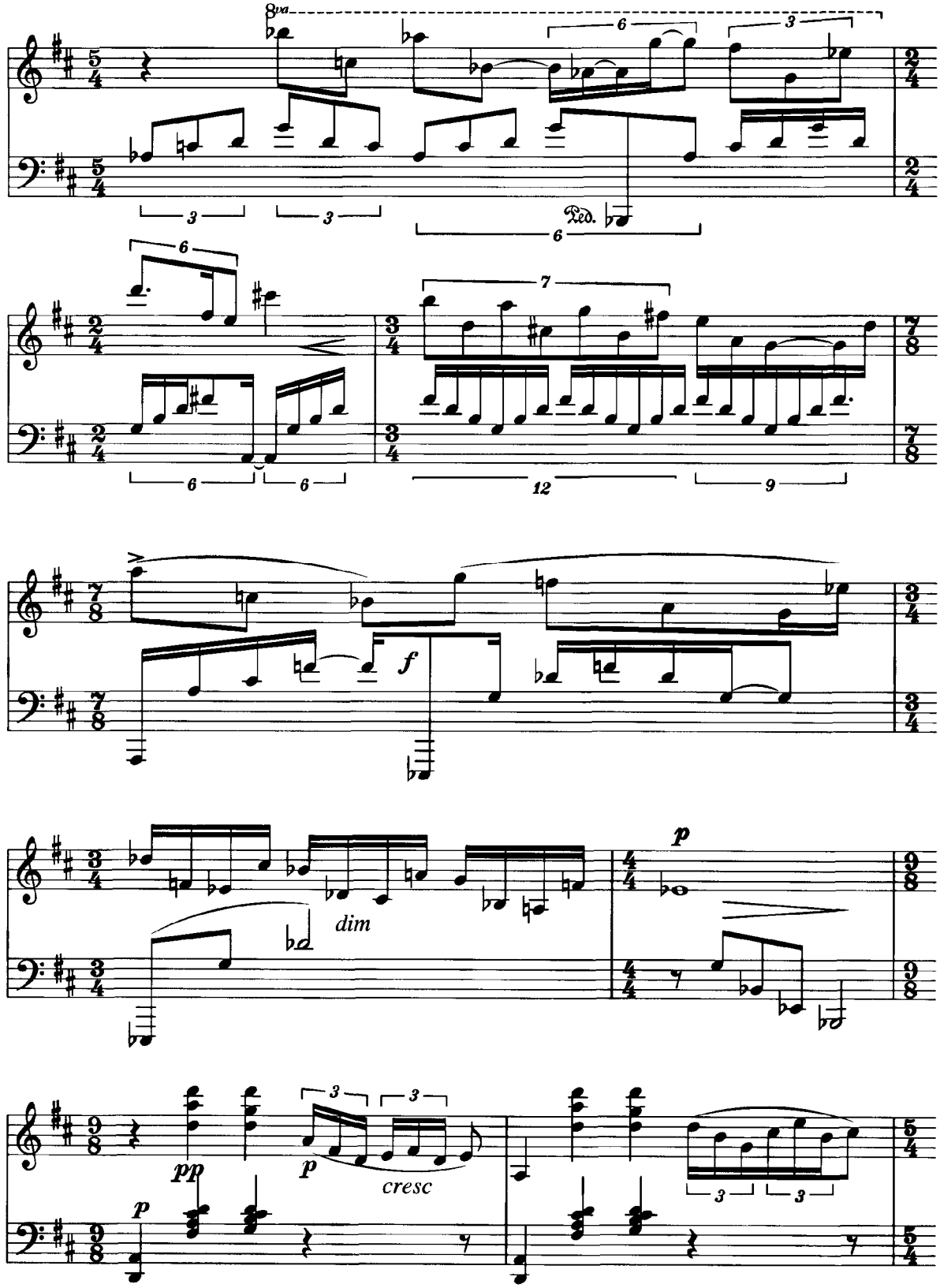

Ped.
Ped.
f
p

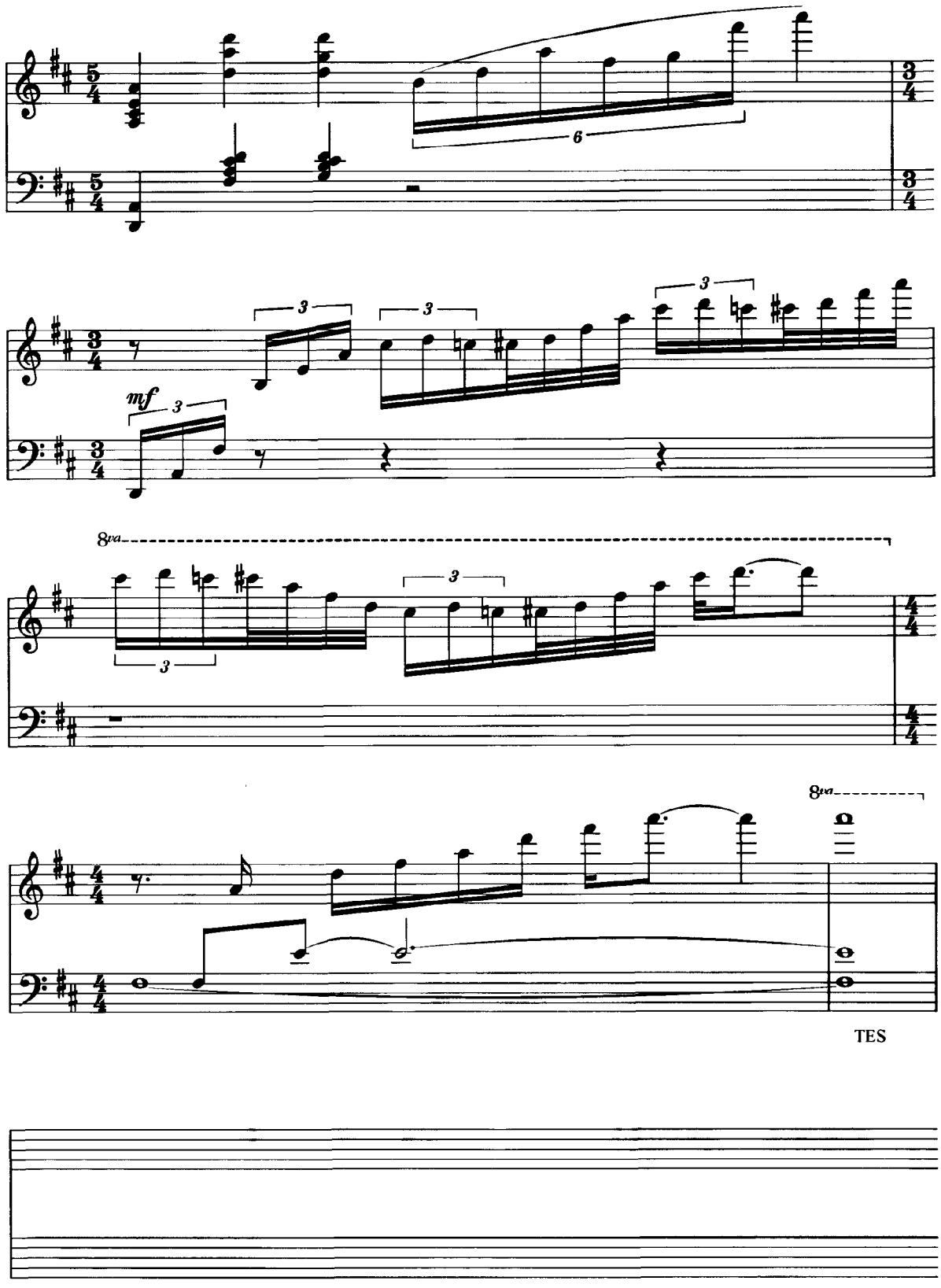

p
9
3
3
cresc
mp
3
3
3
mf
6
6
3
cresc
f
3
6
p
3
3
3
p
Ped.
7


Ped.
dim
mp
mp


Ped.
Ped.
Ped.
Ped.
8va

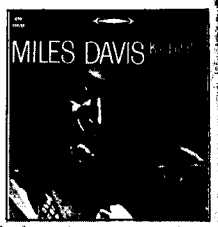

3
3
3
6
6
p
3
6
f
p
p
Ped.
Ped.
3/4
5/4
3/4
5/4


8va
Ped.
f
dim
p
pp
cresc


6
3
3
3
mf
3
8va
3
3
8va
TES

★ピアノ：ビル・エヴァンス

Bill Evans(p)



「カインド・オブ・ブルー／マイルス・デイヴィス」
（CBSソニー CD：CSCS-5141）

●採譜と解説：及川かほる

モードの可能性としての“目録”

昔（と言っても、江戸時代とか室町時代ではないョ）、初顔のメンバーが集まって「ちょっと軽く音出してみようか！」という時、「ぼく、4ビートはあんまり得意じゃないから…」なんてぬかすロック少年がいたりして「じゃあ何か“一発もの”（なんて“品”の良いお言葉でしょう！）やろうよ」という話になる。そんな時たまに登場するのが、この“ソー・ホワット”だった。要するにドリアン一発で、II－Vだなんだと面倒なこと考えずにすむし、おまけにリフが簡単。

そんなこんなで、けっこうなじみ深い曲ではある。マイルスの作品の中で、最高にポピュラーで覚えやすい。

今回とりあげているのは『カインド・オブ・ブルー』の中で1コーラスだけソロをとっているビル・エヴァンスの演奏である。このアルバムは59年に録音され、言うまでもなくマイルス・デイヴィスの代表作なのだが、とにかくメンバーがすごい。マイルス・デイヴィス(tp)、ジュリアン“キャノンボール”アダレイ(as)、ジョン・コルトレーン(ts)の3管編成にビル・エヴァンス(p)、ポール・チェンバース(b)、ジミー・コブ(ds)という、今から考えると夢のようなライン・アップだ。このコンボの中で果たしていたエヴァンスの役割というのはたいへん大きく、サウンドの要と言ってもいいのだが、演奏の方は至って地味である。そういえば、昔から彼を評する時に“知的”という言葉がよく使われた。改めて「なるほどナ」と思う。

管楽器のソロがひと通り回ったところで、テーマに戻る前に1コーラスだけピアノ・ソロを演っているのだが、これがとにかく控え目というか…… はっきり言って、フレイズらしいフレイズがひとつもない。だから、聴いている方からすると「これから始まるのかな？」と思ってたら、もう終わってしまう。「一体アレは何だったのだろうか…？」と思うようなソロではある。

ところが、こうして採譜してみると、あまりにも整然としているのに驚かされる。

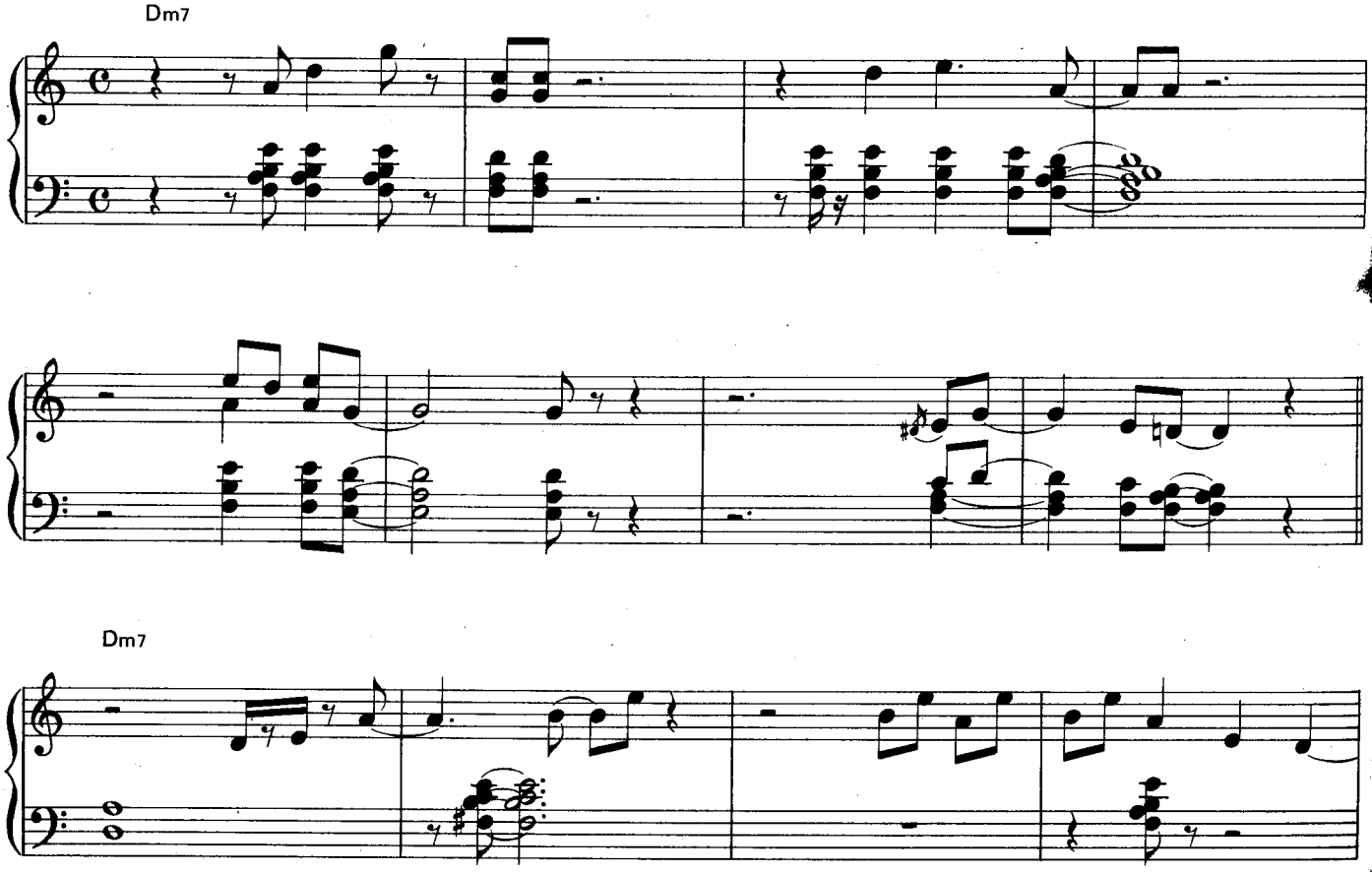
まず最初の8小節では、4度ヴォイシングの体系を見せてくれている。それも、かなりわかりやすく、まるで「4thというのは、このように音を積んでいくんだよ」とでも言っているかのようだ。メロディが動いた時の下のヴォイシングの動き方も、ひと目でわかる。

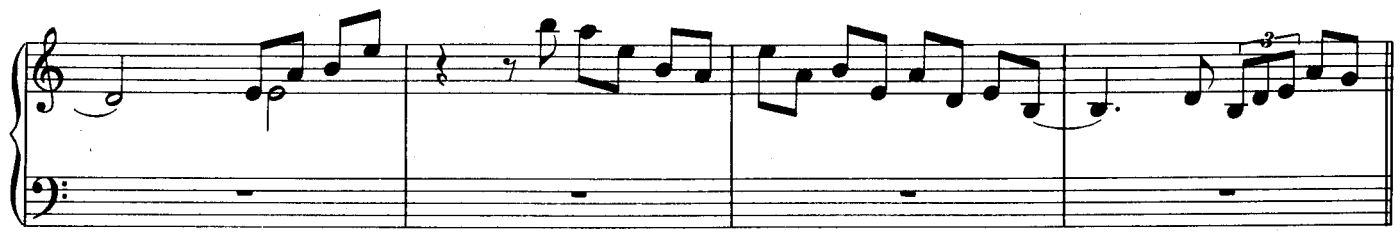
次の8小節は、「G-ペンタで、こんなラインも作れるよ」って感じかな…。要するに、II－V進行の中で作るようなフレイズと一味違ったものを示したのだと思う。4度を強調したフレイズだ。

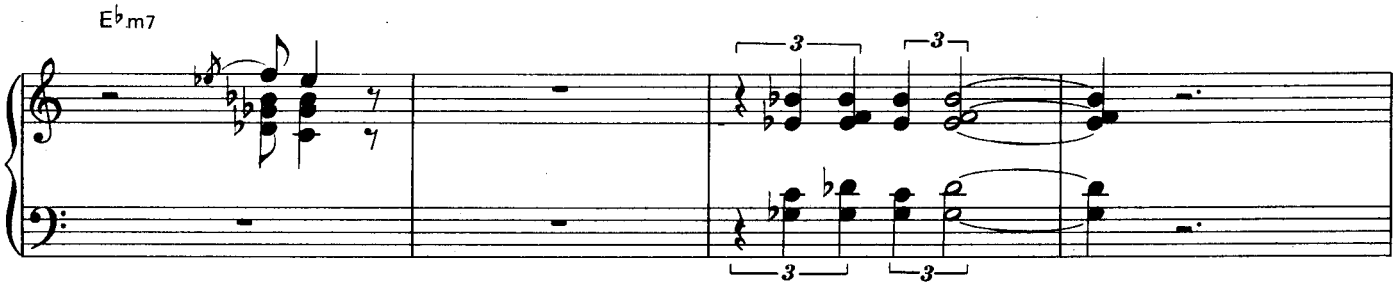
転調してからの8小節は、また一転してブロークン・コードによるソロである。ひとつのヴォイシングの中で、内声・外声のうち2声部を動かす手法だ。7、8小節では、彼得意の、外声を反進行させて内側をヴォイシングしていくやり方がよくわかる。

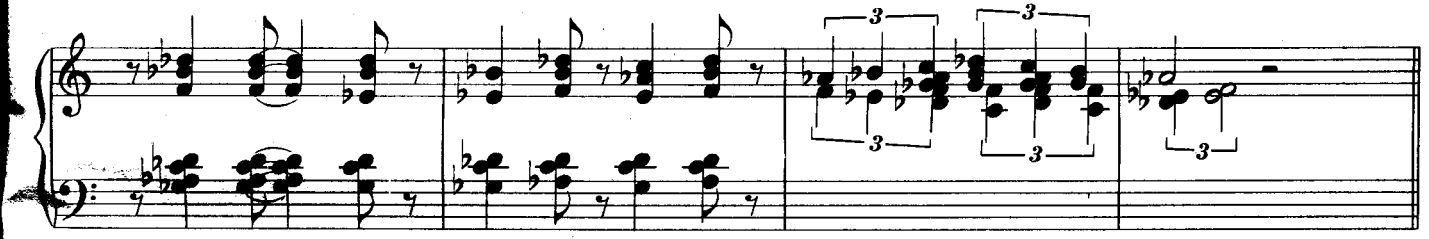
そしてラスト8小節では、右手の簡単なラインに左手が終始2度音程でピッタリ付けている。これこそ、かなり実験的なやり方だと思うし、もっと発展させていって、あと1コーラスぐらいは聴きたい気がするが、エヴァンスにはまったくその気がないのがわかる。

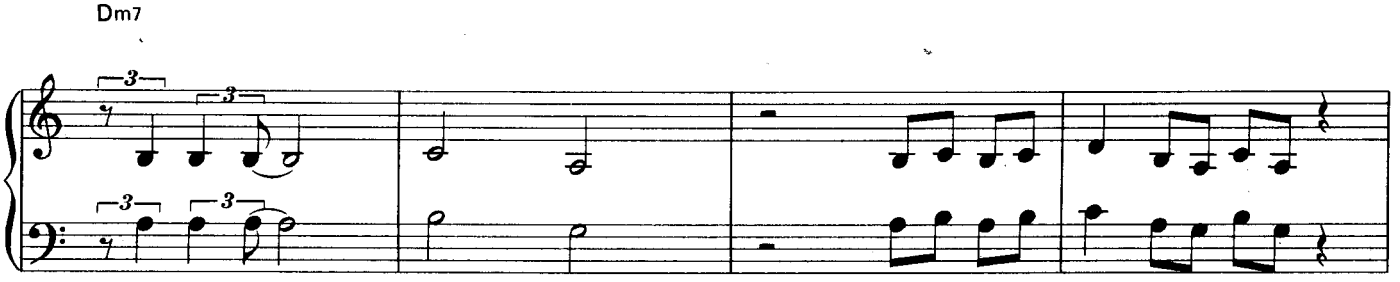
この8小節×4の部分で、彼は“目録”を私たちに見せてくれた、と思えばいいのではないか。いかにも彼らしくて、微笑ましいではありませんか！ ■

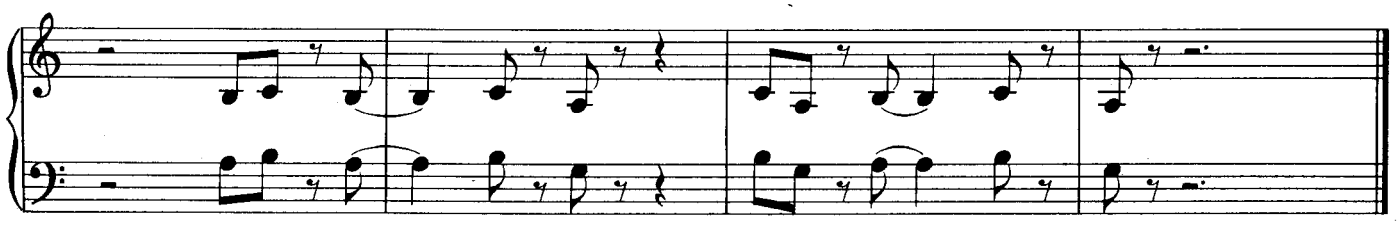





E♭m7




Dm7

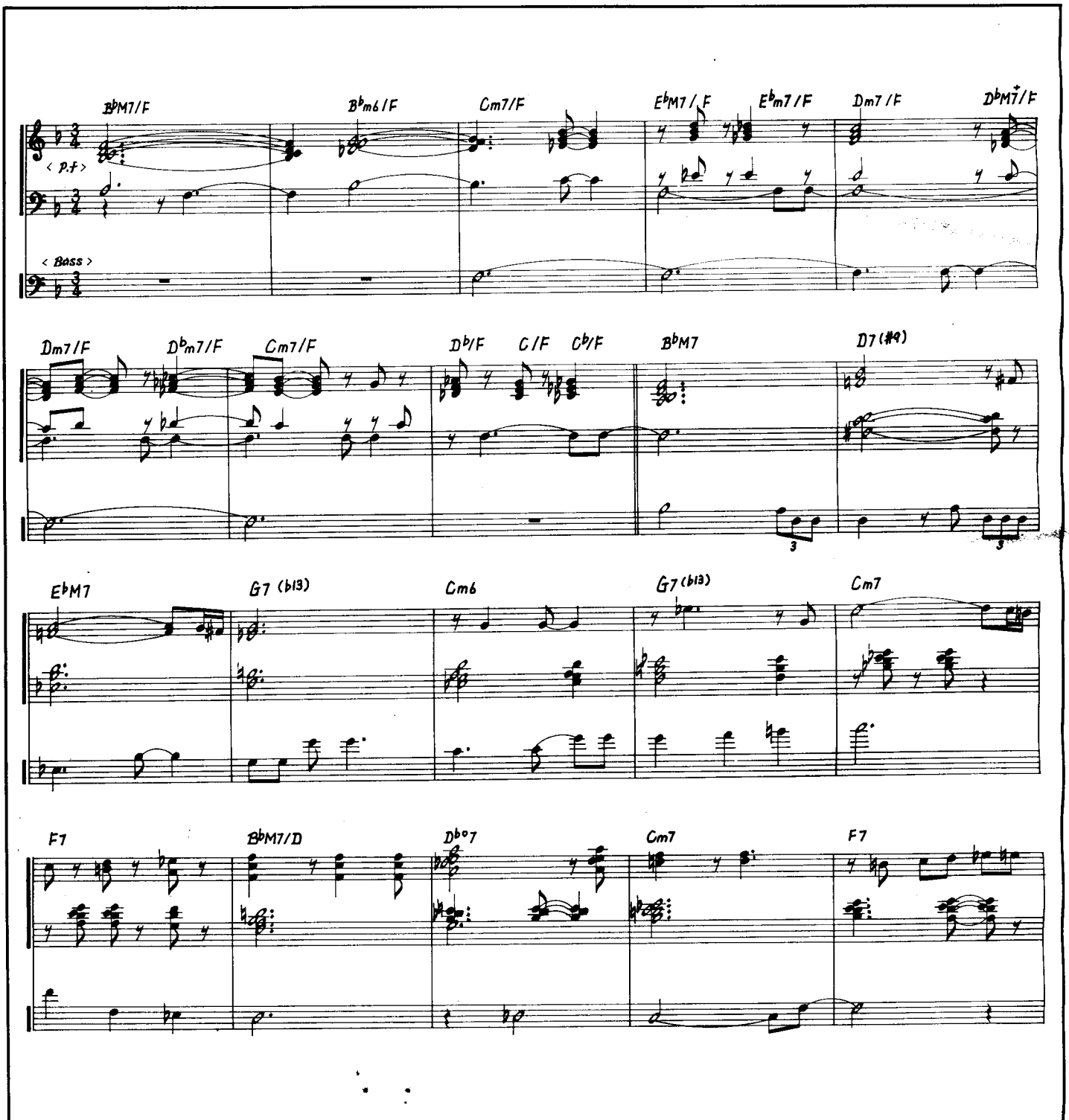


BILL EVANS
SOMEDAY MY PRINCE WILL COME

美しさの中に、華麗かつ過激なソロが展開

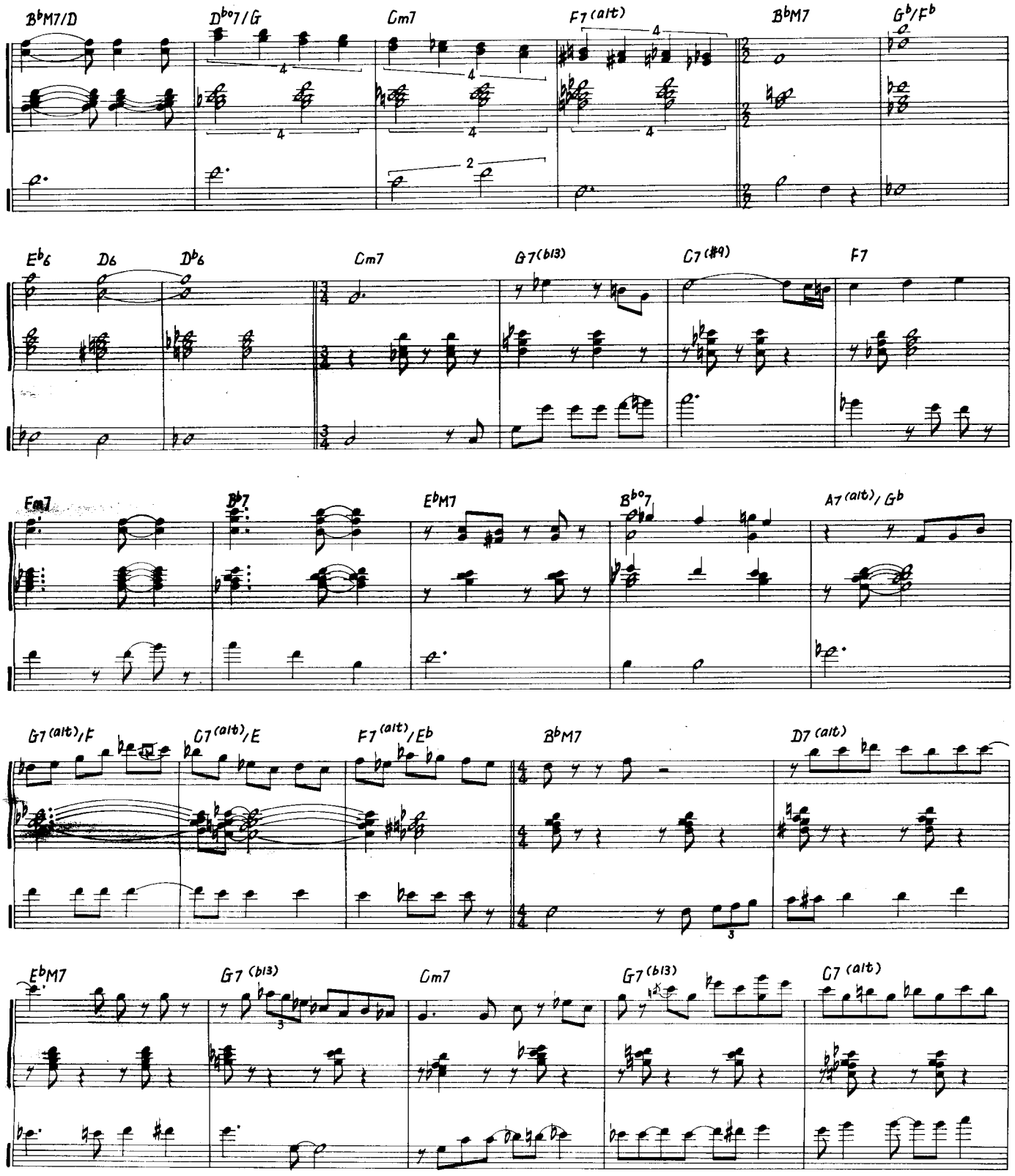
ビル・エヴァンスのライヴ盤『ワルツ・フォー・デビー』より、
「いつか王子様が」をおとどけしよう。洗練された美しさと、華麗かつ過激なソロはもう圧倒的!!
延々と続く右手の素速いパッセージ、細かいフレイズをひとつずつおいかけてていねいに練習してみてはどうかな。

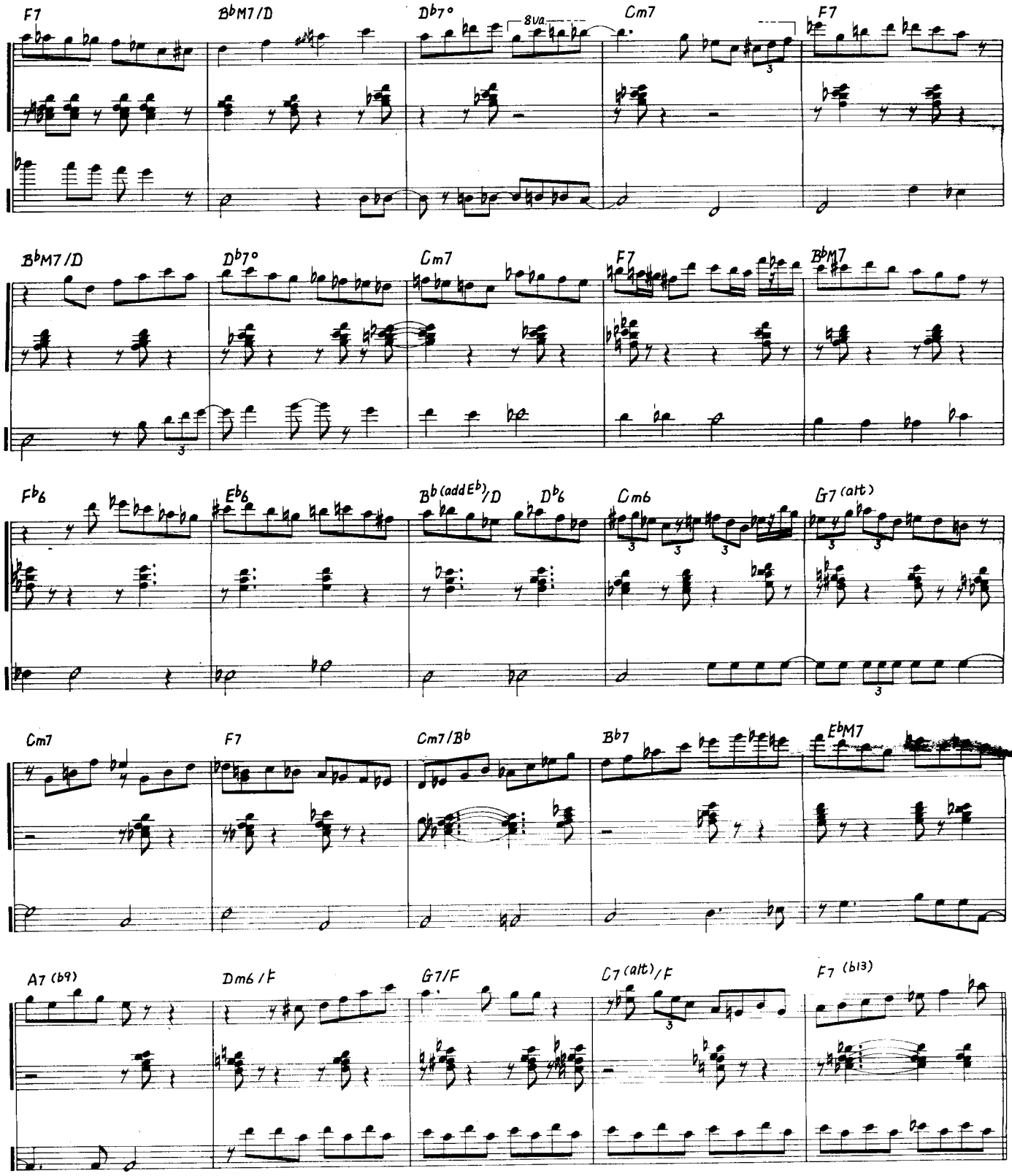
『ワルツ・フォー・デビー』(ビクターCD:VJD-1163/LP:VIJ-28164)



Music By F.Churchill

© 1932 WARNER BROS. INC. All Rights Reserved Rights for Japan administered by WARNER BROS. MUSIC (JAPAN) INC., c/o NICHION, INC.


B♭M7/D
D♭o7/G
Cm7
F7 (alt)
B♭M7
G♭/F♭
E♭6
D6
D♭6
Cm7
G7(♭13)
C7 (#9)
F7
Fm7
B♭7
E♭M7
B♭o7
A7 (alt)/G♭
G7 (alt)/F
G7 (alt)/E
F7 (alt)/E♭
B♭M7
D7 (alt)
E♭M7
G7 (♭13)
Cm7
G7 (♭13)
C7 (alt)

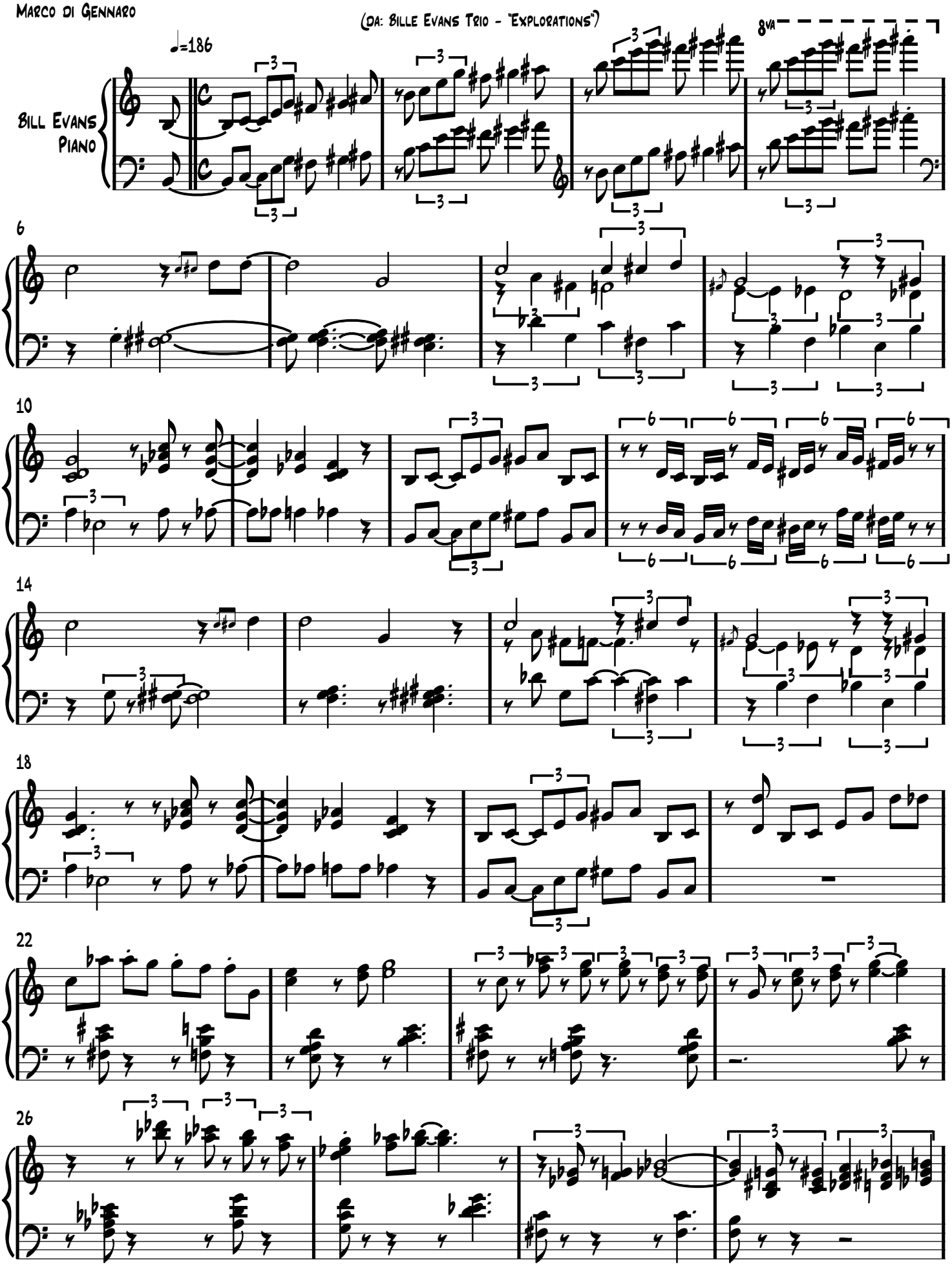

F7
B♭M7/D
D♭7°
8va
Cm7
F7
B♭M7/D
D♭7°
Cm7
F7
B♭M7
F♭6
E♭6
B♭(add E♭)/D
D♭6
Cm6
G7(alt)
Cm7
F7
Cm7/B♭
B♭7
E♭M7
A7(♭9)
Dm6/F
G7/F
C7(alt)/F
F7(♭13)

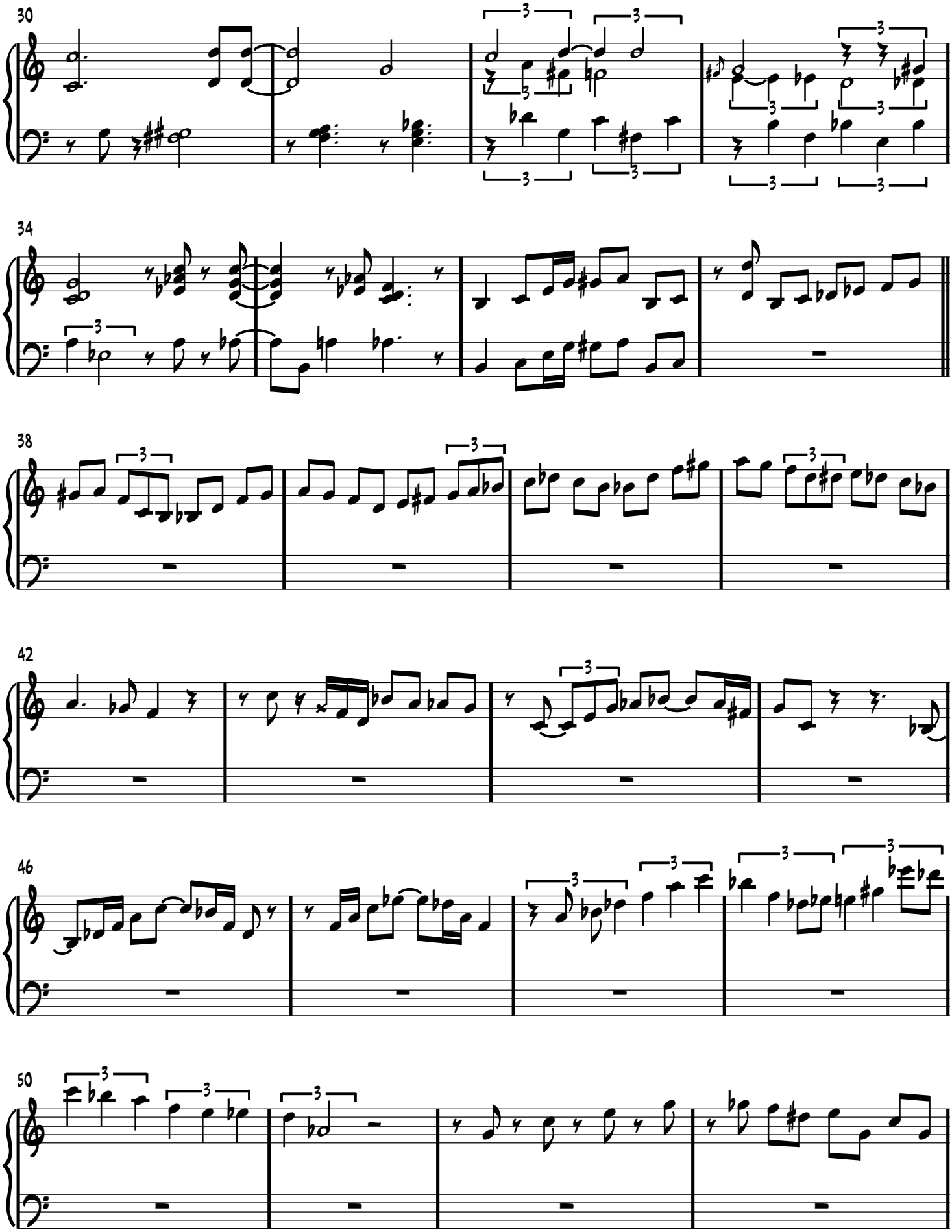
Sweet and Lovely

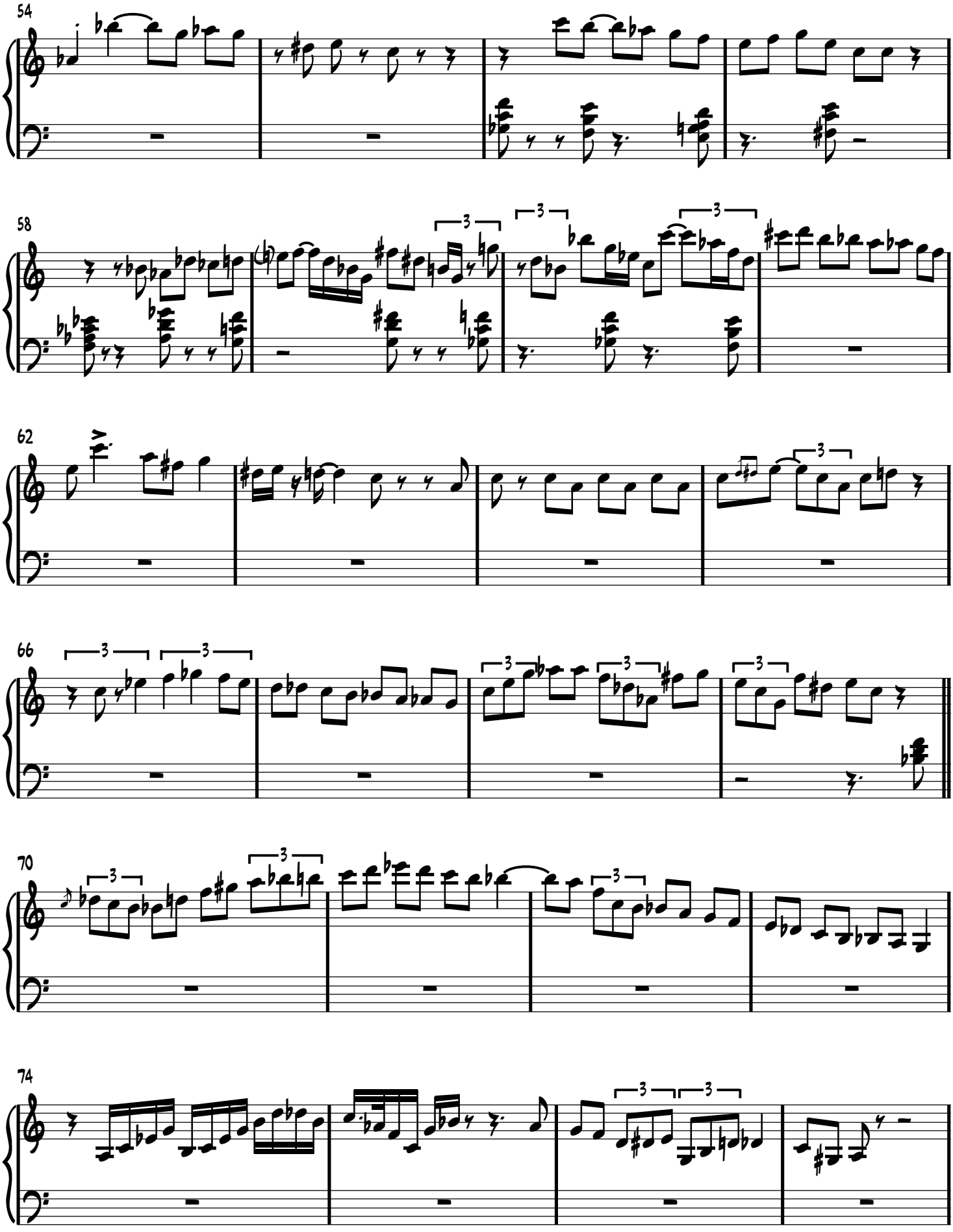
Trascrizione:
Marco di Gennaro

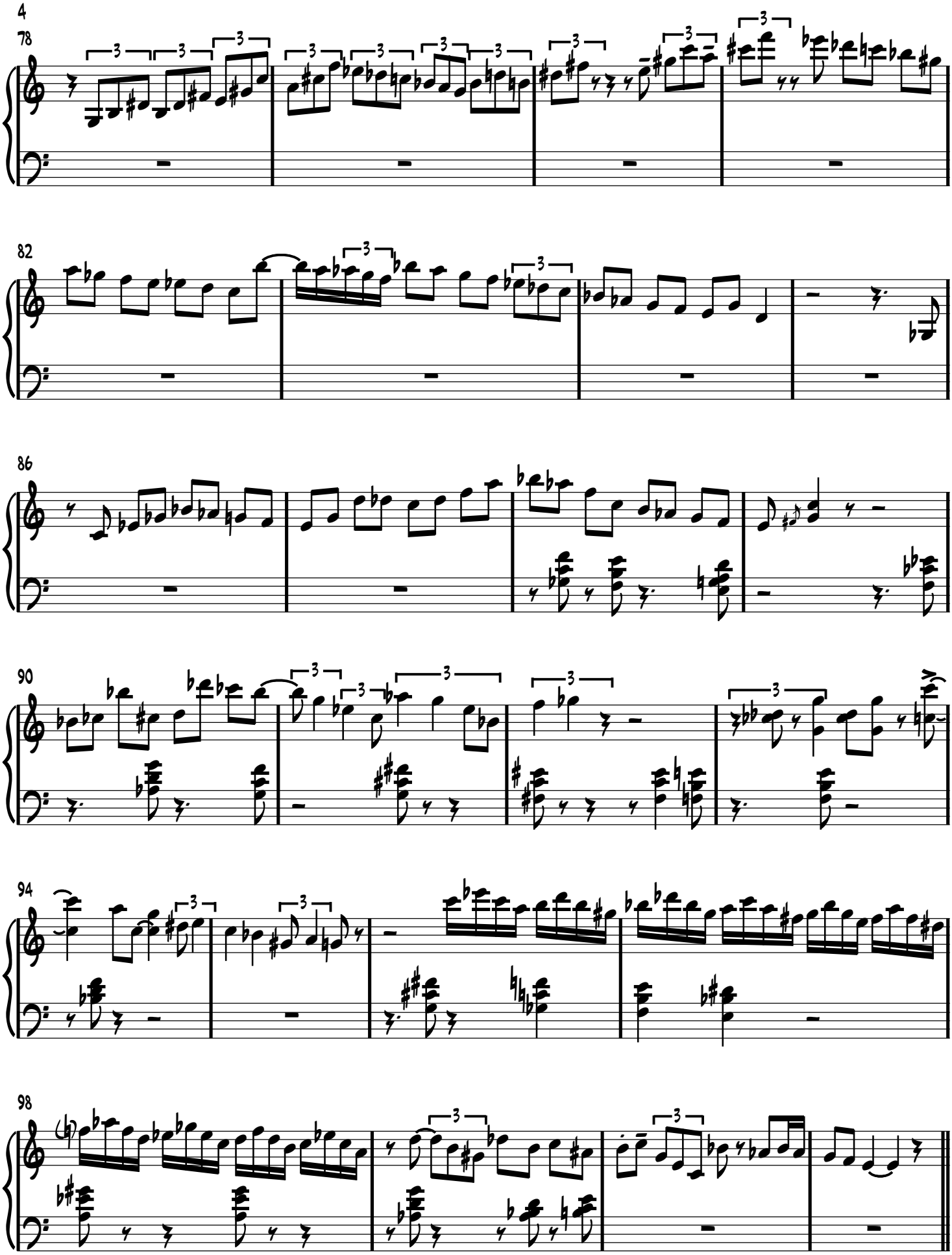
(da: Bille Evans Trio - "Explorations")

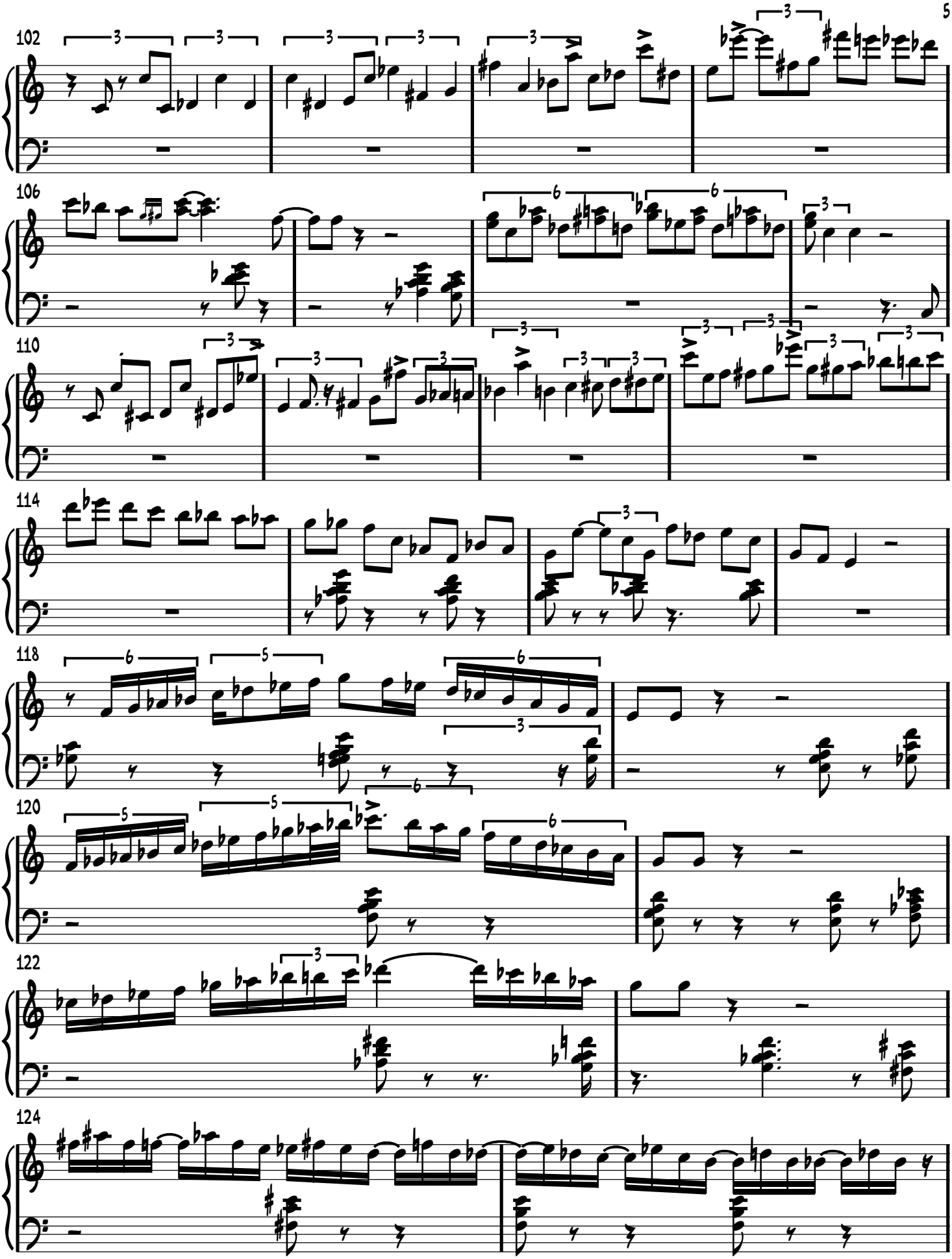
Gus Arnheim

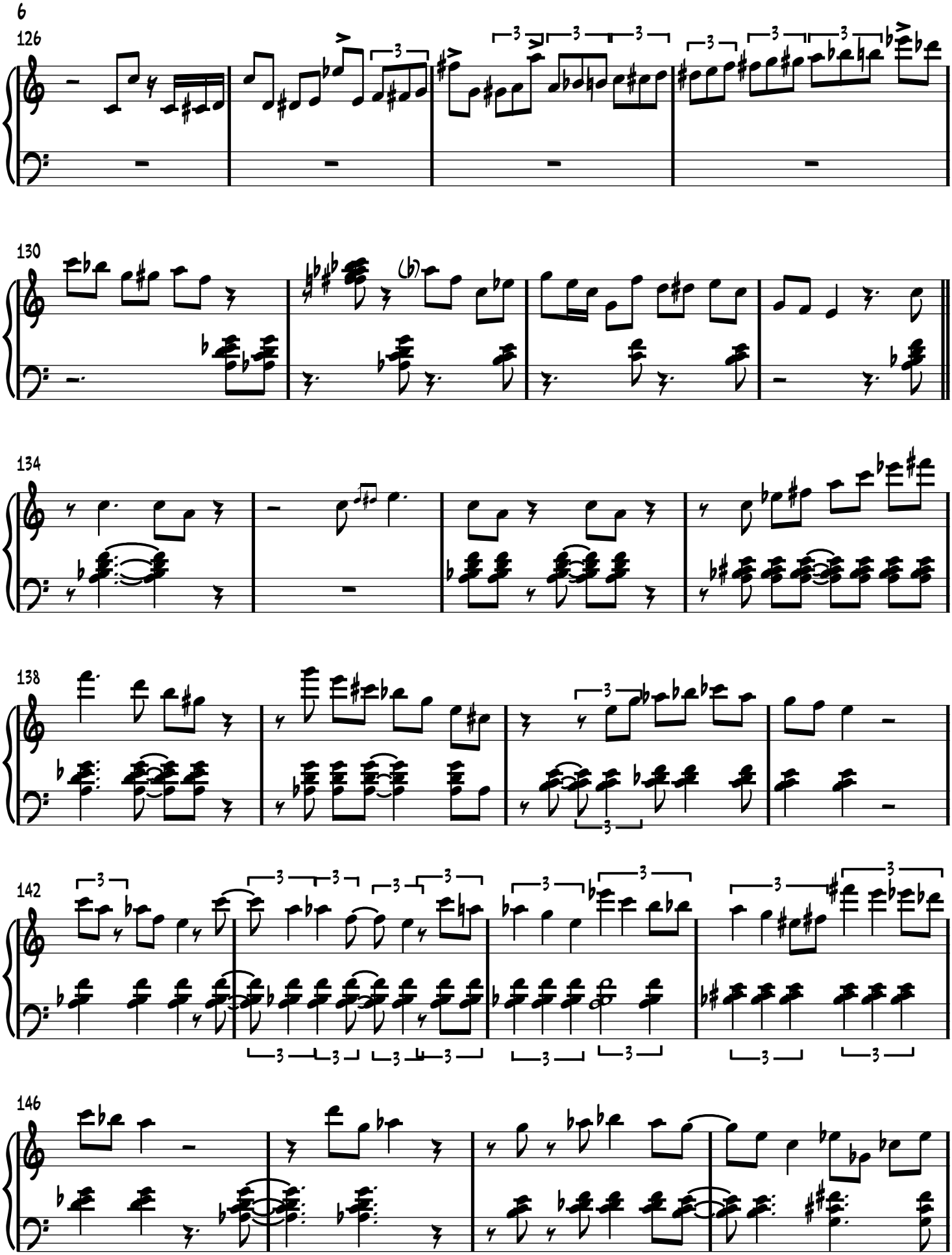


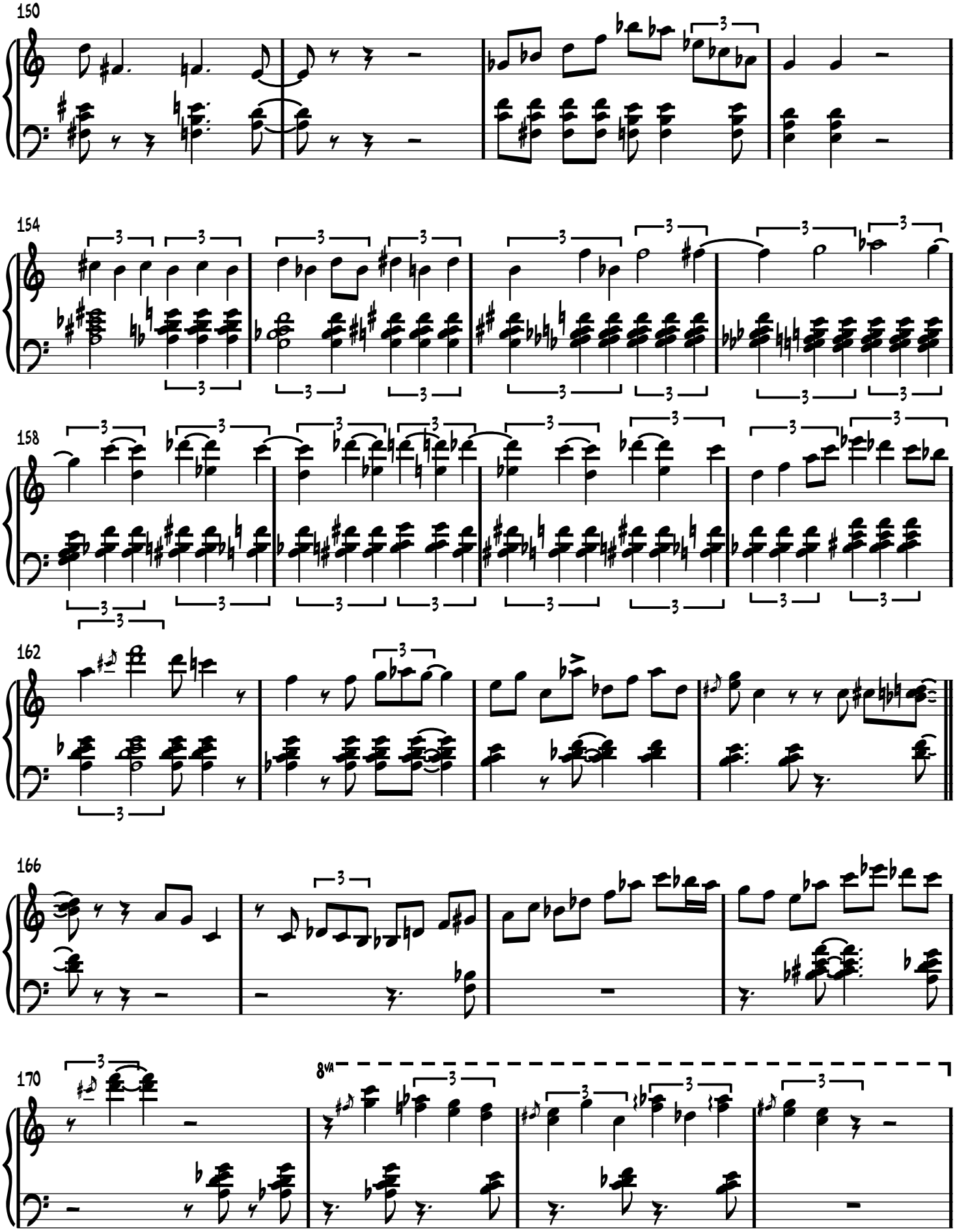

30
34
38
42
46
50

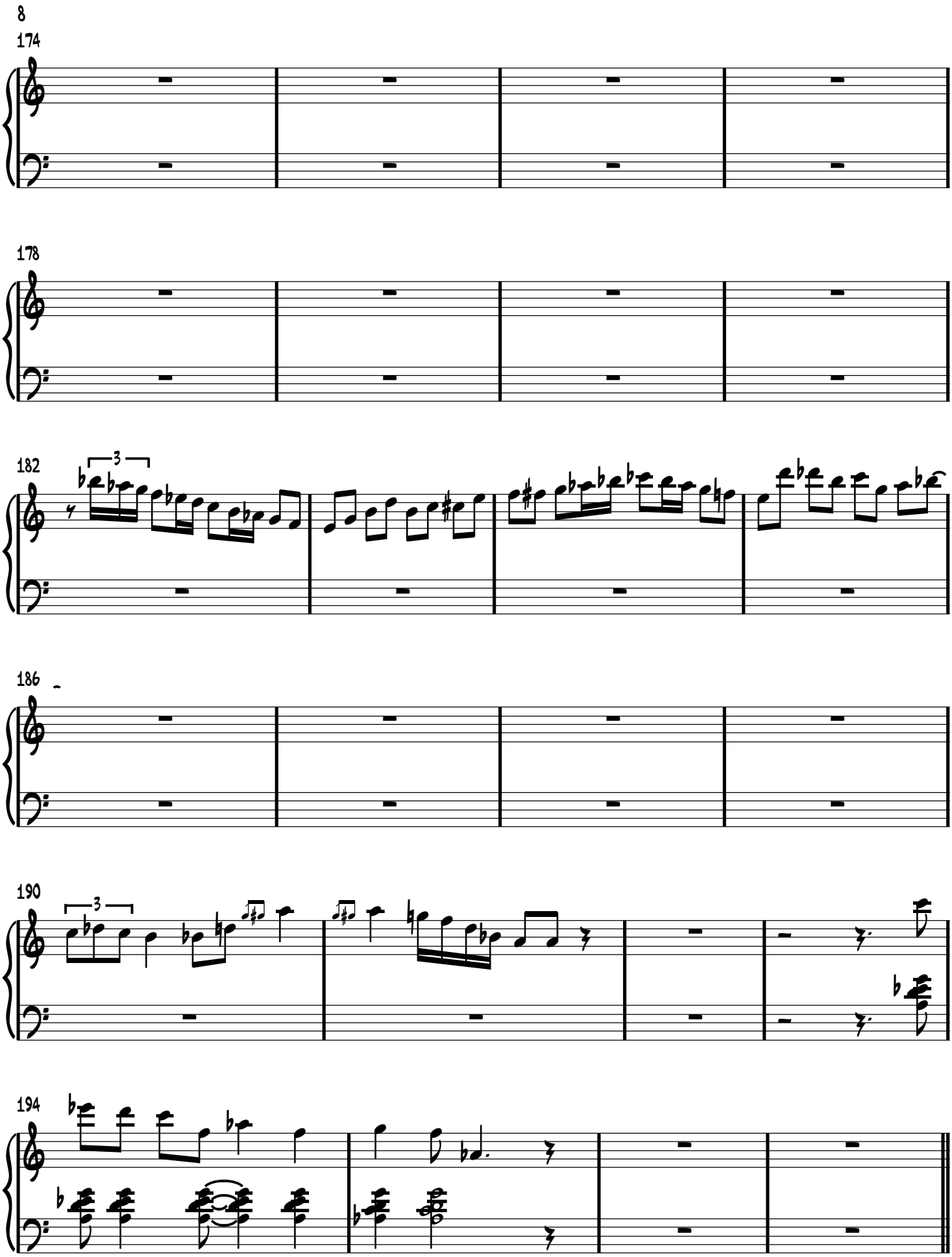

54
58
62
66
70
74


4
78
82
86
90
94
98

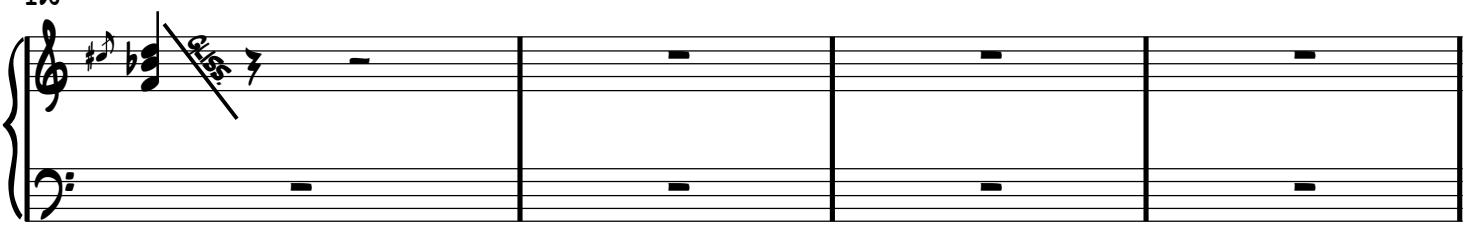

102
106
110
114
118
120
122
124


126
130
134
138
142
146

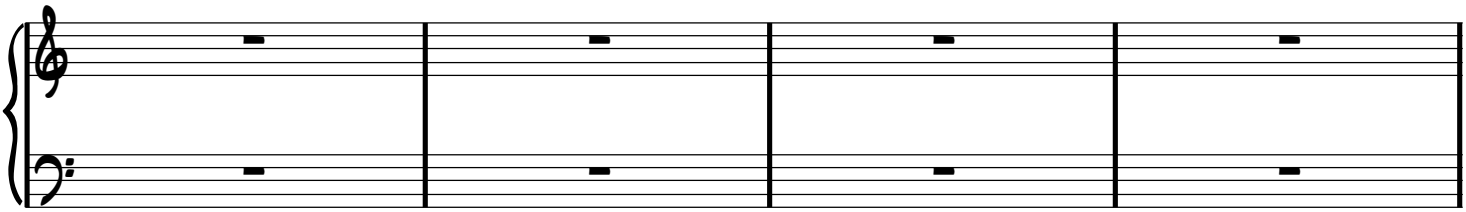

150
154
158
162
166
170
8va


8
174
178
182
186
190
194

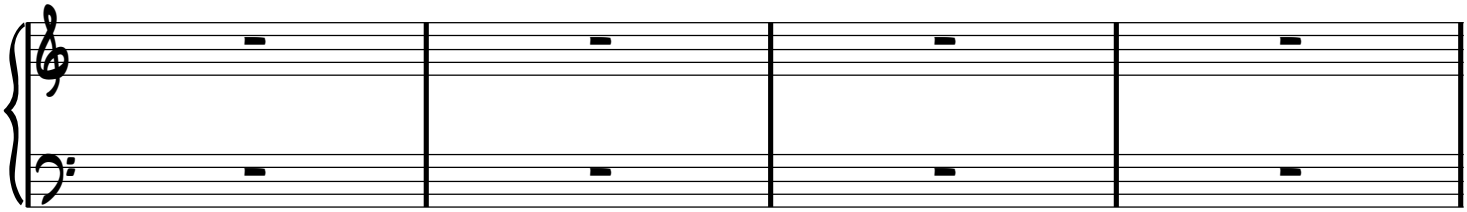
198



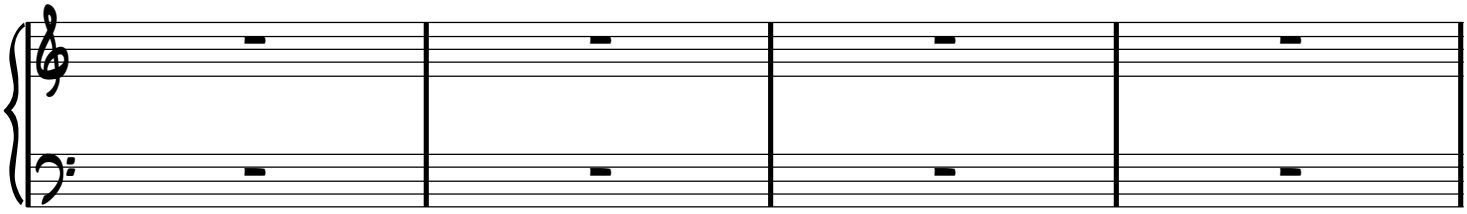
202



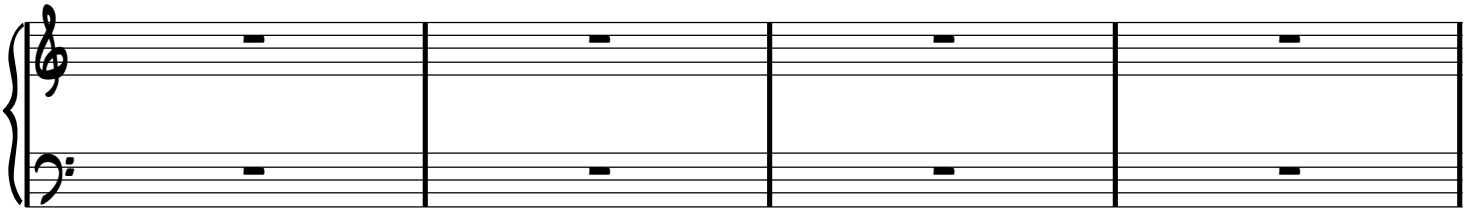
206



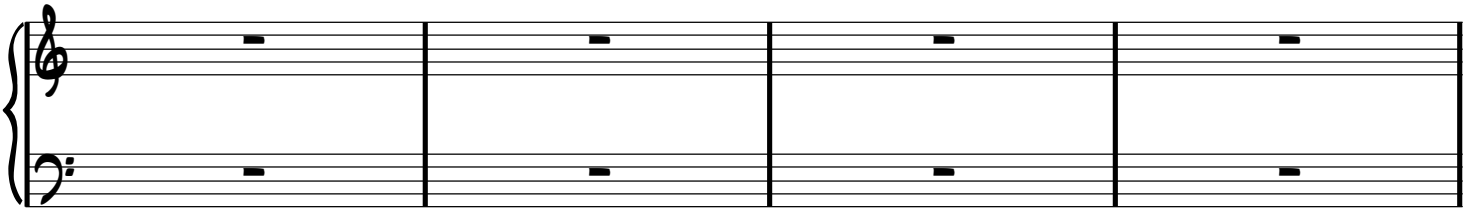
210

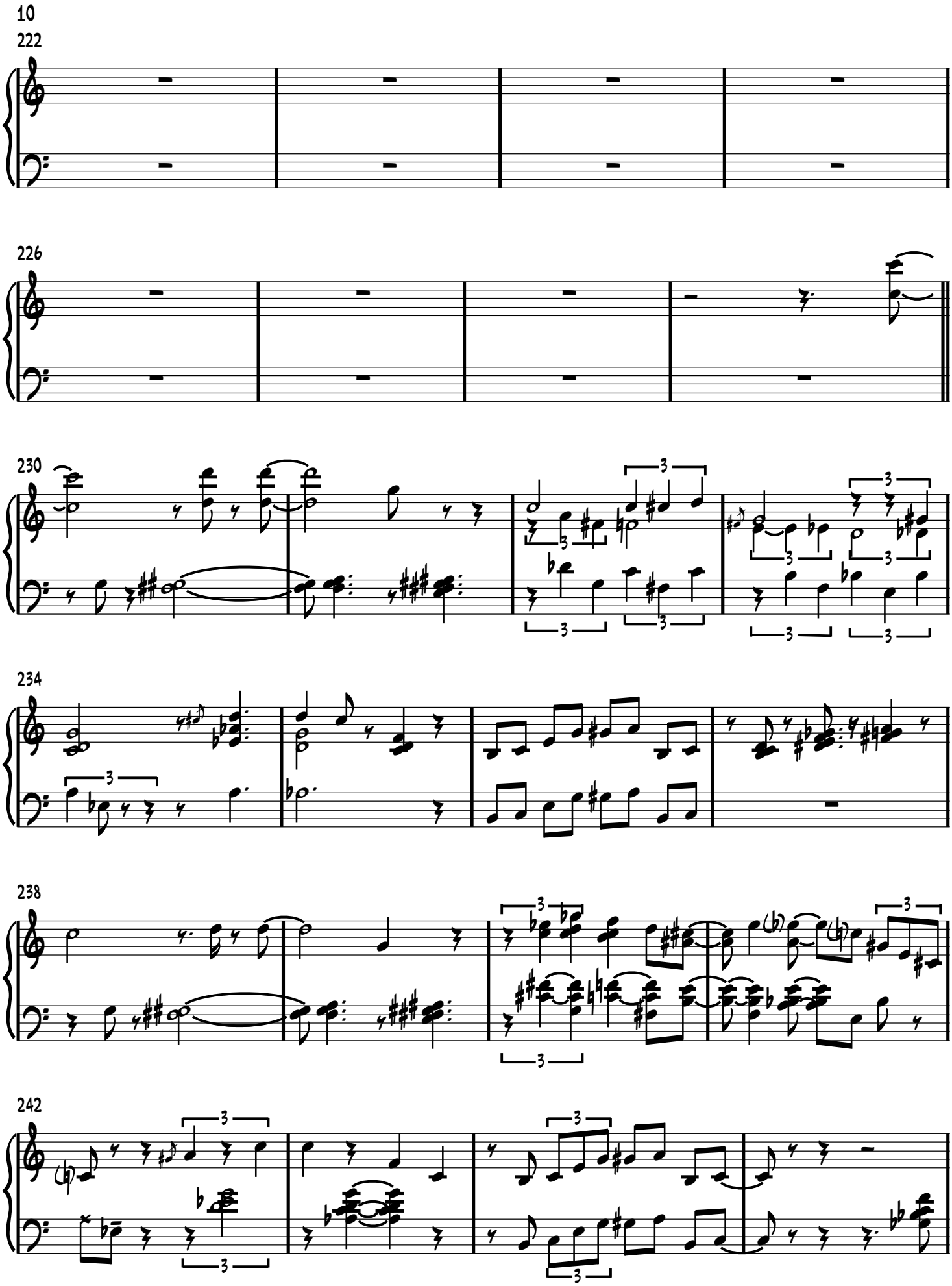


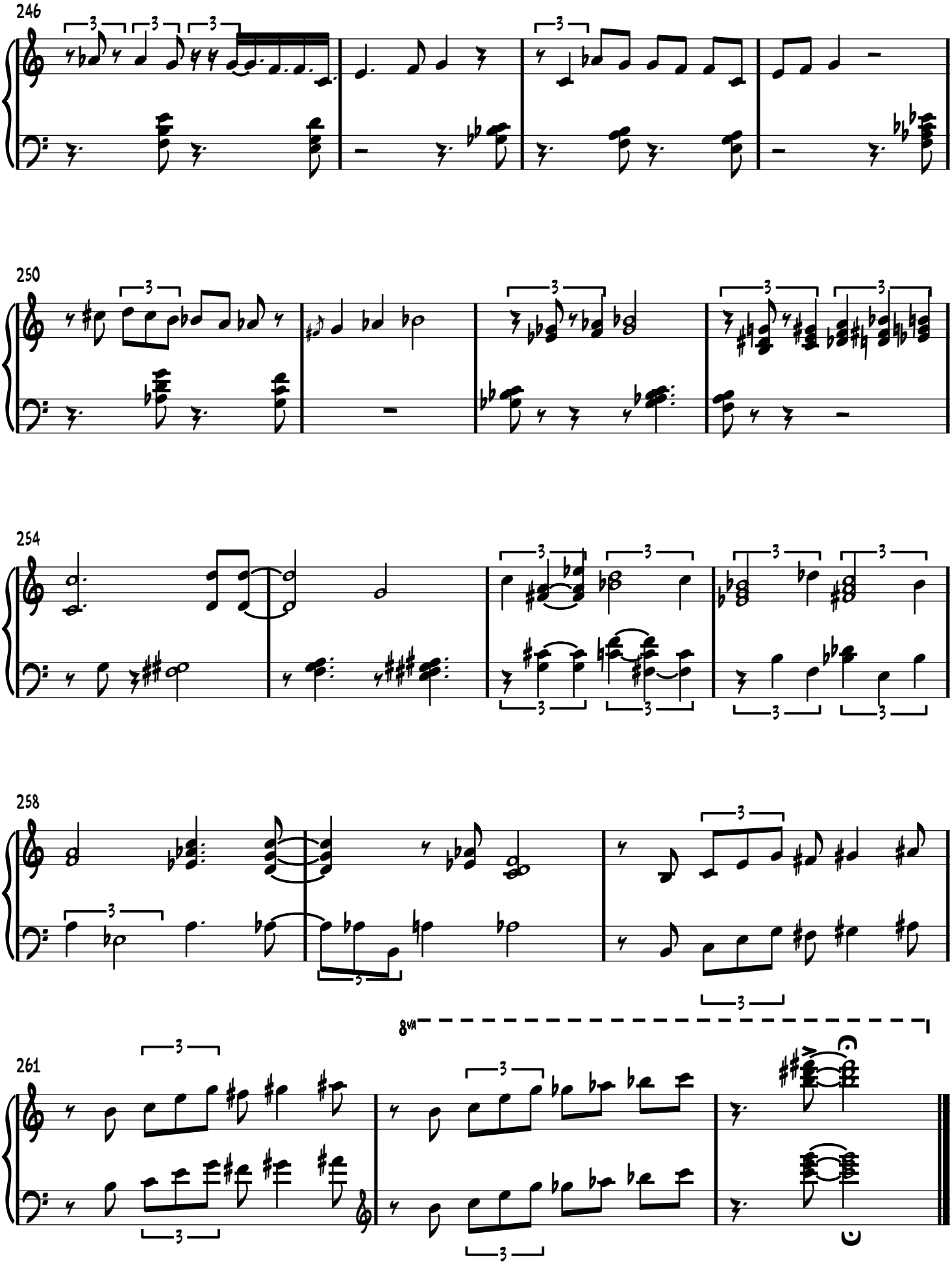
214



218




10
222
226
230
234
238
242


246
250
254
258
261
8va

BILL EVANS

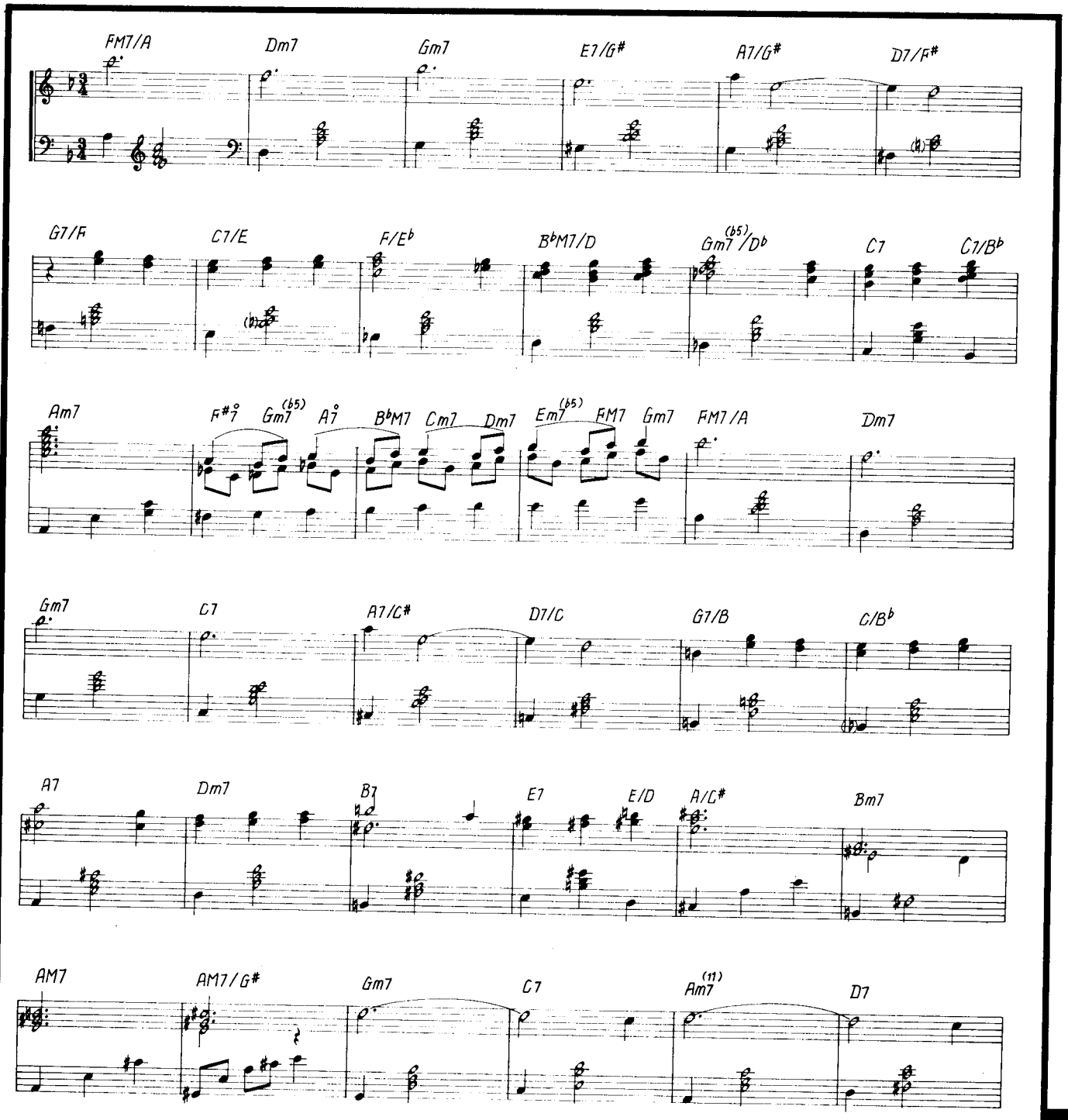
SCORE 2

WALTZ FOR DEBBY

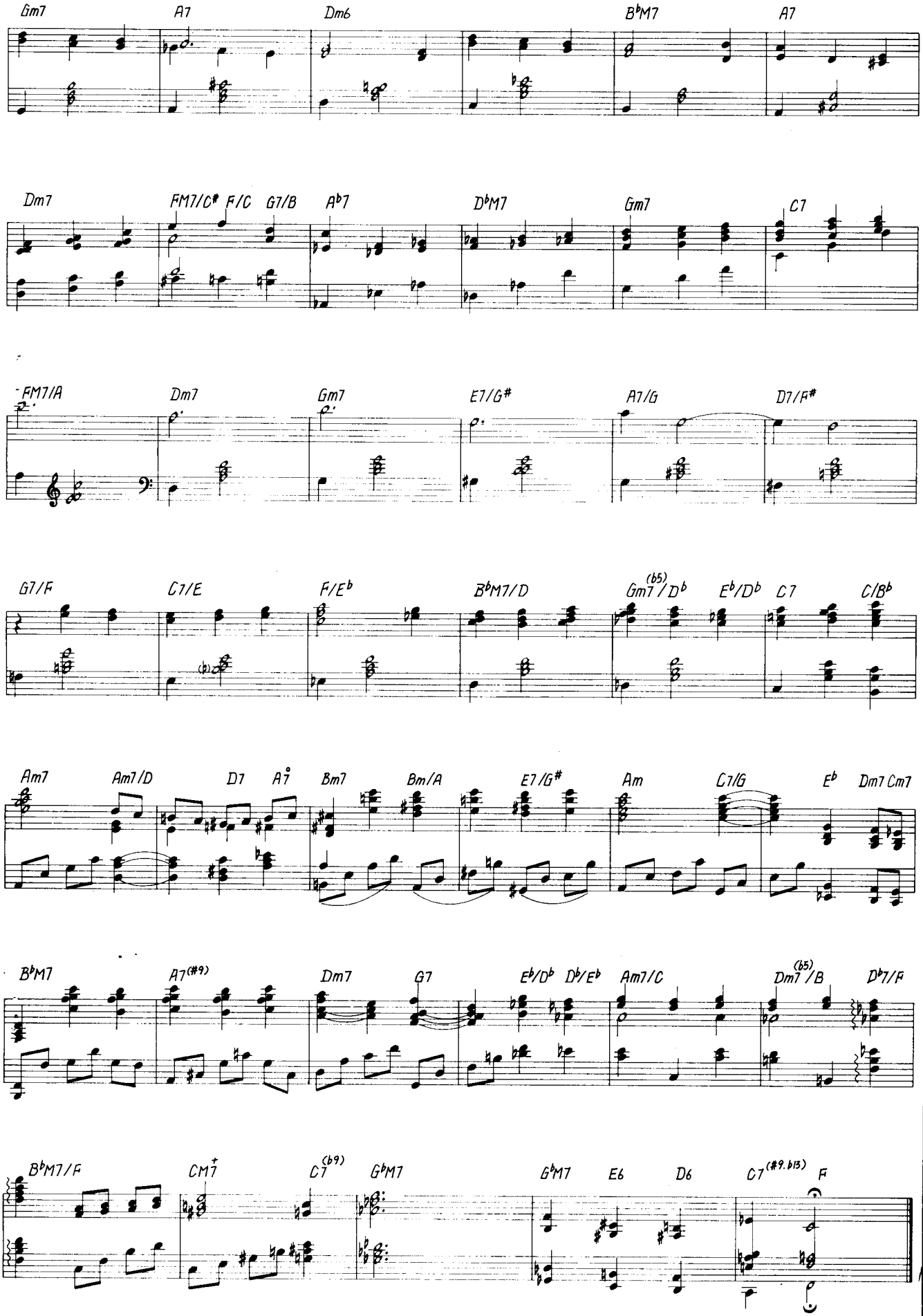
SIDE2⑤収録

ピアノ・ソロで ワルツ・フォー・デビー

「ワルツ・フォー・デビー」といえば、ビル・エヴァンスの名曲だが、エヴァンス自身もよほど気にいっているのか、この18枚組の中でも4つの「ワルツ・フォー・デビー」テイクを残している。そうした数ある中から、最も初期に録音された（56年）ピアノ・ソロによる「ワルツ～」をおとどけしよう。後期の豊かさ、ふくよかさはないが、後々まで貫かれるアイディアの原型がここに聴けるはずだ。



©1964 & 1965 by ACORN MUSIC CORP., New York, N. Y., U. S. A.
Rights for Japan controlled by Ivan Mogull Music Corp. of Japan, Inc./Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only.


Gm7 A7 Dm6 B♭M7 A7
Dm7 FM7/C♯ F/C G7/B A♭7 D♭M7 Gm7 C7
FM7/A Dm7 Gm7 E7/G♯ A7/G D7/F♯
G7/F C7/E F/E♭ B♭M7/D Gm7(♭5)/D♭ E♭/D♭ C7 C/B♭
Am7 Am7/D D7 A♮7 Bm7 Bm/A E7/G♯ Am C7/G E♭ Dm7 Cm7
B♭M7 A7(♯9) Dm7 G7 E♭/D♭ D♭/E♭ Am7/C Dm7(♭5)/B D♭7/F
B♭M7/F CM7 C7(♭9) G♭M7 G♭M7 E6 D6 C7(♯9.♭13) F

名演を探せ!!

WALTZ FOR DEBBY

ビル・エヴァンス(p)＆キャノンボール・アダレイ(as)の名演「ワルツ・フォー・デビー」

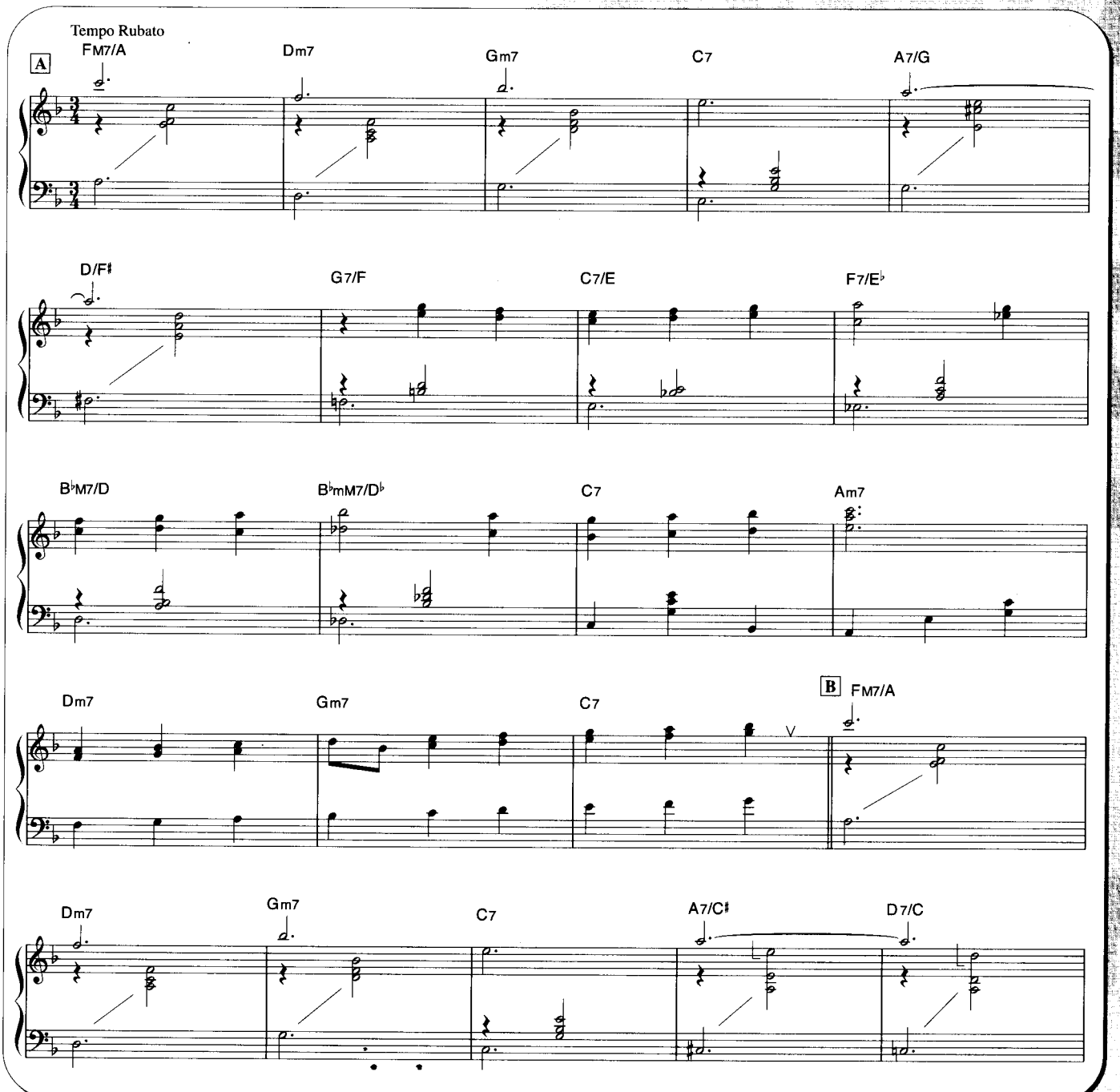
エヴァンス永遠の名曲をキャノンボールと共演

1980年9月15日、肝硬変その他の合併症で急逝したピアニスト、ビル・エヴァンスの、今年は生誕70周年になる。ジャズ・ピアノの偉大なイノヴェーターのひとりであり、今なお大きな影響力と人気をもつ彼だが、今月はその数多い演奏曲の中から、最も人気が高いと思われる「ワルツ・フォー・デビー」を取り上げた。この曲は、エヴァンスが兄の娘であるデビーに捧げた可憐なワルツで、初リーダー作『ニュー・ジャズ・コンセプション』で発表された。その後何度も録音しているが、最も有名なものがヴィレッジ・ヴァンガードでのライヴを収録した『ワルツ・フォー・デビー』(1961年6月録音)だろう。しかし、ここに掲載したのは、アルト奏者キャノンボール・アダレイと共演した『ノウ・ホワット・アイ・ミーン』収録のテイク。ヴィレッジ・ヴァンガードの3ヵ月前の録音で、同じく絶頂期の頃といえる。キャノンボールも、「ワーク・ソング」を始め、数々のファンキー路線で大ヒット中で、ふたりとも波に乗っている時期の演奏だ。

さて、まずエヴァンスがソロで1コーラスのテーマを演奏している。テンポ・ルバートで弾いているが、特にCの13小節目からはリズムを崩しているので、便宜的に2/4拍子を交えた表記をしている。Dからイン・テンポで4/4拍子のスウィングになり、ベースとドラムが加わる。この後、トリオでの演奏の場合はピアノでもう一度テーマが弾かれるが、ここではキャノンボールがテーマを吹いているのでアルトの記譜音で表記した。いつものファンキー調とはひと味違ったプレイだ。ともあれ、ピアノ・パートはピアノひとりで弾くには最適のスコアなので、ぜひトライしてみてほしい。

「ノウ・ホワット・アイ・ミーン」
キャノンボール・アダレイ・ウィズ・ビル・エヴァンス
ビクターエンタテインメント VICJ-60330

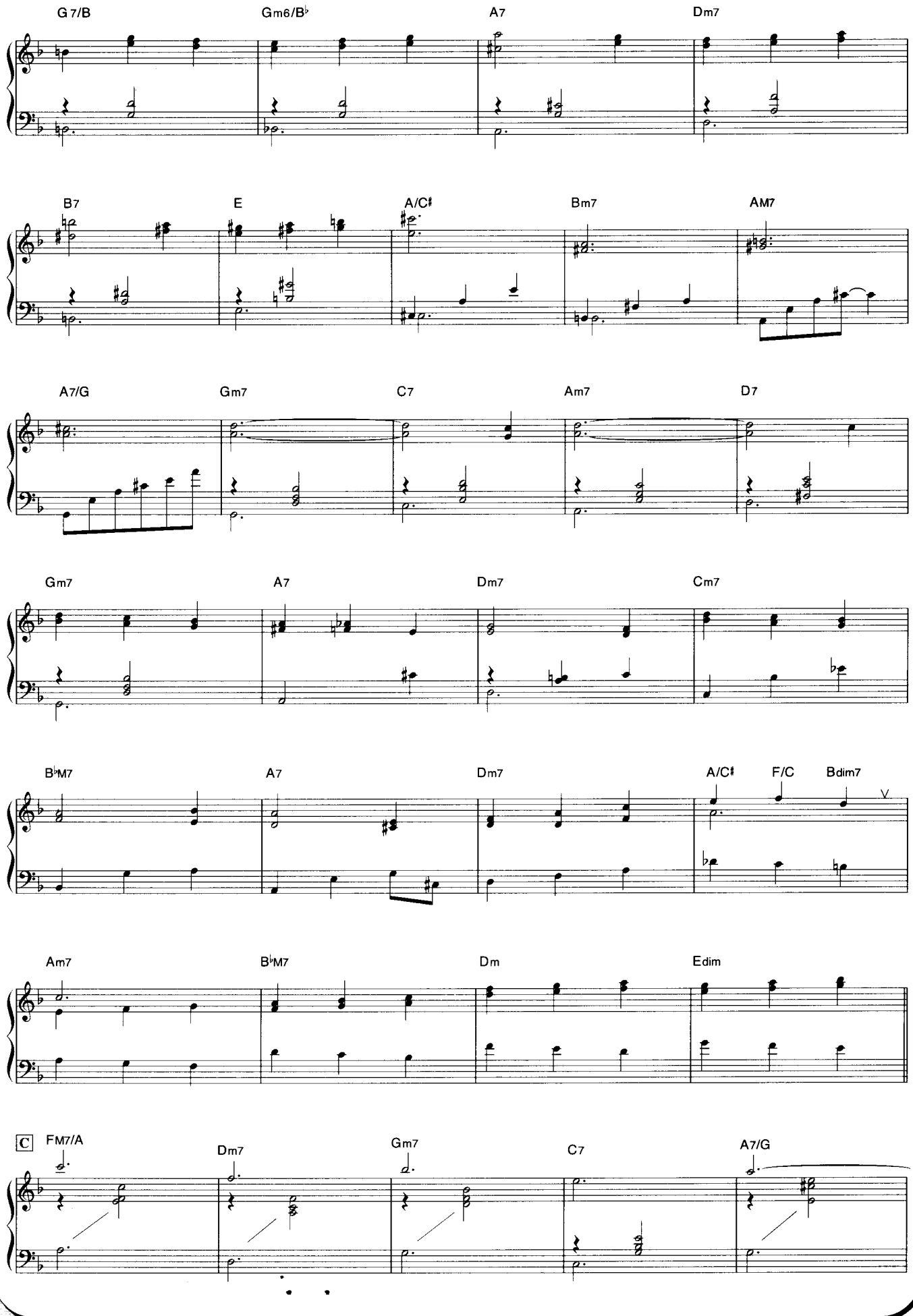
〈採譜：河本芳子／解説：北原英司〉

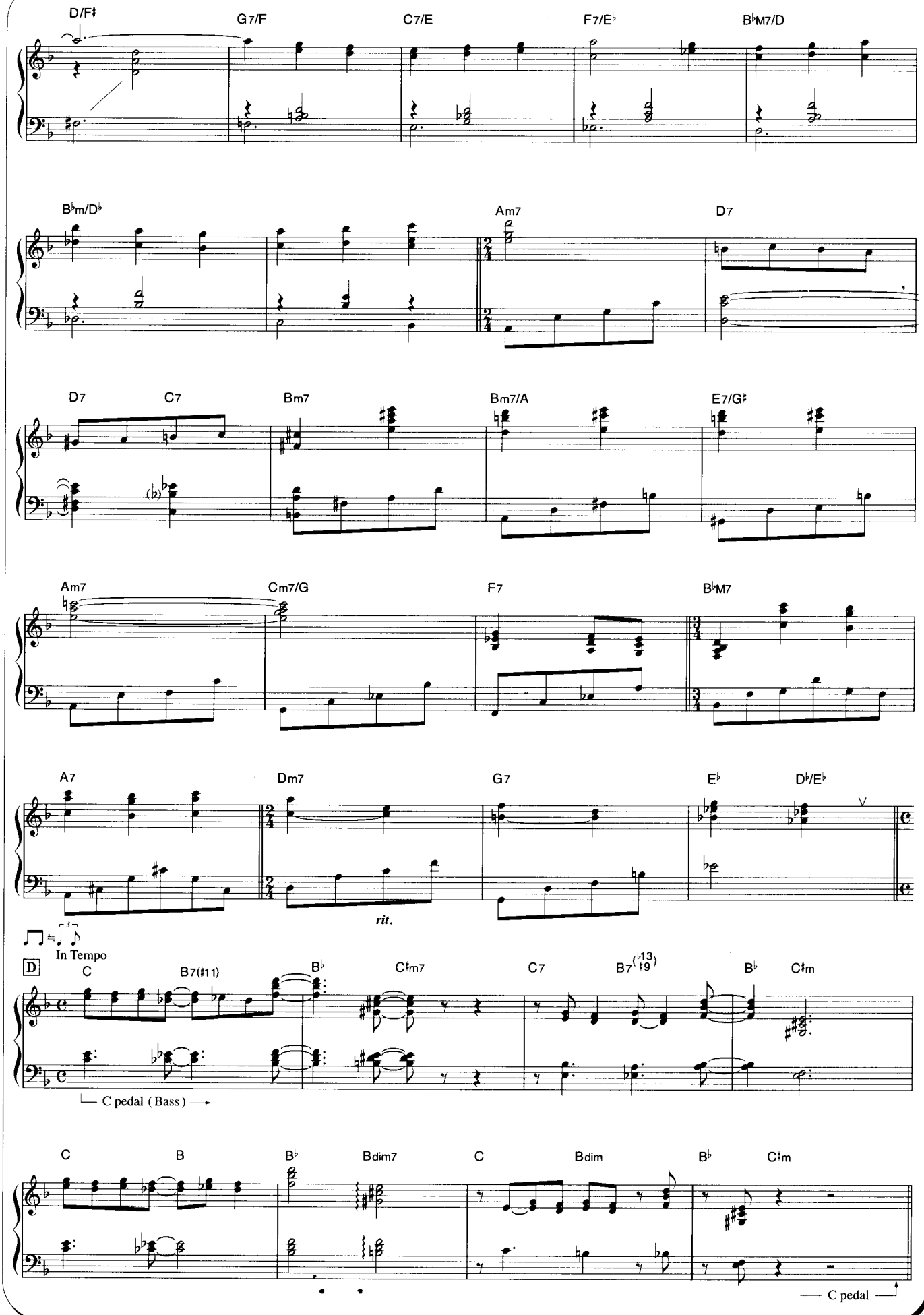


WALTZ FOR DEBBY: MUSIC by BILL EVANS
TRO - © Copyright 1964 and 1965 by FOLKWAYS MUSIC PUBLISHERS, INC., New York, N.Y., U.S.A.
Rights for Japan controlled by TRO Essex Japan Ltd., Tokyo
Authorized for sale in Japan only

「ワルツ・フォー・デビー」

WALTZ FOR DEBBY played by BILL EVANS

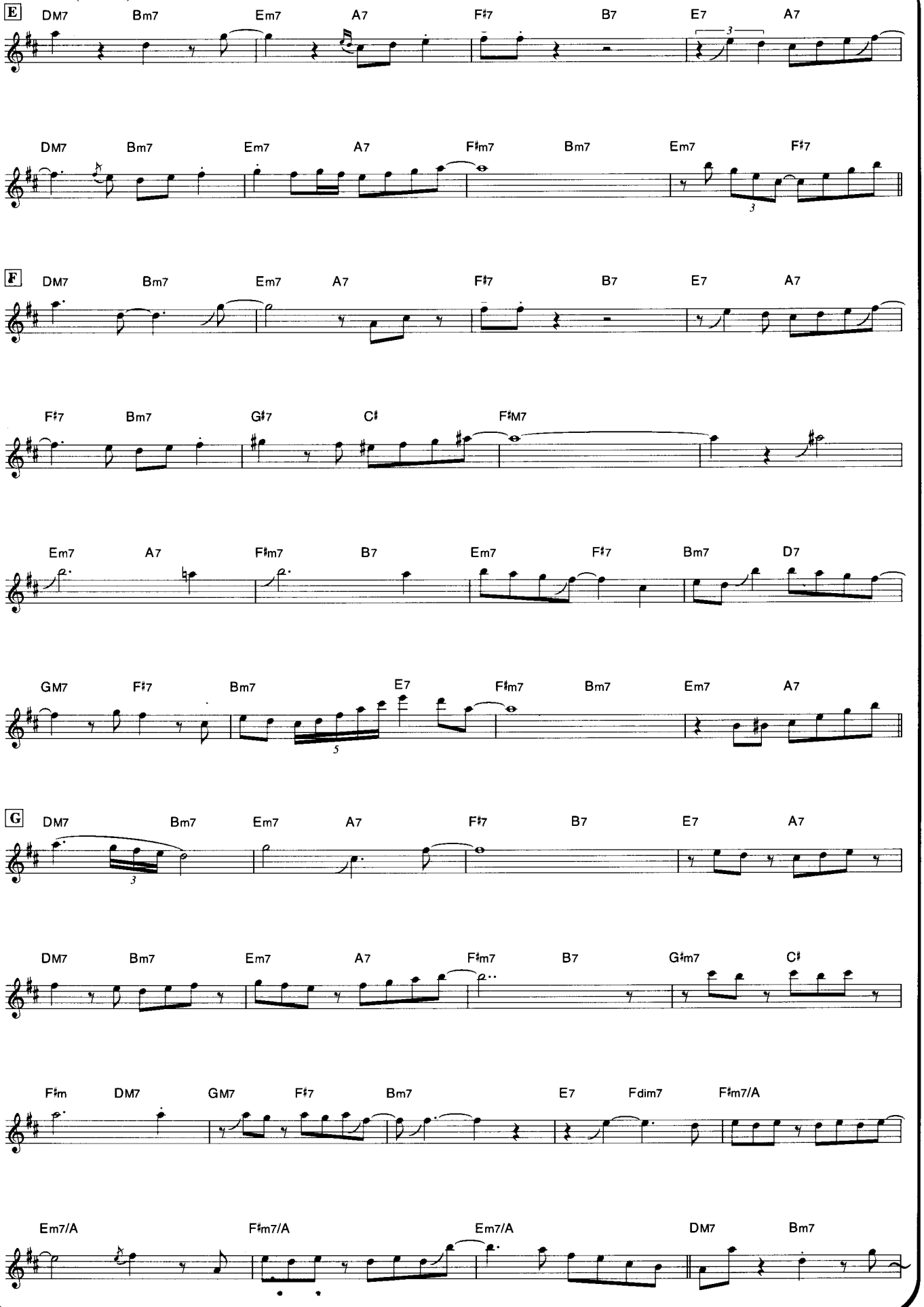



D/F♯
G7/F
C7/E
F7/E♭
B♭M7/D
B♭m/D♭
Am7
D7
D7
C7
Bm7
Bm7/A
E7/G♯
Am7
Cm7/G
F7
B♭M7
A7
Dm7
G7
E♭
D♭/E♭
rit.
In Tempo
D
C
B7(♯11)
B♭
C♯m7
C7
B7(♭13 ♯9)
B♭
C♯m
C pedal (Bass)
C
B
B♭
Bdim7
C
Bdim
B♭
C♯m
C pedal

「ワルツ・フォー・デビー」

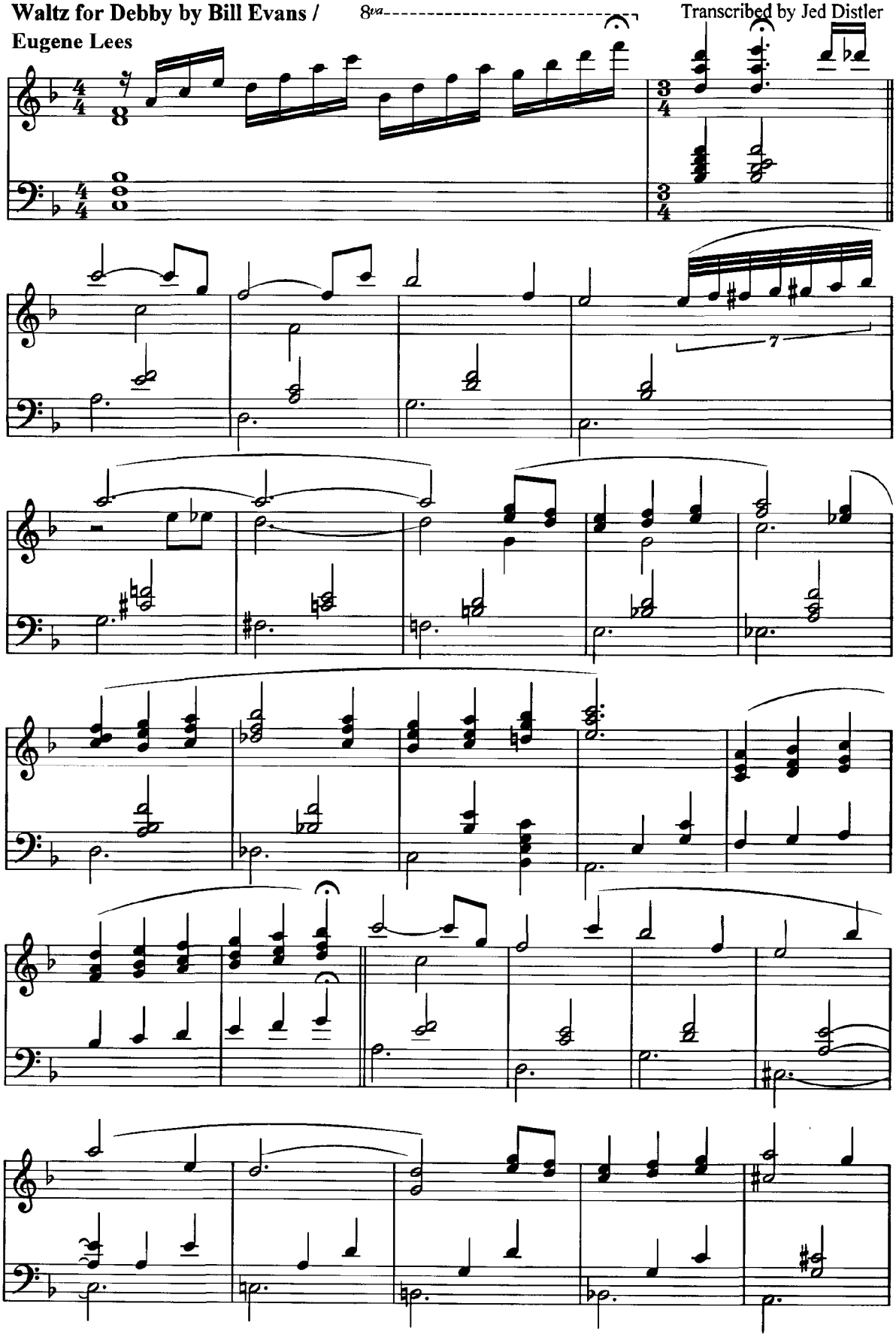
WALTZ FOR DEBBY played by CANNONBALL ADDERLEY

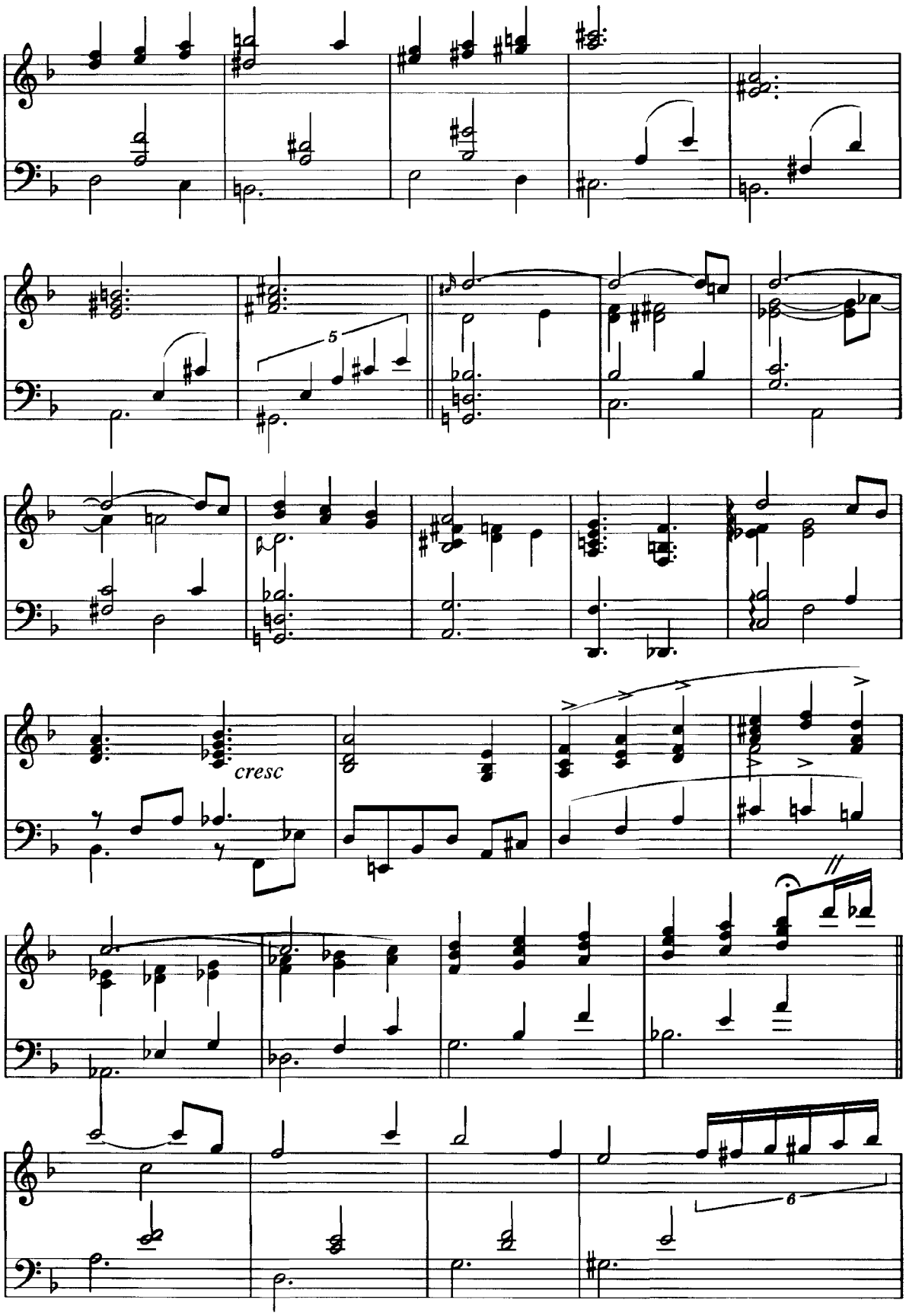
in E♭ (A.Sax)

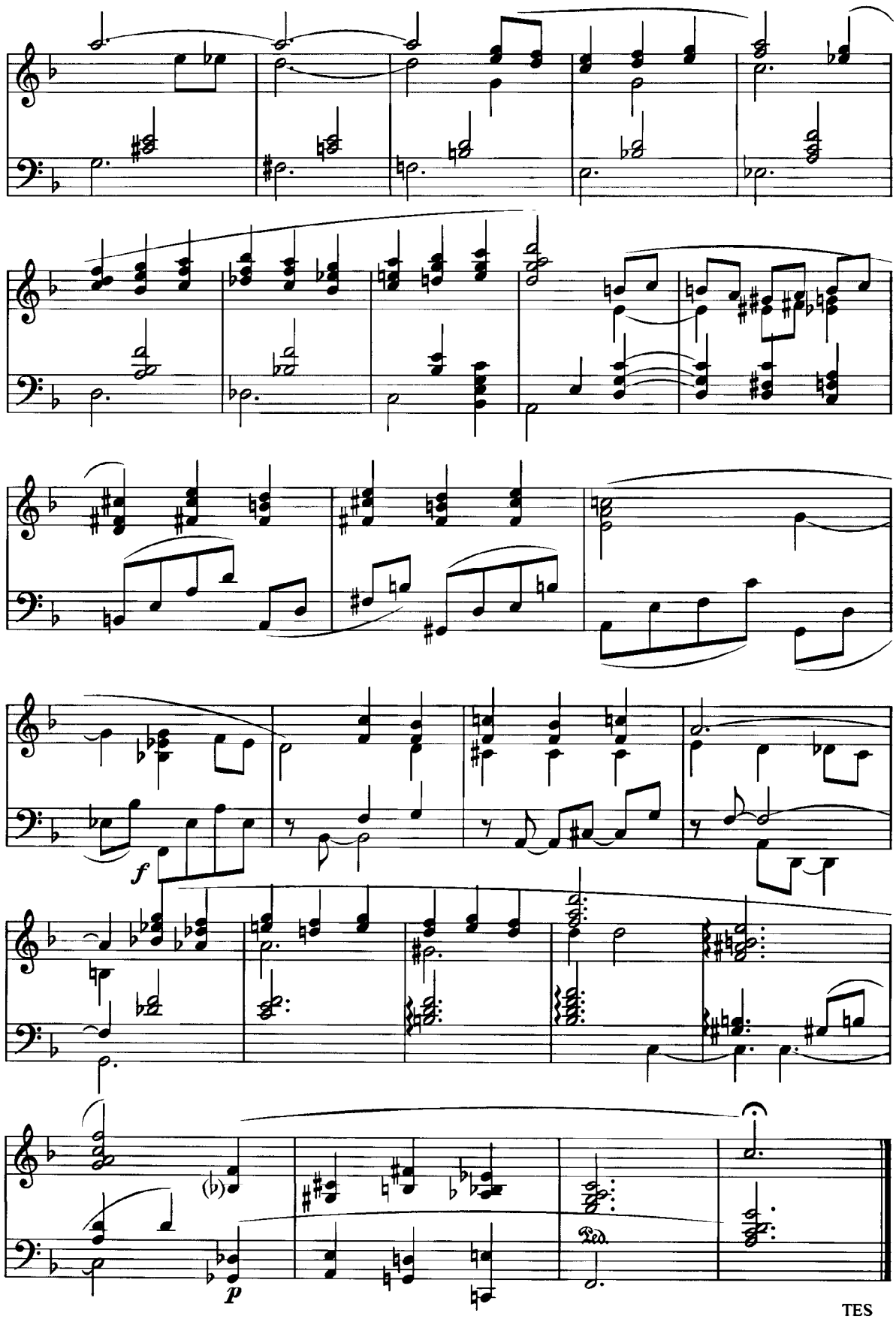


Waltz for Debby by Bill Evans / Eugene Lees

Transcribed by Jed Distler




5
cresc
6



TES